青森県埋蔵文化財調査報告書　第464集

倉越（２）遺跡Ⅲ
太　田（２）遺　跡

－国道４号七戸バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２００９年３月

青森県教育委員会

第464集

倉越(2)遺跡Ⅲ・太田(2)遺跡

二〇〇九・三

青森県教育委員会

この印刷物は400部作成し、印刷経費は１部当たり2,961円です。

青森県埋蔵文化財調査報告書　第464集

倉越（２）遺跡Ⅲ
太 田（２）遺 跡

－国道４号七戸バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２００９年３月

青森県教育委員会

序

七戸川とその支流の周辺には数多くの遺跡や史跡が残されています。青森県埋蔵文化財調査センターでは、この地域に計画された国道４号七戸バイパス建設事業に伴って、平成15年度から事業予定地内の発掘調査を進めてきました。平成19年度には七戸町太田（２）遺跡の発掘調査、平成19・20年度は七戸町倉越（２）遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、太田（２）遺跡では、弥生時代を主体とする遺物が出土し、また、倉越（２）遺跡からは平安時代の遺物が出土し、竪穴住居跡や土坑など古代の集落の一部を検出しました。これらは、今後の集落遺跡の研究等において、貴重な資料となり得るものです。

本報告書は、これらの調査成果をまとめたものです。この成果が今後、青森県の埋蔵文化財の保護と研究に活用され、地域社会の歴史・文化への普及活動に資することを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導、御協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成21年３月

青森県埋蔵文化財調査センター
所　長　伊　藤　博　文

例　　言

1　本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが平成19・20年度実施した国道４号七戸バイパス建設事業に伴う倉越（２）遺跡及び太田（２）遺跡の発掘調査報告書である。

2　倉越（２）遺跡の所在地は、上北郡七戸町字倉越地内、太田（２）遺跡の所在地は、上北郡七戸町字太田地内である。青森県遺跡番号は、倉越（２）遺跡が41064、太田（２）遺跡が41089である。

3　本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、青森県埋蔵文化財調査センター　工藤次長、成田副参事、大平文化財保護主査が分担し、執筆者名は各項目末に記した。依頼原稿の執筆者名は文頭に記した。

4　発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した国土交通省東北地方整備局　青森河川国道事務所が負担した。

5　出土資料の鑑定及び分析については以下の諸氏・機関に依頼・委託した。（敬称略）

　　石器の石質鑑定　　青森県立郷土館学芸員　島口　天

　　放射性炭素年代測定　　株式会社　加速器分析研究所

　　遺物の写真撮影はシルバーフォトに委託した。

6　挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真の縮尺は統一していない。

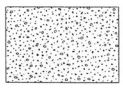
7　土層等の色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1996）を使用した。

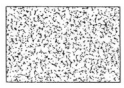
8　本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の２万５千分の１「七戸」の地形図を複製したものである。

9　図中で用いたスクリーントーンの指示内容は、以下のとおりである。

焼土範囲（遺　構）

スリ範囲（石　器）


タタキ範囲（石　器）


溶着物（土製品）

10　引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と西暦年で示した。

11　発掘調査及び本報告書作成における出土品・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

12　発掘調査及び本報告書作成にあたり、次の機関並びに諸氏からご教示、ご指導を頂いた。（アイウエオ順、敬称略）

　一町田工・岩井浩介・大久保学・小山彦逸・児玉大成・工藤清泰・笹森一郎・佐藤智雄・佐野忠史・神昌樹・神康夫・嶋影荘憲・滝本学・瀬川滋・田中寿明・長尾正義・中嶋友文・長尾正義・福田友之・古屋敷則雄・村木淳

目　　次

序
例言
目　次

第１編　序説 …… 1
　第１章　調査概要 …… 3
　　第１節　調査に至る経過 …… 3
　　第２節　調査要項 …… 3
　　第３節　調査方法と整理方法 …… 5
　　１．調査方法　２．整理方法
　　第４節　調査経過 …… 6
　　１．平成19年度調査　２．平成20年度調査
　第２章　遺跡周辺の地形と地質 …… 7

第２編　倉越（２）遺跡Ⅲ …… 9
　第１章　基本層序と地形 …… 11
　第２章　検出遺構と出土遺物 …… 12
　　第１節　検出遺構と出土遺物 …… 12
　　１．竪穴住居跡　２．土坑　３．溝状土坑　４．溝跡　５．ピット・ピット群
　　第２節　遺構外出土遺物 …… 38
　　１．縄文土器　２．石器　３．古代から近世の遺物
　第３章　まとめ …… 40

第３編　太田（２）遺跡 …… 41
　第１章　基本層序と地形 …… 43
　第２章　検出遺構と出土遺物 …… 43
　　第１節　検出遺構と出土遺物 …… 43
　　１．土坑　２．溝状土坑　３．溝跡　４．ピット群
　　第２節　遺構外出土遺物 …… 53
　　１．土器　２．石器
　第３章　まとめ …… 56

遺物観察表 …… 57

第４編　自然科学分析 …… 59
　第１章　放射性炭素年代測定 …… 60

写真図版 …… 65
抄録 …… 83

挿図目次

図１　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
図２　地形分類図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
倉越（２）遺跡
図３　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
図４　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
図５　第24号竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
図６　第33号竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
図７　第34号竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
図８　第35号竪穴住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
図９　第35号竪穴住居跡（２）・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
図10　第35号竪穴住居跡（３）・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
図11　第36号竪穴住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
図12　第36号竪穴住居跡（２）・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
図13　第37号竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
図14　第38号竪穴住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
図15　第38号竪穴住居跡（２）・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
図16　土坑（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
図17　土坑（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
図18　土坑（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
図19　溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
図20　溝跡・ピット群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
図21　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
太田（２）遺跡
図22　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
図23　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
図24　土坑（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
図25　土坑（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
図26　第１号溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
図27　第２号溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
図28　第３号溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
図29　第４号溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
図30　第１号溝跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
図31　ピット群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
図32　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

写真目次

倉越（２）遺跡
写真１　調査全景・調査風景・・・・・・・・・・・・・・ 66
写真２　遺跡遠景・調査風景・・・・・・・・・・・・・・ 67
写真３　竪穴住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
写真４　竪穴住居跡（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
写真５　竪穴住居跡（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
写真６　土坑（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
写真７　土坑（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
写真８　土坑（３）・溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・ 73
写真９　溝跡・ピット群（１）・・・・・・・・・・・・・・ 74
写真10　ピット群（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
写真11　竪穴住居跡出土遺物（１）・・・・・・・・・・ 76
写真12　竪穴住居跡出土遺物（２）・・・・・・・・・・ 77
写真13　竪穴住居跡（３）・土坑・ピット群・
遺構外出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・ 78
写真14　遺構外出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・ 79
太田（２）遺跡
写真15　遺跡遠景・土坑（１）・・・・・・・・・・・・・・ 80
写真16　土坑（２）・溝状土坑・溝跡・ピッ
ト群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
写真17　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82

第１編　序　説

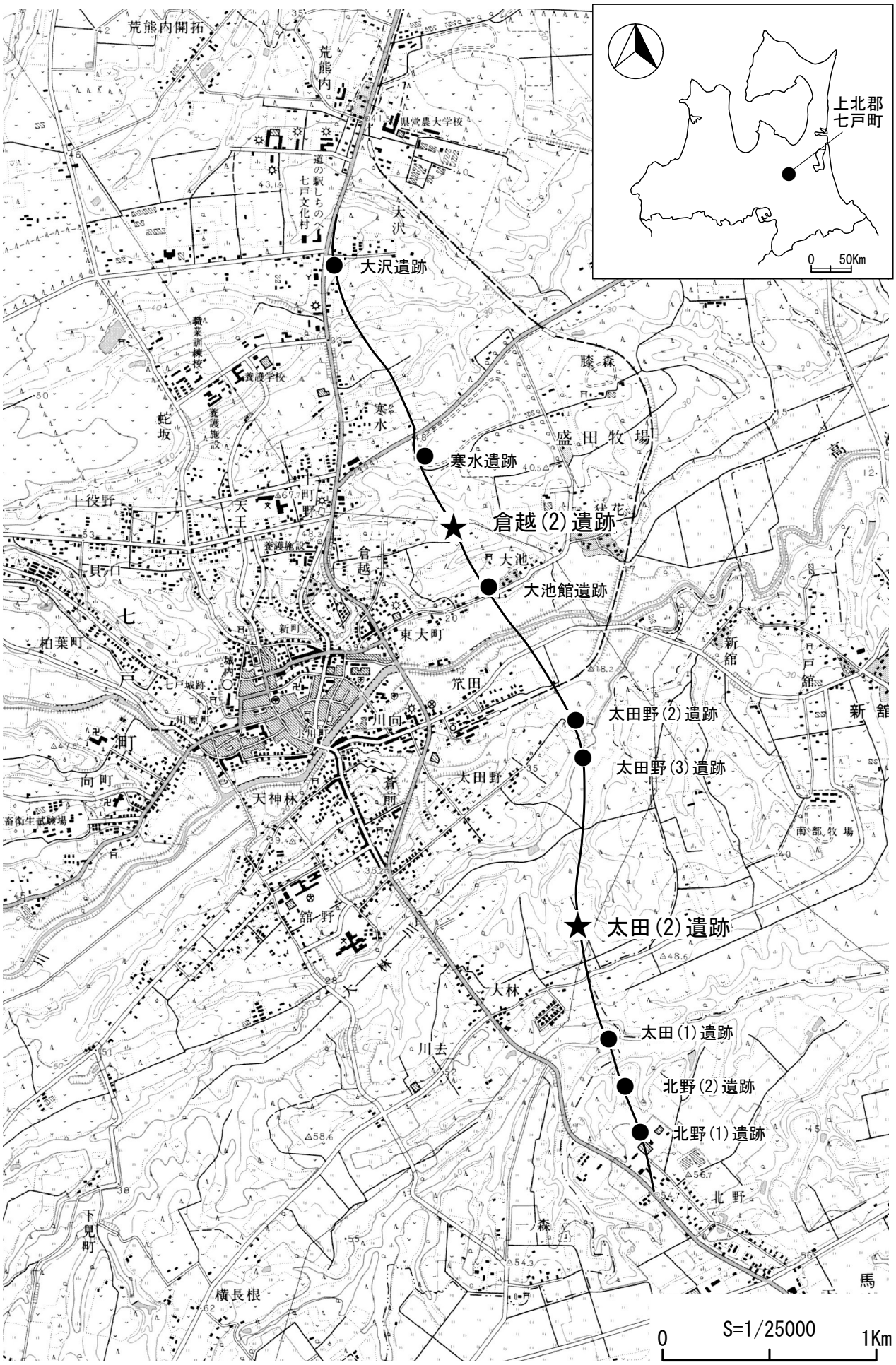

上北郡
七戸町
0 50Km
大沢遺跡
寒水遺跡
倉越(2)遺跡
大池館遺跡
太田野(2)遺跡
太田野(3)遺跡
太田(2)遺跡
太田(1)遺跡
北野(2)遺跡
北野(1)遺跡
荒熊内開拓
荒熊内
県営農大学校
道の駅しちのへ
七戸文化村
大沢
職業訓練校
養護学校
蛇坂
寒水
盛田牧場
十役野
天王
十町野
倉越
大池
東大町
新町
柏葉町
七戸城跡
川原町
小川町
川向
笊田
太田野
天神林
蒼前
館野
大林
川去
北野
南部牧場
新館
戸館
下見町
横長根
S=1/25000
0
1Km

図１　遺跡位置図

第１章　調査概要

第１節　調査に至る経過

国道４号七戸バイパスは、十和田市と七戸町を結ぶ延長5.7㎞、幅員28.0m（暫定14.5m）のバイパス道路である。七戸町内の交通混雑や隘路区間の解消、冬期の安全の確保、沿道環境の改善を目的に計画され、平成元年に事業着手、平成７年度に終点部の交差点改良に着手されている。

この建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いをめぐって、県教育庁文化財保護課・国土交通省青森河川国道事務所・七戸町の三者間での協議により平成15年度から青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなった。青森県埋蔵文化財調査センターではこれを受け、平成15年度に倉越（２）遺跡・大池館遺跡の２遺跡、平成16年度には大沢遺跡・寒水遺跡・倉越（２）遺跡（継続）・大池館遺跡（継続）の４遺跡、平成17年度には大池館遺跡（継続）及び、高瀬川南岸の太田野（２）遺跡・太田野（３）遺跡の３遺跡調査を実施した。

本報告書は平成19年度及び20年度に実施された倉越（２）遺跡（継続）、平成19年度に実施した太田（２）遺跡の調査成果を掲載したものである。

なお、倉越（２）遺跡及び太田（２）遺跡に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、平成19年６月に青森河川国道事務所長名で提出され、同年７月に県教育庁文化財保護課が当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。また、平成20年度の倉越（２）遺跡の追加工事に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、平成20年７月に提出され同年８月に埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

第２節　調査要項

１　調査目的

国道４号バイパス建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する倉越（２）遺跡及び太田（２）遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用に資する。

２　発掘調査期間

（平成19年度）

平成19年７月17日～同年10月12日（倉越（２）遺跡、太田（２）遺跡）

（平成20年度）

平成20年９月２日～同年９月12日（倉越（２）遺跡）

３　遺跡名及び所在地

倉越（２）遺跡（青森県遺跡番号４１０６４）

上北郡七戸町字倉越地内

太田（２）遺跡（青森県遺跡番号４１０８９）

上北郡七戸町字太田地内

４　調査面積

（平成19年度）

倉越（２）遺跡　１，３００平方メートル

太田（２）遺跡　２，８００平方メートル

（平成20年度）

倉越（２）遺跡　５０平方メートル

５　調査委託者

国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所

６　調査受託者

青森県教育委員会

７　調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

８　調査体制

（平成19年度）

調査指導員　村越　潔　国立大学法人　弘前大学名誉教授（考古学）

調査員　高島　成侑　前八戸工業大学教授（建築学）

佐々木　辰雄　青森県立八戸中央高等学校教諭（地質学）

調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター

所長　末永　五郎（平成20年３月　退職）

次長　三宅　徹也（平成20年３月　退職）

総務ＧＬ　櫻庭　孝雄

調査第二ＧＬ　工藤　大　（現　次長）

副参事　成田　滋彦

文化財保護主査　佐藤　真弓

文化財保護主査　大平　哲世

調査補助員　小幡　育恵（平成20年３月　退職）・梅田　裕哉

大室　なつ美（平成19年９月　退職）・工藤　敬大

（平成20年度）

調査指導員　村越　潔　国立大学法人　弘前大学名誉教授（考古学）

調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター

所長　伊藤　博文

次長　工藤　大

総務ＧＬ　櫻庭　孝雄

副参事　成田　滋彦

第３節　調査方法と整理方法

１　調査方法

調査は、グリッド法を基本とした分層発掘を行った。

倉越(２)遺跡のグリッドの設定は平成15年度の倉越(２)遺跡で使用したグリッドを継続して使用した。すなわち、国土交通省公示の平面直角座標第Ｘ系（旧日本測地系）のＸ＝77,400、Ｙ＝27,500を原点ＩＡ－0とし、Ｘ軸は北方向を正として、Ｙ軸方向は東方向を正として４ｍ毎のグリッドを設定した。Ｘ軸はローマ数字（Ｉ～）とアルファベット（Ａ～Ｙ）の組み合わせで正方向にＩＡ・ＩＢ・・・ＩＹ・ⅡＡ・ⅡＢ・・・と呼称し、Y軸は正方向にアラビア数字で１・２・３・・・と呼称した。これによるグリッドの呼称はグリッドの南西隅をグリッド名として用い軸線、ＶＥ－170のように呼称している。

太田(２)遺跡のグリッドは、国土交通省公示の平面直角座標第Ｘ系（旧日本測地系）のX=76,360、Y=28,360を原点ＤＡ－80とし、Ｘ軸は北方向を正として、Ｙ軸方向は東方向を正として４ｍ毎のグリッドを設定した。Ｘ軸はアルファベット（Ａ～Ｙ）の組み合わせで正方向にＤＡ・ＤＢ・・・と呼称し、Ｙ軸は正方向にアラビア数字で１・２・３・・・と呼称した。グリッドの呼称は南西隅をグリッド名として用い、ＤＥ－100のように呼称している。

ベンチマークは基準点から遺構精査の必要に応じて移動した。

土層の掘削は、表土については調査担当者立会いのもと、重機を用いて除去した。遺構は堆積状況を把握するために、規模や必要に応じて適宜二分法・四分法を用い、土層観察用ベルトを残しながら行った。土層の名称は、基本層序については上位から下位にローマ数字を、遺構の堆積土については上位から下位に算用数字を付した。土層注記には『新版標準土色帖』を用いた。

実測図の作成は、平面図は株式会社Cubic「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で行った。図面の縮尺は１／20を基本とし、炉などは必要に応じて１／10でも作成している。

遺構の呼称はその性格により竪穴住居：SI、土坑：SK、溝状土坑：SV、溝跡：SDの略号を用いた。原則的に検出順に命名したが、調査の進展により一部に欠番がある。

遺物の取り上げは、遺構及びグリッド毎に層位毎で取り上げて、必要に応じて出土地点の図化及び標高を記した。なお、遺構内のもので出土層位が不明なものは、覆土一括で取り上げを行った。

写真撮影は、35㎜カメラでモノクロ及びリバーサルで撮影したほか、デジタルカメラも使用した。

２　整理方法

平成19年度に発掘調査した倉越(２)遺跡及び太田(２)遺跡の遺物の整理作業については、平成20年３月までに水洗い、乾燥、注記を行った。４月からは接合・復元を行った。５月からは土器の石膏入れ・土器の選別を行い、７月には土器の選別、８月には拓本をとり、９月には土器の断面実測を行った。石器については９月に選別を行い、10月に実測、11月に石質鑑定を行った。また、土器及び石器のトレース作業は10月以降、順次行った。

遺構については発掘調査終了後に室内でデジタルトレースを行い、平成20年12月中に多くの遺構図面をデジタル化した。遺構図面の修正には株式会社Cubicの「遺構実測支援システム」を使用した。

平成20年度に発掘調査した遺物の整理については、平成20年10月に水洗い・乾燥・注記を行った。11月からは接合・復元及び石膏入れ、土器の選別作業を行い、その後に土器実測作業を行い、トレー

ス作業は12月に終了した。

遺構については、平成19年度の遺構と同様にデジタルトレースを行い、デジタル化した。

第４節　調査経過

１　平成19年度調査

当初の発掘調査期間は平成19年８月１日から同年10月31日までの予定であったが、工事を急いでいる事業者側からの要望で、予定を早めて７月17日から発掘調査を開始することになった。調査の開始に先立って、調査対象区域のうちバイパス本線部分約600㎡の表土剥ぎを重機で行ってから、７月16日に発掘器材等を現地に搬入した。バイパス本線部分の粗掘り作業は７月中に全面終了し、古代の竪穴住居跡２軒と土坑９基、溝状土坑１基等の遺構を検出した。検出遺構については平面形等を確認次第精査に入り、遺構の精査作業と併せて地形図を作成し、８月３日にはバイパス本線部分の調査を終了した。取付道路部分約700㎡の調査は７月末から開始したが、立木の伐採作業が遅れていたため、全面発掘に先立って試掘作業を実施した。

８月中旬から調査区西側の表土除去及び遺構精査を並行して行った。７月から８月にかけて行った先行試掘では表土が厚いところが確認されていたため、８月下旬に重機による表土処理を行った。遺構精査は順調に進んだものの、南北に横切る谷が２本存在し、底部からの湧水が多く、その部分の遺構検出作業は難航した。９月21日に調査を終了し、プレハブを撤去した。

太田（２）遺跡では、８月29日から重機による表土処理を開始した。倉越（２）遺跡の調査と並行して行うこととし、９月４日から機材と人員を振り分けて遺構検出作業を開始した。調査区北側は立ち木の伐採による切り株が多く、検出には時間がかかったが、順次遺構精査を行った。天候にも恵まれ、調査は順調に進み、10月12日には機材・遺物等を撤収し、全調査を終了した。

２　平成20年度調査

平成20年９月２日に調査を開始した。調査区は平成16年度に調査を行った地区の隣接地であり、畑地に向かう付け替え道路部分50㎡である。

平成16年度の調査で検出した第24・33号竪穴住居跡が調査区にかかる事が予想されていた。作業は天候に恵まれ順調に進み、第24・33号竪穴住居跡の東側部分を確認し、さらに東側を精査したところ新たな住居跡を検出し第38号竪穴住居跡とした。

調査の結果、今回の調査区では３軒の平安時代の住居跡を確認した。

９月12日に全ての調査を終了して調査委託者に引き渡し、発掘調査を完了した。

第２章　遺跡周辺の地形と地質

本遺跡周辺の地形については、青森県教育委員会から既刊（佐々木2005，同2006）の佐々木辰雄調査員による論述が詳しいため、ここではそれらを参考にして概略を記す。

奥羽脊梁山脈の北端にあたる八甲田山系、その東には三本木原台地とよばれる広大な台地が太平洋まで広がっている。この地域の台地には海成・河成段丘が発達しており、高位のものより高位面、七百面、天狗岱面、高館面、根城面、柴山面、七戸面、三本木面などに分けられている。

倉越（２）遺跡は、七戸町の市街地から北東に数百ｍの台地縁辺部にある。また、太田（２）遺跡は、市街地から南東に約１㎞の台地の上にある。三本木原台地の全体からすると、それらは中央西端部にあたり、山地との境目に近い場所となる。

また、西にそびえる八幡岳に源を発した作田川と和田川は合流して七戸川となり、さらに坪川や赤川を集めて小川原湖へ注いでいる。作田川と和田川の合流点付近における谷底平野には七戸町の市街地が広がる。この谷底平野は南北幅は約１㎞と狭く、北にも南にも急崖で台地と接しており、その高低差は約20ｍ前後である。

遺跡のある台地は、その堆積物が砂礫や、軽石流堆積物の二次堆積であることから、河成の扇状地堆積による三本木面に相当するとされる。（水野・堀田，1990）この周辺での三本木面での標高は、西部の山地との境付近で70～80ｍであり、作田川と倉岡川とに挟まれた奥羽種畜牧場のあたりではほとんど平坦な地形となっている。それでも東部に徐々に標高を下げ、末端部で30～40ｍとなり、海成段丘の高館面へと移行している。通常は地形的に高位の段丘面が古いのであるが、ここではより古い時代の高館面を扇状地堆積物の三本木面が覆っていることになる。（大平）

引用・参考文献

佐々木　辰雄（2005）「第Ⅰ章　倉越（２）遺跡の地形と地質」『倉越（２）遺跡』青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第389集
佐々木　辰雄（2006）「第５章　遺跡周辺の地形と地質」『倉越（２）遺跡Ⅱ』青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第417集

地 形 区 分 図

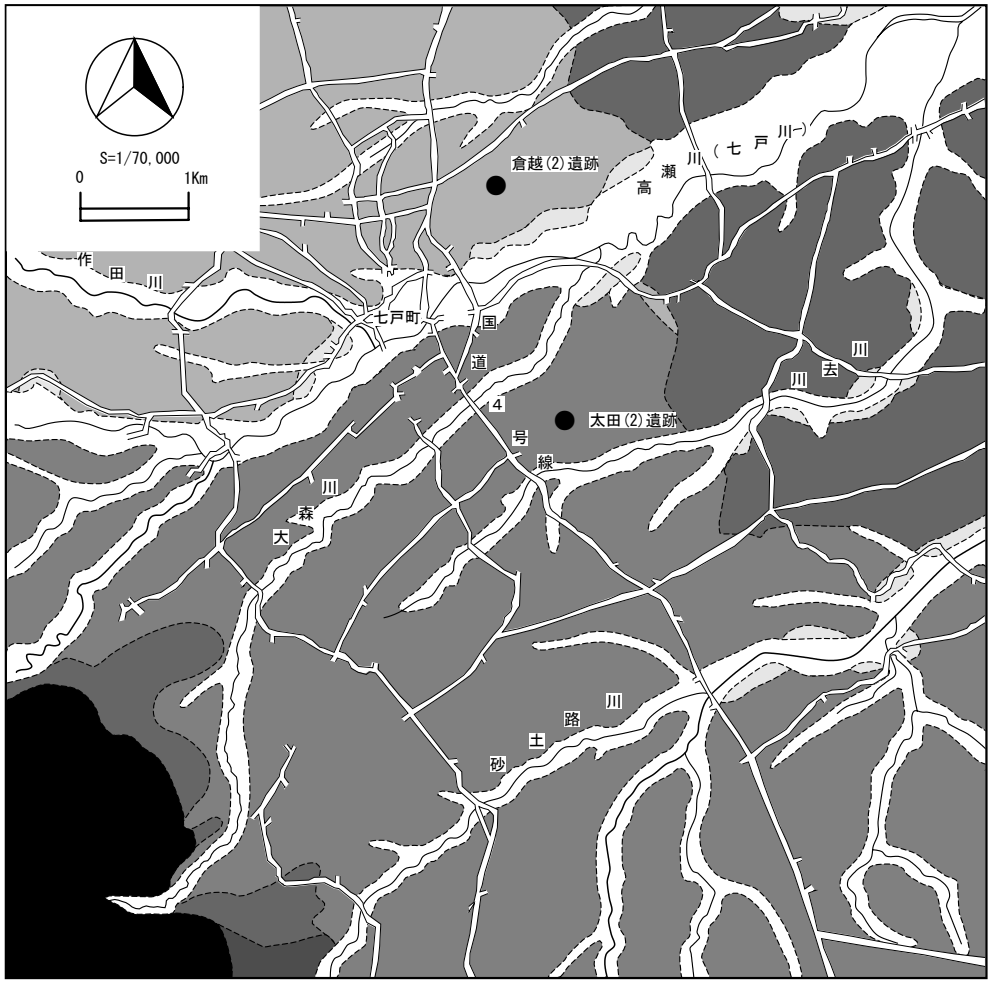


図２　地形分類図

凡　　例

- 沖 積 面
- 低位河岸段丘面
- 三 本 木 面
- 七 戸 面
- 高 館 面
- 七 百 面
- 山　　地

地分類図
水野・堀田(1991)七戸
水野・堀田(1989)十和田
部分を簡略化

第２編　倉越（２）遺跡Ⅲ

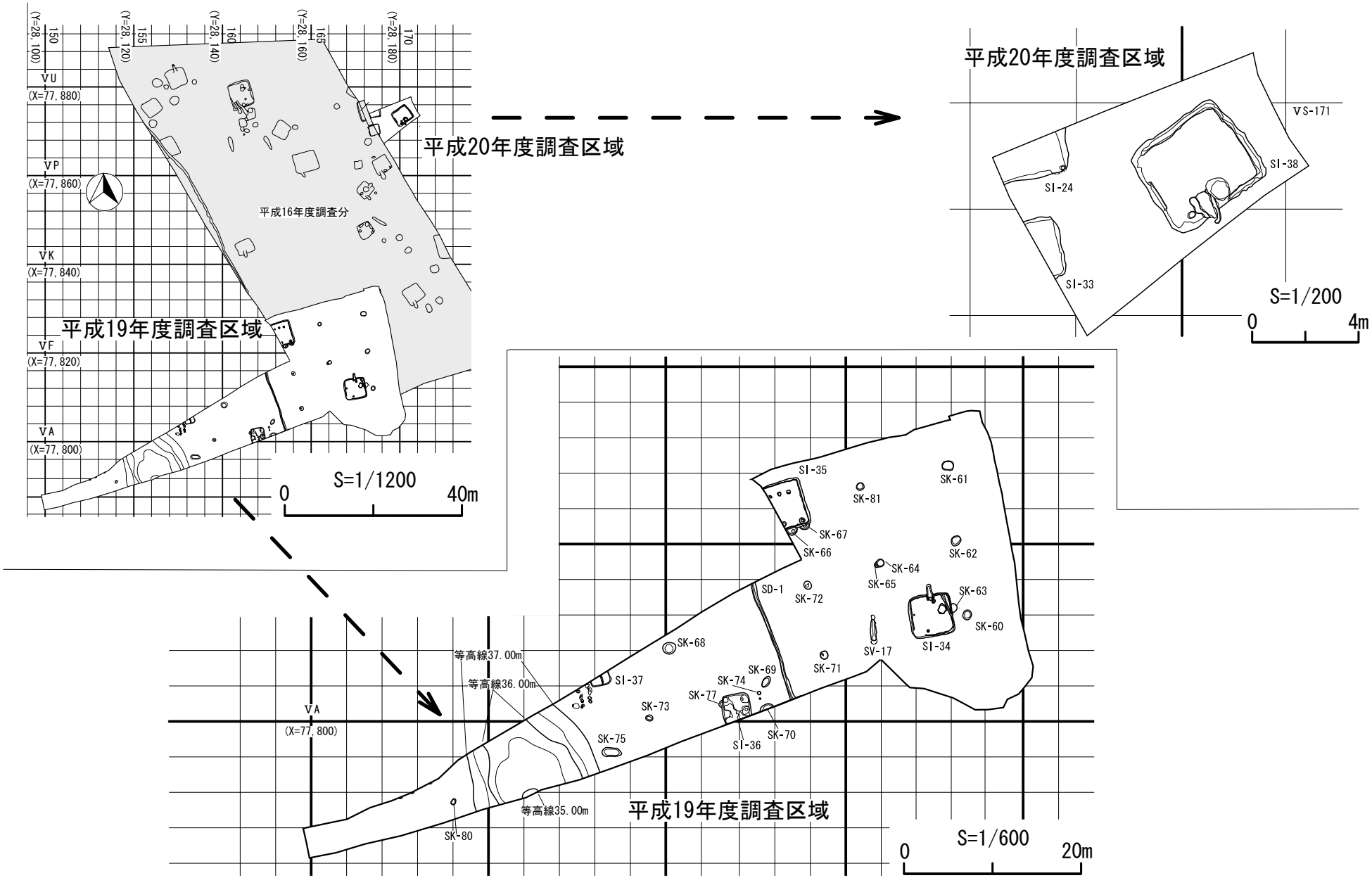

平成20年度調査区域
平成16年度調査分
平成19年度調査区域
S=1/1200
0
40m
VU
(X=77,880)
VP
(X=77,860)
VK
(X=77,840)
VF
(X=77,820)
VA
(X=77,800)
150
155
160
165
170
(Y=28,100)
(Y=28,120)
(Y=28,140)
(Y=28,160)
(Y=28,180)
平成20年度調査区域
VS-171
SI-38
SI-24
SI-33
S=1/200
0
4m
SI-35
SK-61
SK-81
SK-67
SK-66
SK-62
SK-64
SK-65
SK-63
SK-60
SD-1
SK-72
SI-34
SV-17
SK-71
SK-68
等高線37.00m
等高線36.00m
SI-37
SK-69
SK-74
SK-77
SK-73
SK-70
SI-36
SK-75
SK-80
等高線35.00m
平成19年度調査区域
S=1/600
0
20m

図3　遺構配置図

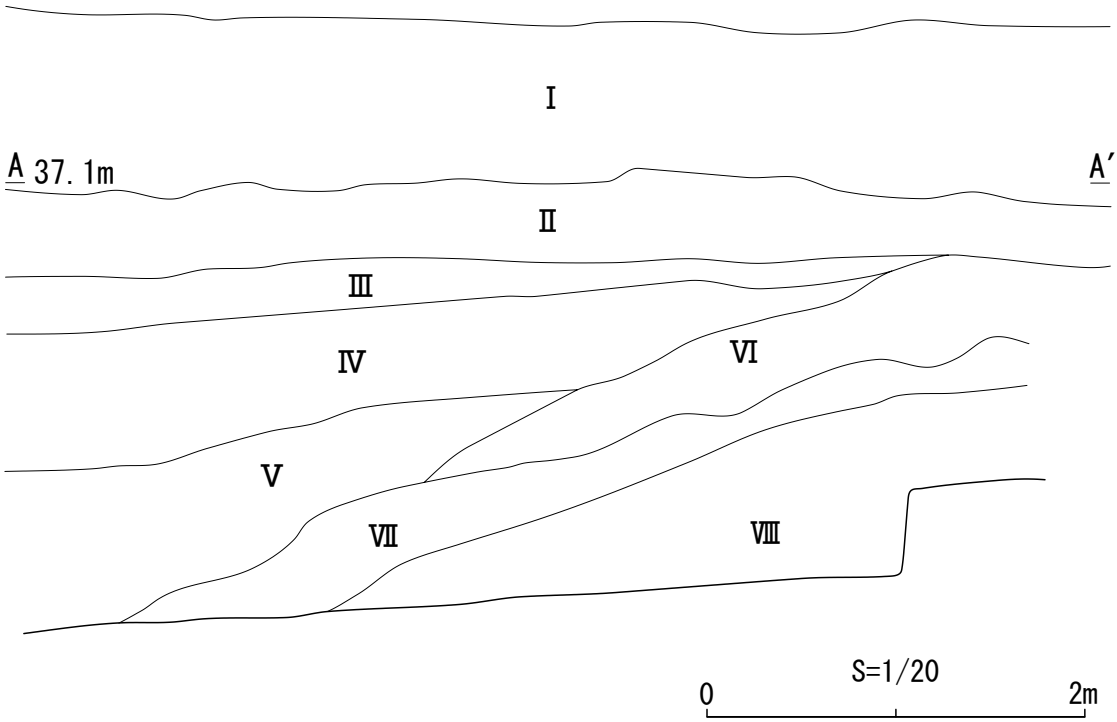
第１章　基本層序と地形

第Ⅰ層は黒色の表土層で、草木の根が目立つ。第Ⅱ層も黒色土であるが、径１㎜ほどの十和田ｂの軽石を含んでいる。第Ⅲ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層はいずれもアワズナとよばれる中撥浮石を含む層である。第Ⅲ層は黒褐色土の中に黄褐色土が斑状に入る。第Ⅳ層は全体的に暗褐色となり、第Ⅴ層ではやや黒褐色土となる。第Ⅵ層は暗褐色土と黄褐色土の漸移層である。第Ⅶ層は黄褐色土で、粘土質である。第Ⅷ層は灰黄色土で軽石を含む。

なお、第Ⅲ～Ⅴ層は平成16年度の発掘調査の基本層序である第Ⅲ層を細分化した。また、第Ⅵ層、第Ⅶ層、第Ⅷ層は平成16年度発掘調査の第Ⅳ層、第Ⅴ層、第Ⅵ層に対応する。

調査区の東側半分はおおむね平坦で、遺構が比較的多く見つかっている。西側半分は南北に延びる谷が２本存在し、東の谷は幅14.7ｍ、地表面から深さ4.5ｍある。また、西側の谷は幅11.5ｍ、地表面からの深さは2.0ｍある。２つの谷に挟まれた平坦部では遺構が見つかっているものの、谷の斜面や底部からは遺構は検出されなかった。

（大平）



基本層序堆積土

Ⅰ層	黒色土	10YR2/1	パミス(φ1mm以下)1%、しまり小
Ⅱ層	黒色土	10YR1.7/1	パミス(φ1mm以下)1%、しまり小
Ⅲ層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒(φ2mm以下)2%、炭化物(φ1～2mm)2%、しまり小
Ⅳ層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒(φ2mm以下)3%、炭化物(φ1mm以下)1%、しまり小
Ⅴ層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒(φ4mm以下)10%、炭化物(φ1mm以下)1%、しまり小
Ⅵ層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒(φ5mm以下)7%、黄褐色土(10YR5/6)30%、炭化物(φ1mm以下)1%、しまり小
Ⅶ層	黄褐色土	10YR5/6	炭化物(φ2mm以下)2%、しまりやや小
Ⅷ層	灰黄色土	2.5Y7/2	粘土質土 明黄褐色(10YR6/6)30%、炭化物(φ1～2mm)3%、しまりやや小

図４　基本層序

第２章　検出遺構と出土遺物

第１節　検出遺構と出土遺物

倉越(２)遺跡の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡７軒、土坑19基、溝跡１条、ピット群が２基である。竪穴住居跡については、第34～38号竪穴住居跡が平成19年度に調査したもので、第24・33・38号竪穴住居跡が平成20年度に調査したものである。なお、第23・33号竪穴住居跡は平成16年度にも調査を実施しているが、平成20年度に検出したものは平成16年度の時点では調査区外にあった東側半分を調査したものである。

なお、第34・35号竪穴住居跡、第60～67・81号土坑、第17号溝状土坑については、平成15・16年度の発掘調査で用いた基本土層に基づいて記載している。

１　竪穴住居跡

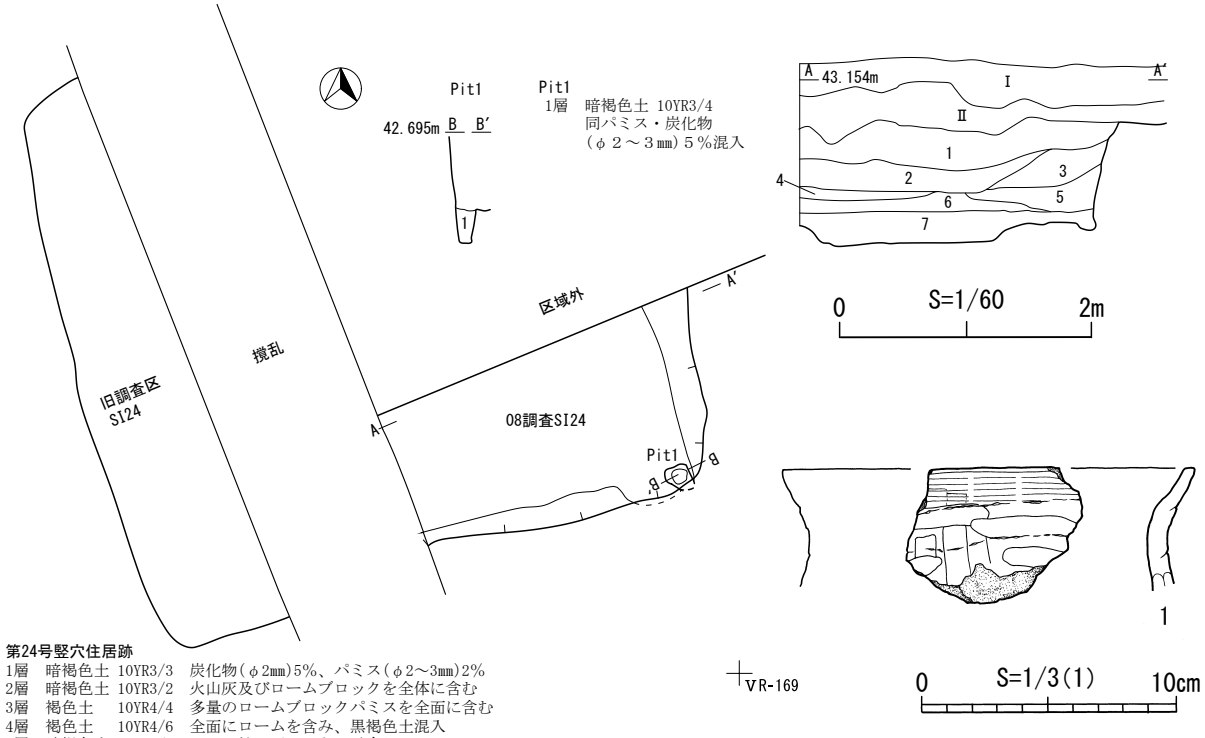
第24号竪穴住居跡（ＳＩ－24）（図５）

［位置］本住居跡は、平成16年度に住居跡の西側を調査し、その部分については報告済み（青森県2006）である。今回は調査済み住居跡の東側部分の調査を行った。

［重複］本住居跡の東側部分を撹乱穴によって一部が壊されている。

［平面形・規模］コーナー部が丸みを持ち方形を呈する。規模は開口部長径（2.5）ｍ・短径（1.26）ｍ、底面長径（2.25）ｍ・短径（1.05）ｍを測る。

［壁・床面］壁は上端から床面にかけて傾斜している。壁高は東壁54㎝・西壁不明・南壁54㎝・北壁82㎝を測る。床面は、ほぼ平坦で堅緻なつくりである。



第24号竪穴住居跡
1層　暗褐色土 10YR3/3　炭化物(φ2㎜)5%、パミス(φ2～3㎜)2%
2層　暗褐色土 10YR3/2　火山灰及びロームブロックを全体に含む
3層　褐色土　10YR4/4　多量のロームブロックパミスを全面に含む
4層　褐色土　10YR4/6　全面にロームを含み、黒褐色土混入
5層　暗褐色土 10YR3/3　ローム粒・パミスを50%含む
6層　黒褐色土 10YR2/3　全面に炭化材・焼土を含む
7層　黄褐色土 10YR5/8　黒色土15%、褐色砂質土5%、黄褐色土3%、明黄褐色粘土3%

図５　第24号竪穴住居跡

［堆積土］堆積土は７層に分層できた。床面を覆う第６層は炭化材・焼土を多く含み第１～５層はロームブロックを多く含んでいる。このことから、本住居跡は火災を受けた後に人為的に埋土されたと考えられる。

［柱穴］東壁コーナー部から１個検出した。形態は不整形で長径23㎝・短径18㎝・深さ27㎝を測る。

［付属施設・周溝・カマド］検出しなかった。

［出土遺物］遺物は土師器破片が５片出土したのみである。図５－１は土師器の口縁部で甕である。

（成田）

第33号竪穴住居跡（ＳＩ－33）（図６）

［位置］本住居跡は平成16年度に住居跡の西側を調査し、その部分については第24号竪穴住居跡と同様に報告済み（青森県2006）である。今回は住居跡の東側部分の調査を行った。北側２ｍに第24号住居跡を確認した。

［重複］本住居跡の東側部分を撹乱穴によって一部壊されている。

［平面形・規模］コーナー部がやや丸みを持ち方形を呈する。規模は開口部長径（2.35）ｍ・短径（0.9）ｍ、底面長径（2.1）ｍ・短径（0.76）ｍを測る。

［壁・床面］壁は上端から床面にかけて傾斜している。壁高は東壁34㎝・西壁不明・南壁52㎝・北壁は50㎝である。床面は、ほぼ平坦で堅緻なつくりである。

［堆積土］堆積土は７層に分層できた。床面を覆う第５層は焼土ブロックを全面に含んでいる。このことから、本住居跡は火災を受けた焼失住居と考えられる。

［柱穴・付属施設・周溝・カマド］検出しなかった。

［出土遺物］覆土の中位から上位にかけて、坏１点、小型鉢１点が出土した。（成田）

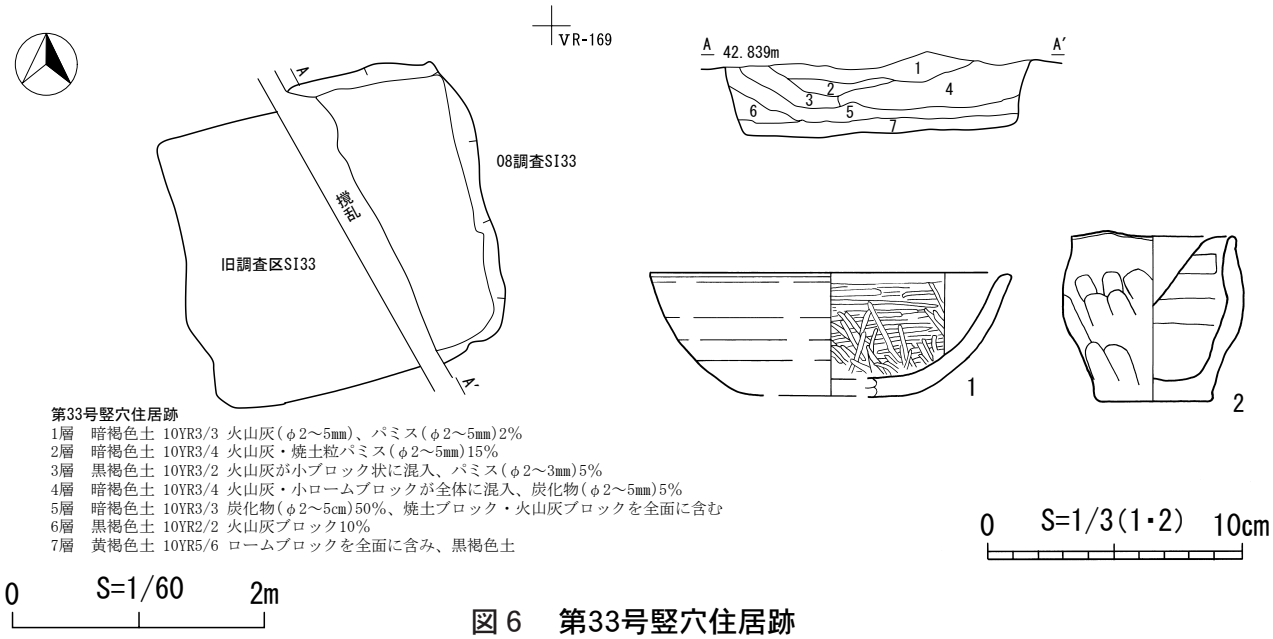


図６　第33号竪穴住居跡

第34号竪穴住居跡（ＳＩ－34）（図７）

［位置］ＶＣ・ＶＤ－166～168グリッドに位置し、南方へ下る緩傾斜地に構築されている。基本土層

のⅤ層上面で暗褐色土と灰白色土（十和田ａ火山灰）の落ち込みとして平面形を確認した。

［重複］本住居跡の東壁中央から少し北東隅寄りで、第63号土坑と重複する。第63号土坑が本住居跡の東壁上部を切っている。

［平面形・規模］平面形は隅丸方形である。壁長は、北壁が確認面で4.34m、床面で4.04m、東壁が確認面で4.24m、床面で3.78m、南壁が確認面で4.43m、床面で4.16m、西壁が確認面で4.18m、床面で3.98mである。床面積は9.08㎡である。

［壁・床面］基本土層のⅥ～Ⅶ層まで掘り込んだ後、黒褐色土とⅥ層のブロックを主体として全面的に貼床をしている。貼床は南壁側に向かって厚くなり、最大厚は30㎝ほどである。貼床が薄くなる北壁側では、一部地山（基本土層のⅥ・Ⅶ層）を直接床面としている。床面には緩い凹凸があり、全体として少し南方に傾斜している。遺存状態の良い部分でみると、本住居跡はかなり急角度で掘り込まれているが、壁面の上部には全体的に崩落がみられ、その分壁の傾斜が緩くなっている。確認面からの壁高は、北壁で36～48㎝、東壁で27～35㎝、南壁で22～30㎝、西壁で26～37㎝である。

［堆積土］炭化材や焼土の検出により焼失した住居跡とみられ、床面に近い堆積土（４・５層）には炭化材・炭化物や焼土粒が含まれている。家屋焼失後の堆積土は暗褐色土と黒褐色土ないし黒色土を主体とし、自然堆積した状態を示すとみられるが、住居跡の埋没の過程で十和田ａ火山灰の堆積層（２層）が形成されている。

［周溝］カマドが設置された部分を除いて壁際をほぼ一周するとみられるが、南西隅周辺では掘り方を明確に把握できなかった。周溝の幅は４～22㎝、深さは３～18㎝である。

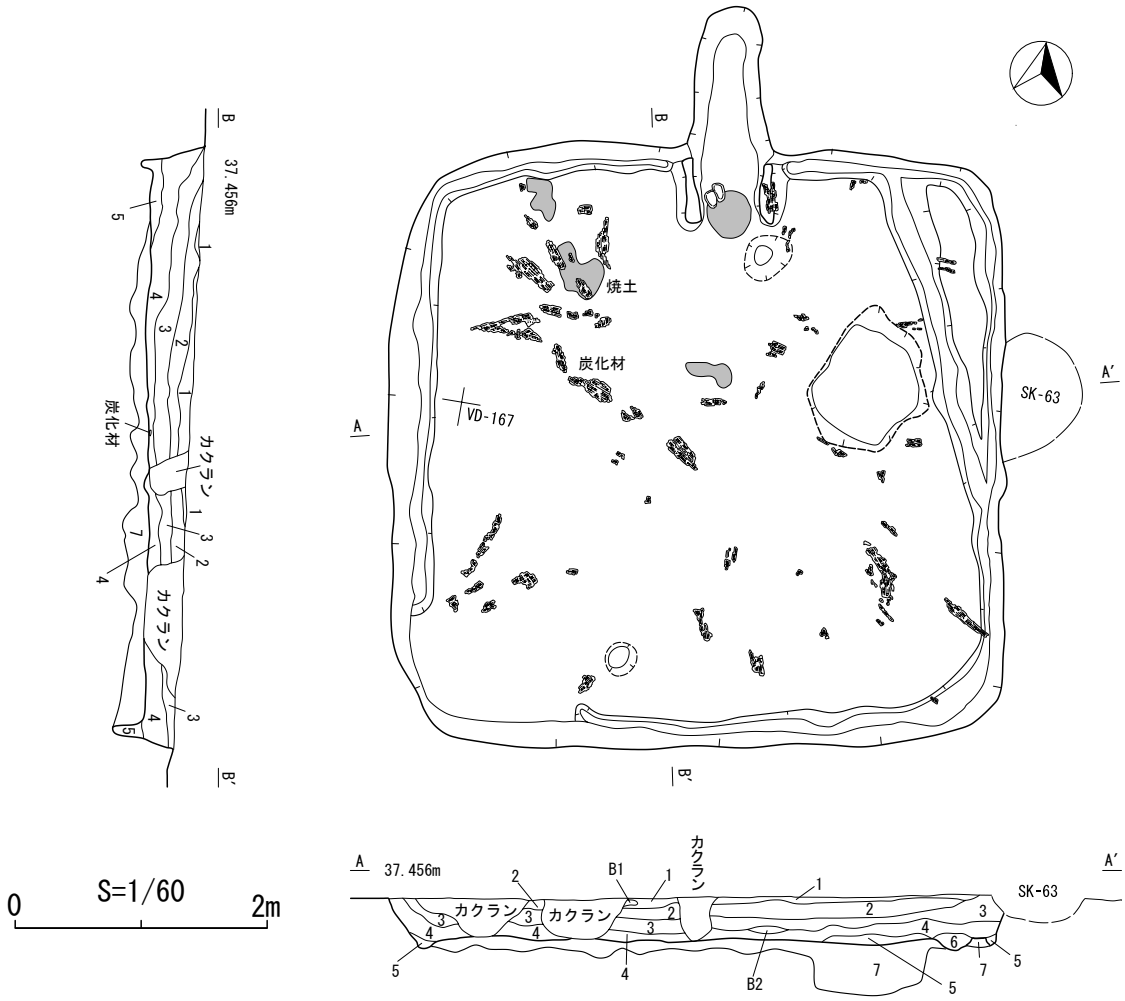
［柱穴］床面上ではピット等を全く検出できなかった。貼床を掘削後、カマド前と南壁寄りで小ピット、東壁寄りで大きめのピットを検出したが、柱穴等は不明である。東壁寄りのピットは住居跡の掘り方の底面から掘り込まれており、貼床と同じ土層が堆積している。平面形はかなり不整な円形で、開口部の大きさが96×84㎝、掘り方の底面からの深さが40㎝ほどである。

［付属施設］北壁の北東隅寄りから東壁の中央部に延びる幅８～15㎝、深さ９～15㎝の溝を検出したが、その用途等は不明である。

［カマド］北壁の中央部に半地下式のカマドが設置されている。主軸方位は、N－10.5°－Wである。カマドの天井部は完全に崩れ落ちているが、両袖部が遺っており、煙道部と燃焼部を確認した。天井部は基本土層のⅦ層の土を主に利用して構築されていたようであり、その崩落土（４層）から自然礫が２個出土しているので、部分的に礫を芯材として利用したことも考えられる。袖部は、地山（基本土層のⅥ・Ⅶ層）をそのまま遺すようにして作り出したものである。燃焼部は38×34㎝の大きさで最大８㎝ほど掘り込まれ、中にはシルト質の焼土が堆積していた。

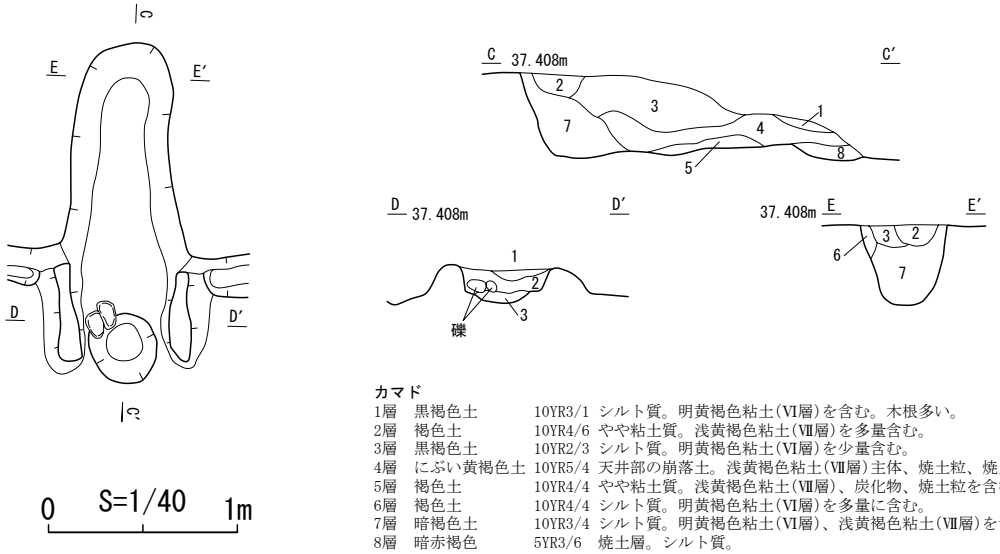
［出土遺物］床面及び床面直上の堆積土（４層）から炭化材と焼土が出土した（図７）。炭化材は住居跡の北西側からやや多く出土したが、全体としてはかなり少ない分量である。形状を判別できるものの大半は板材で、ほかに棒状の材木等がみられる。炭化材のほか、堆積土から平安時代の土師器も少量出土したが、甕の細片がほとんどのため図示しなかった。

［小結］出土遺物及び堆積土から判断して、10世紀前半に降下した十和田ａ火山灰の降下以前に構築された平安時代の竪穴住居跡とみなされる。また、炭化材や焼土が出土しているので、焼失した住居跡と考えられる。（工藤）



第34号竪穴住居跡

1層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質。灰黄褐色土を40%、にぶい黄褐色土を1%含む。
2層　灰白色土　10YR7/1　十和田ａ火山灰層。黒色土を含む。
3層　黒色土　10YR2/1　シルト質。黄褐色土の小ブロック（φ0.5mm～10mm）を20%、灰黄褐色土を2%、にぶい黄褐色土を1%、黄褐色土を1%、軽石を1%含む。
4層　黒褐色土　10YR2/2　シルト質。黄褐色土のブロック（φ0.5mm～40mm）を40%、にぶい黄褐色土を1%、炭化物、焼土粒（φ0.5mm～1.0mm）を1%含む。
5層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質。黄褐色土のブロック（φ0.5mm～50mm）を50%、黒色土を20%、軽石を10%、焼土粒を1%含む。
6層　暗褐色土　10YR2/3　シルト質。黄褐色土を40%、軽石を1%含む。
7層　褐色土　10YR4/4　貼床。黒褐色シルト質土と明黄褐色粘土(Ⅵ層)のブロックの混合土。
B1　褐色土　10YR4/4　やや粘土質。黒色土を40%含む。
B2　暗褐色土　10YR3/3　シルト質。黄褐色土の小ブロック（φ0.5mm～10mm）を40%、灰黄褐色土を1%含む。



カマド

1層　黒褐色土　10YR3/1　シルト質。明黄褐色粘土(Ⅵ層)を含む。木根多い。
2層　褐色土　10YR4/6　やや粘土質。浅黄褐色粘土(Ⅶ層)を多量含む。
3層　黒褐色土　10YR2/3　シルト質。明黄褐色粘土(Ⅵ層)を少量含む。
4層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　天井部の崩落土。浅黄褐色粘土(Ⅶ層)主体、焼土粒、焼土ブロックを含む。
5層　褐色土　10YR4/4　やや粘土質。浅黄褐色粘土(Ⅶ層)、炭化物、焼土粒を含む。
6層　褐色土　10YR4/4　シルト質。明黄褐色粘土(Ⅵ層)を多量に含む。
7層　暗褐色土　10YR3/4　シルト質。明黄褐色粘土(Ⅵ層)、浅黄褐色粘土(Ⅶ層)を含む。
8層　暗赤褐色　5YR3/6　焼土層。シルト質。

図７　第34号竪穴住居跡

第35号竪穴住居跡（ＳＩ－35）（図８～10）

［位置］ＶＦ－163・164、ＶＧ－162・163グリッドに位置し、少し南方へ下る緩傾斜地に構築されている。基本土層のＶ層上面で黒色土の落ち込みとして平面形を確認したが、本住居跡の南西側は調査区域外に位置する。

［重複］本住居跡の南東壁の東隅寄りで、第66・67号土坑と重複する。本住居跡が第66・67号土坑の北西側を切っている。

［平面形・規模］平面形は隅丸方形ないし隅丸長方形とみられる。壁長は、北東壁が確認面で5.16m、床面で4.72mである。精査した範囲の床面積は12.67㎡である。

［壁・床面］基本土層のⅠ層とⅢ層の間に構築面があり（本住居跡周辺ではⅡ層が欠けている）、Ⅵ～Ⅶ層まで掘り込んだ後、暗褐色土とⅥ・Ⅶ層のブロックを主体としてほぼ全面的に貼床をしている。貼床は住居跡の中央部で薄く、各壁側に向かって厚くなる。中央部では一部地山（基本土層のⅥ層）を直接床面としており、壁寄りでは貼床の最大厚が30㎝ほどになる。床面には大きな緩い凹凸があり、中央部から南側が少し南方へ傾斜している。本住居跡はかなり急角度で掘り込まれているが、壁面の最上部（基本土層のⅢ層に相当）は崩落が著しい。掘り込み面からの壁高は、北西壁側で65㎝、南東壁側で50㎝ほどである。

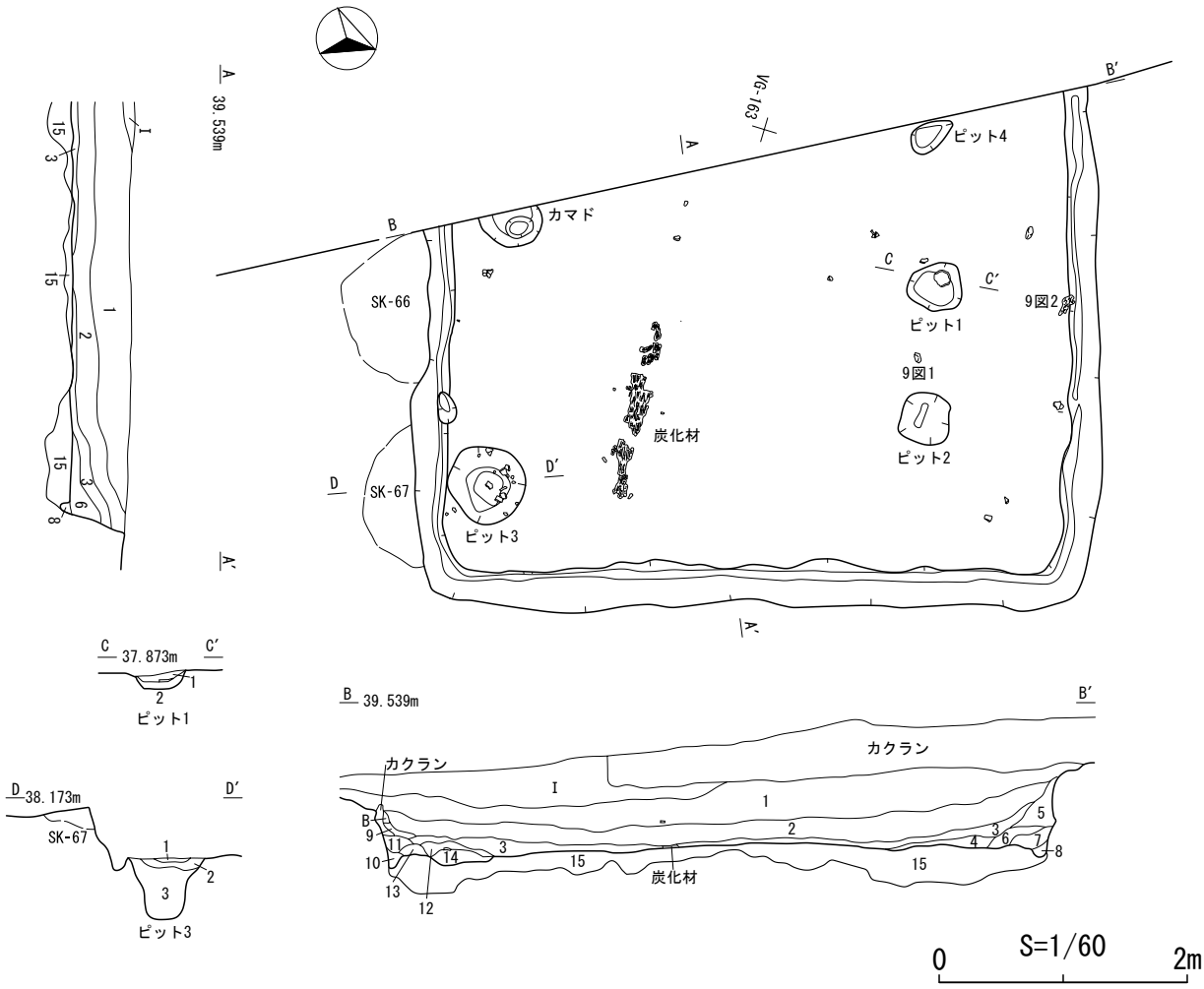
［堆積土］炭化材や焼土粒の検出により焼失した住居跡とみられ、床面に近い堆積土（３層）には焼土粒や炭化物の混入が目立つ。家屋焼失後の堆積土は黒色土と黒褐色土を主体とし、壁寄りに地山（基本土層のＶ・Ⅵ層）の土を多く含んでいる。地山の土の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられるが、住居跡の埋没の過程で十和田ａ火山灰が混入（２層）している。

［周溝］壁際を一周するものとみられる。精査した範囲で、周溝の幅は20～36㎝、深さは６～８㎝である。

［柱穴］床面上でピットを４個検出した。ピット１（大きさ42×40㎝、深さ13㎝）は掘り込みが浅く、ピット２（大きさ40×40㎝、深さが40㎝）は底面が極度に狭まり、壁際に位置するピット３（大きさ62×62㎝、深さ50㎝）は掘り込みが極端に深く、ピット４（大きさ38×22㎝、深さ20㎝）は小さすぎて、いずれも主柱穴とは考えがたいものである。

［カマド］南東壁の中央部、調査区域の境目辺りに半地下式と思われるカマドが設置されている。主軸方位は、Ｓ－17.3°－Ｅ位になる。天井部、左袖部はほぼ完全に崩壊しているが、基本土層のⅦ層の土を主に利用して構築されていたようである。燃焼部は50㎝ほどの大きさで、10㎝位掘り込まれている。中にはシルト質の焼土が堆積し、火床面が盛り上がっている。住居跡の平面図には図示していないが、燃焼部から羽口を転用した支脚（第９図３）が出土しており、燃焼部の掘り方に支脚の設置痕が認められた。

［出土遺物］床面から平安時代の土師器（第９図１）、鉄製品（第９図２）、炭化材、自然礫が出土し、堆積土から土師器（第９・10図４～８）、須恵器（第10図９・10）、鉄滓、炭化材、荒砥石（第10図14）、すり石・敲石の類（第10図11～13）、自然礫などが出土した。床面及びピット内から出土した土師器は少量で、床面出土の坏を除いて、大半は甕の小破片である。堆積土から出土した土師器・須恵器も甕がほとんどである。鉄製品は、床面の北西壁際から１点した。かなり腐蝕が進んでいたが、刀子で



第35号竪穴住居跡

1層	黒色土	10YR2/1	シルト質。黄褐色土の小ブロック(φ0.5mm～10mm)を25%、軽石を3%、焼土を1%含む。
2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質。下部に十和田ａ火山灰を含む。にぶい黄褐色土(Ⅷ層)のブロック(φ0.5mm～30mm)を30%、灰黄褐色土を3%、軽石を5%、炭化物を1%、焼土を1%含む。
3層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質。黄褐色土の小ブロック(φ10mm)を1%、灰黄褐色土を30%、軽石を5%、炭化物を20%、焼土を30%含む。
4層	黒褐色土	10YR2/3	シルト質。褐色土の小ブロック(φ0.5mm～10mm)を25%、灰黄褐色土を10%、黒色土を10%、軽石を2%、焼土を1%含む。
5層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	やや粘土質。褐色土のブロック(φ0.5mm～70mm)を30%、褐灰色土を2%、黒色土を50%含む。
6層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質。明黄褐色土の小ブロック(φ0.5mm～10mm)を3%、褐灰色土を3%、黒色土を5%、焼土を1%含む。
7層	褐色土	10YR4/4	シルト質。明黄褐色土のブロック(φ0.5mm～30mm)を7%、褐灰色土を1%、黒色土を40%、軽石を1%、焼土を1%含む。
8層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘土質。明黄褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土のブロック(φ10mm～30mm)50%、褐灰色土を3%、黒色土を3%、軽石を1%含む。
9層	にぶい黄橙色土	10YR6/4	粘土質。褐色土のブロック(φ10mm～20mm)を1%、灰黄褐色土を1%、黒色土を5%含む。
10層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質。浅黄褐色土をごく少量含む。
11層	灰黄褐色土	10YR6/2	カマド天井部の崩落土。浅黄褐色粘土(Ⅶ層)主体。
12層	明黄褐色土	5YR6/6	カマド天井部の崩落土。被熱した浅黄褐色粘土(Ⅶ層)主体。
13層	暗褐色土	10YR3/3	カマド堆積土。シルト質。明黄褐色粘土(Ⅵ層)、炭化物、焼土を含む。
14層	暗赤褐色土	5YR3/3	カマド燃焼部の焼土層。シルト質。
15層	褐色土	10YR4/6	貼床。暗褐色シルト質土と明黄褐色粘土(Ⅵ層)・浅黄褐色粘土(Ⅶ)・にぶい黄褐色土(Ⅷ層)のブロックの混合土。
B層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質。

Pit1

1層	黒褐色	10YR2/3	シルト質。黄褐色土の小ブロック(φ0.5mm～10mm)を15%、にぶい黄褐色土を1%、軽石を5%、炭化物を1%含む。
2層	褐色土	10YR4/4	シルト質。明黄褐色土のブロック(φ10mm～40mm)を40%、炭化物を3%含む。

Pit3

1層	暗赤褐色土	5YR3/6	焼土層。やや粘土質。
2層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質。明黄褐色粘土(Ⅵ層)・浅黄褐色粘土(Ⅶ層)の小ブロックを少量含む。
3層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質。明黄褐色粘土(Ⅵ層)・浅黄褐色粘土(Ⅶ層)のブロックを多量に含む。

図８　第35号竪穴住居跡（１）

図９　第35号竪穴住居跡（２）

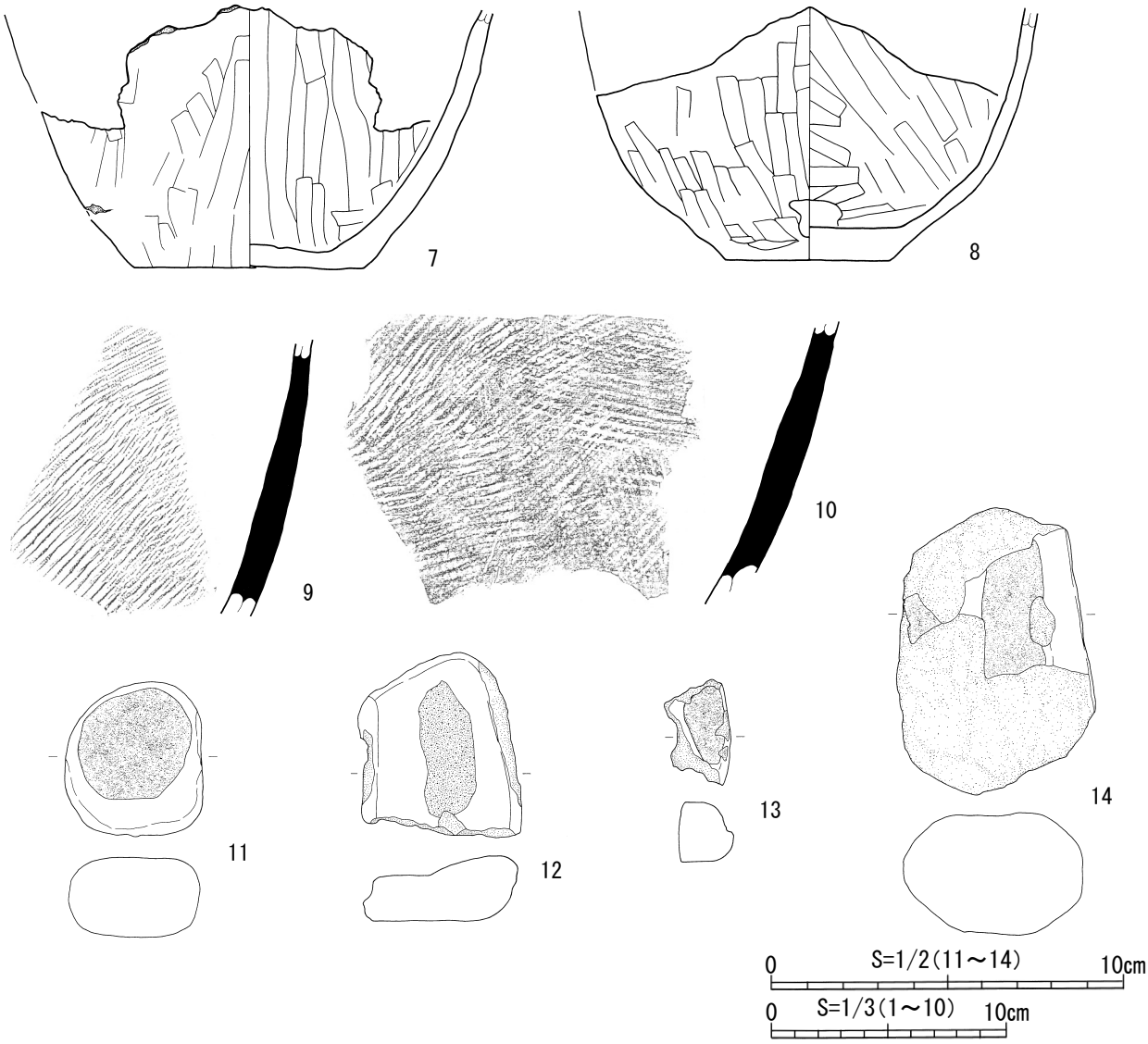


図10　第35号竪穴住居跡（３）

ある。炭化材は東側の床面と、その周辺の堆積土（３層）からごく少量出土した。いずれも板材である。

［小結］出土遺物及び堆積土から判断して、10世紀前半に降下した十和田ａ火山灰の降下以前に構築された平安時代の竪穴住居跡とみなされる。また、炭化材が出土しているので焼失した住居跡と考えられるが、遺存する炭化材はごく少量である。（工藤）

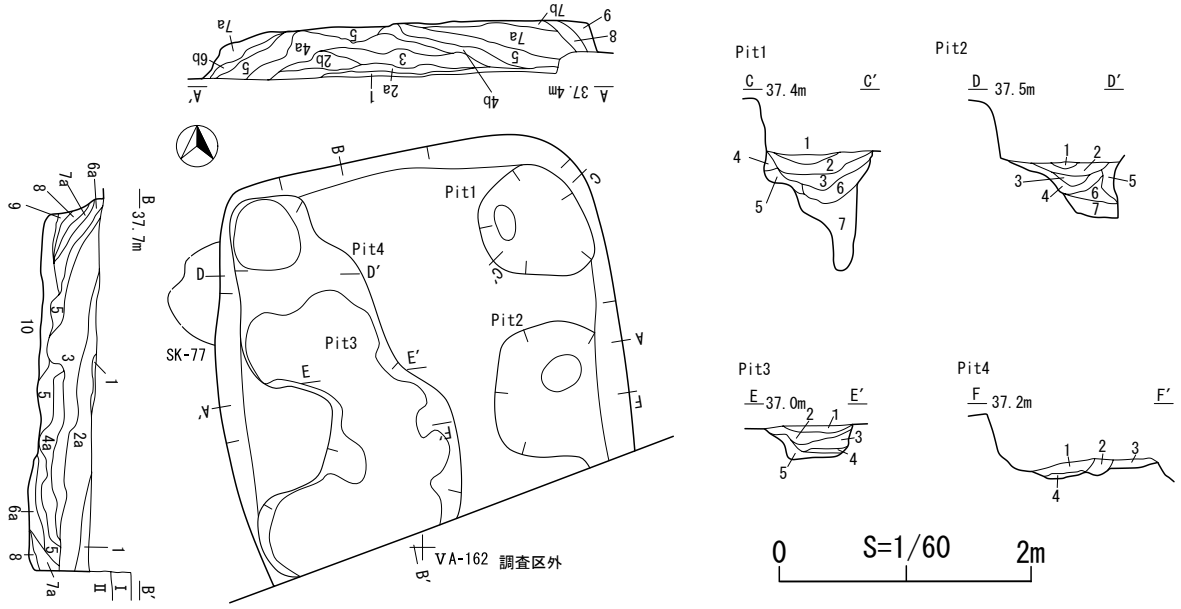
第36号竪穴住居跡（ＳＩ－36）（図11・12）

［位置］ＶＡ－161・162グリッドに位置し、Ⅳ層で確認した。南壁が調査区外に延びるため、検出されなかった。

［重複］第76号土坑と重複しており、本住居跡のほうが古い。

［平面形・規模］南側が不明であるが、残存部から推定すると、隅丸方形であると考えられる。壁長は東壁が（2.6）ｍ、北壁が3.2ｍ、西壁が（3.1）ｍである。残存する床面積は（9.0）㎡である。

［壁・床面］壁は床面から確認面までほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は東壁で24㎝、北壁で53㎝、西壁で32㎝である。床面はほぼ平坦で硬いつくりである。



第36号竪穴住居跡

1層 黒褐色土	10YR2/1	
2a層 黒色土	10YR1.7/1	褐色土(7.5YR4/6)10%、炭化物(φ2～10mm)10%
2b層 暗褐色土	7.5YR3/4	黒褐色土(10YR2/2)10%、炭化物(φ3～10mm)5%、焼土粒(φ2～5mm)3%
3層 黒褐色土	10YR2/2	黄褐色土(2.5YR5/6)30%、焼土粒(φ3～10mm)1%、火山灰微量混入
4a層 暗褐色土	10YR3/4	黒色土(10YR2/1)30%、オリーブ褐色粘土質土(2.5YR4/4)10%、にぶい黄色粘土質土(2.5YR6/4)10%
4b層 明黄褐色土	10YR6/8	黒色土(10YR1.7/1)20%、浅黄橙色粘土質土(10YR8/4)15%、浅黄橙色土(10YR8/4)2%
5層 黒褐色土	10YR2/3	黄橙色土(10YR8/8)40%、明褐色粘土(7.5YR5/8)10%、暗褐色土(10YR3/3)5%、橙色粘土(7.5YR6/8)5%
6a層 黒褐色土	10YR2/2	黒色土(10YR1.7/1)20%、黄色土(2.5YR8/8)3%、橙色ローム粒(7.5YR6/8)3%
6b層 にぶい黄橙色粘土質土	10YR7/2	にぶい黄橙色粘土質土(10YR6/4)30%、黒褐色土(10YR2/3)20%
7a層 黒褐色土	10YR2/2	明黄褐色土(2.5YR6/6)15%、明黄褐色土(10YR6/8)10%
7b層 黒褐色土	10YR2/2	黄褐色土(10YR5/6)20%、黄橙色土(10YR7/8)15%
8層 黒褐色土	10YR2/3	黒色土(10YR2/1)15%、にぶい黄色粘土(2.5YR6/4)(φ5～10mm)10%
9層 黒色土	10YR1.7/1	にぶい黄褐色土(10YR5/3)5%、黄橙色土(10YR8/8)3%、焼土粒(φ1～4mm)3%

Pit1

1層 黒色土	10YR1.7/1	明黄褐色土(10YR6/8)15%
2層 黒色土	10YR2/1	にぶい黄橙色土(10YR6/4)15%、にぶい黄橙色粘土質土(10YR5/4)15%、明黄褐色粘土質土(10YR6/5)5%
3層 明黄褐色粘土質土	10YR6/8	にぶい黄橙色粘土質土(10YR7/4)30%、赤褐色粘土質土(5YR4/8)15%
4層 黒褐色土	10YR3/1	褐色土(10YR4/6)3%
5層 黒褐色土	10YR2/2	褐色土(10YR4/6)20%
6層 灰黄褐色土	10YR4/2	明黄褐色粘土質土30%、黒褐色土(10YR2/2)10%
7層 にぶい黄橙色土	10YR6/3	炭化物(φ2～5mm)5%

Pit2

1層 黒褐色土	10YR3/2	にぶい黄褐色土(10YR4/3)、焼土粒(φ2～5mm)3%
2層 明黄褐色粘土質土	10YR6/6	黒褐色土(10YR2/2)10%
3層 黒色土	10YR1.7/1	暗灰黄色土(2.5YR5/2)10%
4層 黒色土	10YR1.7/1	
5層 黄褐色土	10YR5/8	
6層 暗灰黄色土	2.5Y5/2	黒色土(10YR1.7/1)
7層 灰黄色粘土質土	2.5Y7/2	にぶい黄橙色粘土質土(10YR6/4)15%

Pit3

1層 明黄褐色土	10YR6/8	焼土(φ5～10mm)10%、炭化物(φ5～10mm)7%、灰黄色粘土質土3%
2層 黒褐色土	10YR3/1	灰黄褐色土(10YR4/2)30%、黄褐色粘土質土(10YR5/8)10%
3層 黄褐色粘土質土	10YR5/6	灰黄色粘土質土(2.5YR6/2)30%、黒褐色土(10YR3/1)7%
4層 黒褐色土	10YR3/1	
5層 明黄褐色土	10YR6/8	黒褐色土(10YR3/1)3%、灰黄色粘土質土3%

Pit4

1層 にぶい黄褐色土	10YR4/3	明黄褐色土(10YR6/8)50%、橙色粘土質土(7.5YR6/8)2%
2層 明黄褐色土	10YR6/8	にぶい黄色粘土質土(2.5YR6/3)30%、にぶい黄褐色土(10YR4/3)20%
3層 明黄褐色土	10YR6/6	にぶい黄褐色土(10YR4/3)3%
4層 灰白粘土質土	10YR8/2	にぶい黄褐色土(10YR4/3)30%、黒色土(10YR2/1)2%

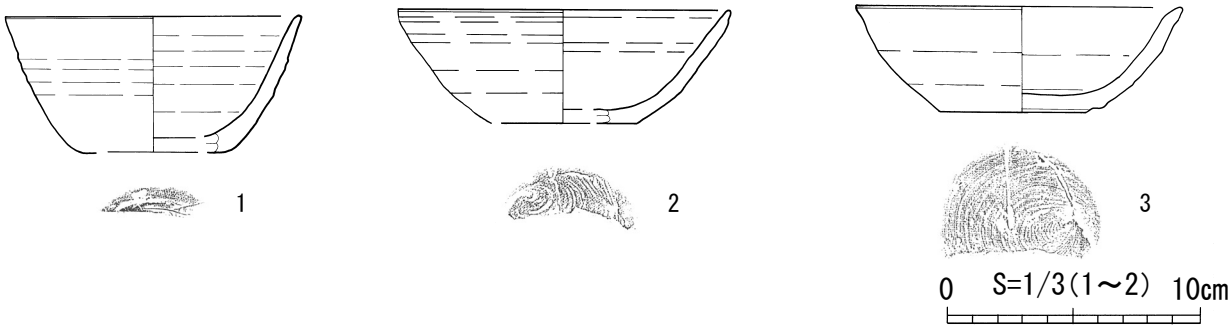


図11　第36号竪穴住居跡(1)

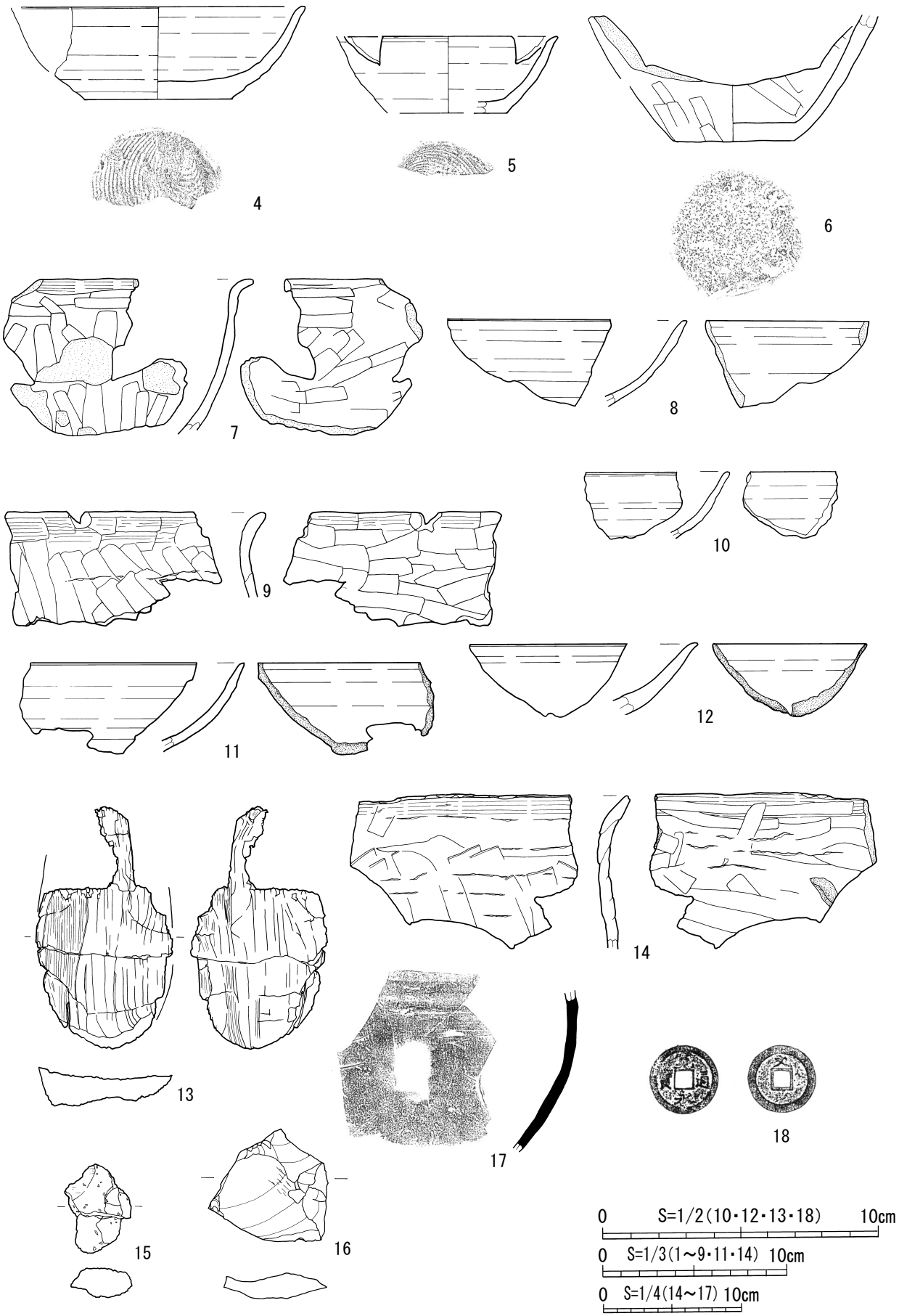


図12　第36号竪穴住居跡（２）

［堆積土］13層に分層した。状況から人為堆積と考えられる。３層には十和田ａ火山灰と推定される灰白色火山灰がブロック状に混入している。

［周溝］・［カマド］検出しなかった。

［柱穴］住居の壁を一部掘り込んでいる柱穴状のピットを２基（Pit１・２）検出した。Pit１は住居北東隅に位置し、23×17㎝の円形で深さは95㎝である。しっかりと掘り込まれていることから、主柱穴の可能性が高い。北西隅から検出したPit２は52×48㎝の円形で、深さ48㎝と浅い。

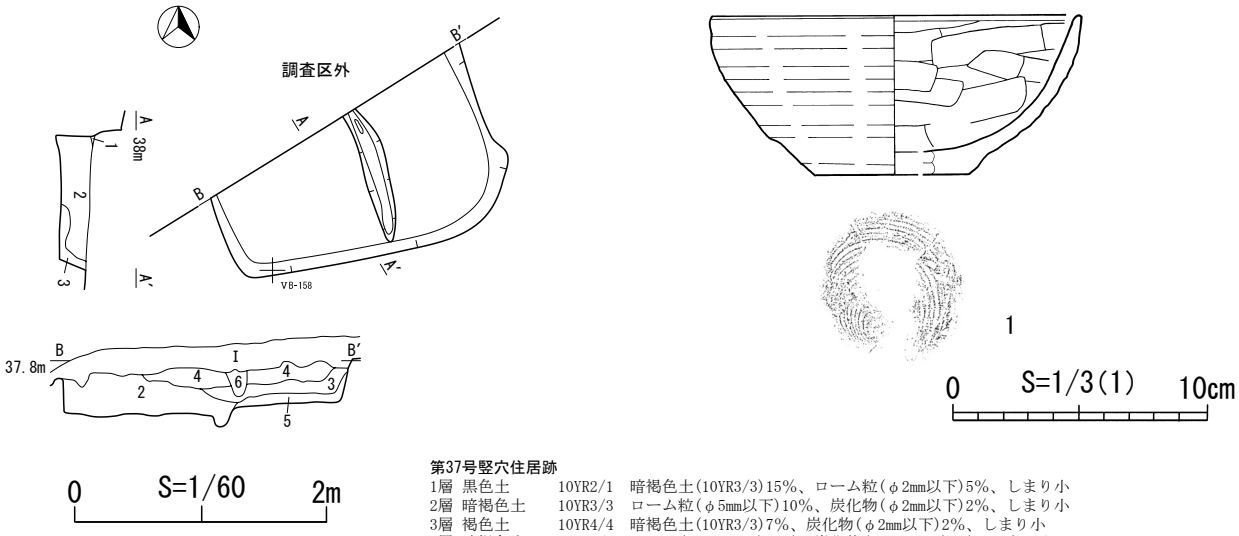
［付属施設］土坑２基（Pit３・４）を検出した。Pit３は複雑な平面形をした土坑である。一番深いところで27㎝あり、Pit２の掘り方と重複する。土層断面からは新旧を判別できなかったが、床面での検出状況から、ほぼ同時期の構築であろう。Pit４は13㎝と浅く、形がはっきりしないため詳細は不明である。

［出土遺物］土師器片、須恵器片、剥片石器、木製品が出土している。１～５・９・18・19は坏で、いずれも内面外面共にロクロ整形である。１～５は器形を把握することができる。３は内面にスス付着が見られる。２～５の底部は回転糸切痕であるが、１は底部の残存部が少ないため、判断できない。６・７・９・13は甕である。６は胴部から外傾しているが、７・９は、「く」字状に外反している。９・13の外面にはケズリがみられる。６は底部のみ残存しており、砂底である。14は須恵器甕の胴部で、この住居からはこの１点のみ出土している。13は珪質頁岩の剥片石器で、表面に剥離痕がみられる。10は椀形の木製品の底部から胴部の一部で第６ａ層から出土した。中から軽石（12）が出土した。１層上面から寛永通宝が１点出土した。

［小結］堆積土の状況及び出土遺物等から十和田ａ火山灰降下以前に廃絶した平安時代の竪穴住居跡と考えられる。（大平）

第37号竪穴住居跡（ＳＩ－37）（図13）

［位置］ＶＢ－157・158グリッドに位置し、平坦地に立地する。北壁が調査区域外に延びるため、検出されなかった。



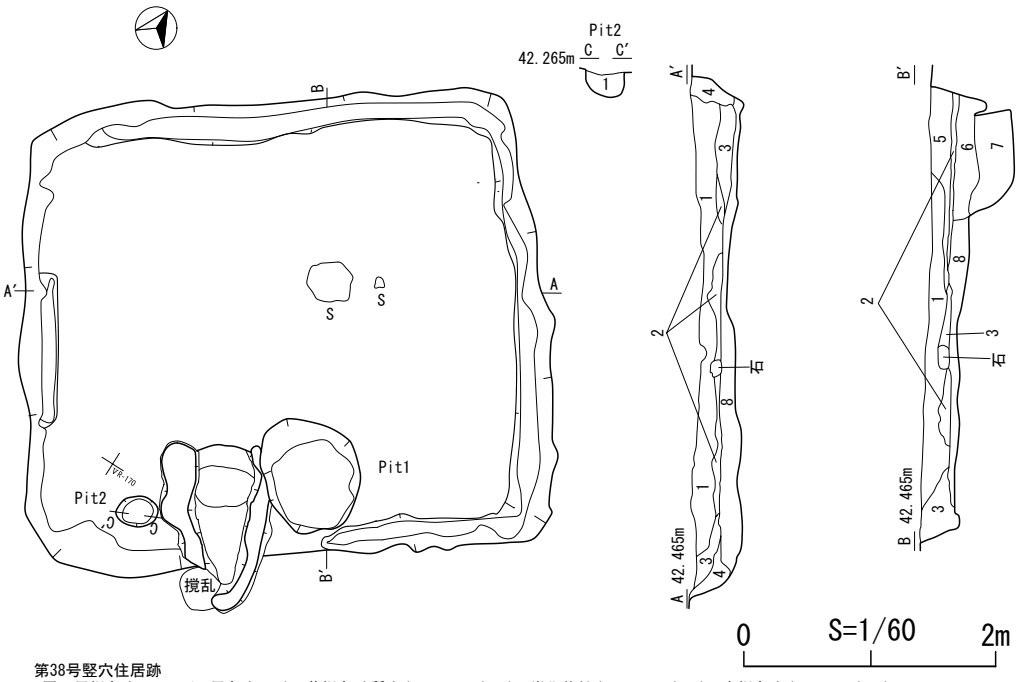
第37号竪穴住居跡
1層 黒色土　10YR2/1　暗褐色土(10YR3/3)15%、ローム粒(φ2mm以下)5%、しまり小
2層 暗褐色土　10YR3/3　ローム粒(φ5mm以下)10%、炭化物(φ2mm以下)2%、しまり小
3層 褐色土　10YR4/4　暗褐色土(10YR3/3)7%、炭化物(φ2mm以下)2%、しまり小
4層 暗褐色土　10YR3/4　ローム(φ1～10mm)25%、炭化物(φ2mm以下)2%、しまり小
5層 明黄褐色土　10YR6/6　炭化物(φ2mm以下)2%、しまり小
6層 黒褐色土(10YR2/3)と暗褐色土(10YR3/3)の混合土　黄橙色土(10YR8/6)15%、焼土粒(φ3～10mm)2%

図13　第37号竪穴住居跡

［重複］なし。
［平面形・規模］北側が不明であるが、残存部から推定すると、隅丸方形であると考えられる。壁長は東壁が（1.5）ｍ、南壁が2.3ｍ、西壁が（0.6）ｍである。残存する床面積は（2.3）㎡である。
［壁・床面］壁は南壁で22㎝の深さで残存する。また、床は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。
［堆積土］６層に分層した。全体的にロームブロックが混入しており、人為堆積の可能性が高い。
［周溝］・［柱穴］・［カマド］検出しなかった。
［付帯施設］床面上から１条の溝跡が検出された。南北方向に掘り込まれ、検出できた長さは13.8ｍ、深さは20㎝である。床面を区画する間仕切りの溝と考えられる。
［出土遺物］土師器片が出土した。図示したものは１点（１）で、土師器坏である。内面はナデ調整されている。
［小結］堆積土の状況及び出土遺物等から平安時代の竪穴住居跡と考えられる。（大平）

第38号竪穴住居跡（ＳＩ－38）（図14・15）

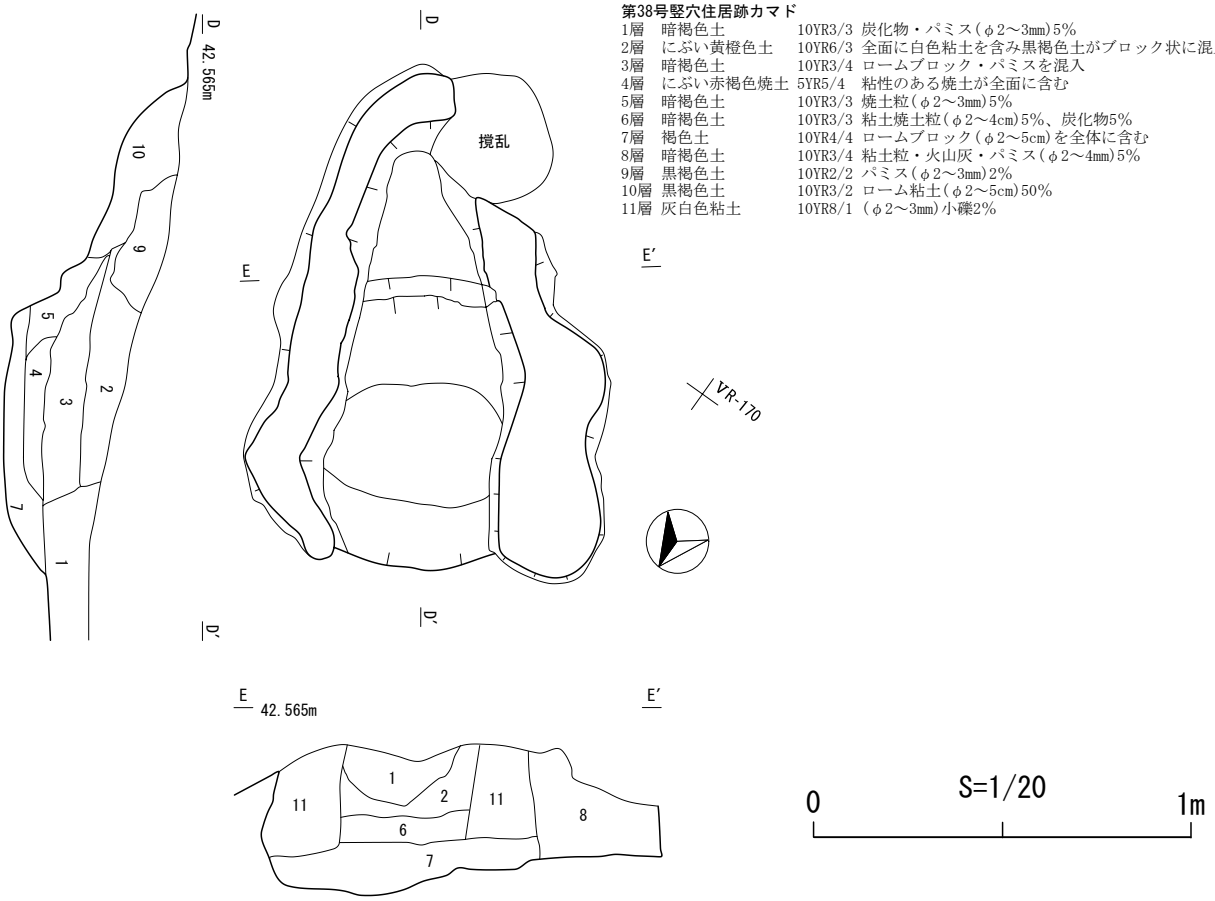
［位置と確認］本住居跡は、調査区の中央部に位置している。東側約３ｍに第24・33号竪穴住居跡を確認した。
［重複］確認しなかった。
［平面形・規模］コーナー部が丸みを持ち長方形を呈する。規模は開口部長径4.35ｍ・短径3.55ｍ、床面は長径3.75ｍ・短径3.4ｍを測る。
［壁・床面］壁は上端から床面にかけて傾斜している。壁高は東壁26㎝・西壁37㎝・南壁25㎝・北壁27㎝を測る。床面は、ほぼ平坦で堅緻な作りである。
［堆積土］堆積土は８層に分層できた。床面を覆う第２層及び南壁寄りに堆積している第５層中から焼土・炭化材が混入しており、このことから本住居跡は焼失住居の可能性が考えられる。
［柱穴］住居跡の南西壁寄りに楕円形の形態で、長径32㎝・短径24㎝・深さ18㎝を測るピットを検出した。本住居跡に伴う柱穴かどうかは判断できなかった。
［付属施設］カマドの東側で丸みを持つ不整形の形態で長径90㎝・短径74㎝・深さ35㎝の土坑を検出した。住居跡に伴う土坑と思われるが、用途に関しては不明である。
［周溝］周溝は西壁寄りで断続的に切れる。幅15㎝・深さ４～11㎝を測る。
［カマド］住居跡の南壁の中央部に位置している。カマドは粘土を用いて構築しており、構築時に土師器の甕を混入して芯材としている。規模は長径135㎝・短径94㎝を測る。火熱面は第７層上面を火熱面としている。煙道は南側に立ち上がる。遺物はカマドの袖部に及び第２・３層中から出土し、多くは廃棄時に混入した遺物と考えられる。
［出土遺物］遺物は、床面で石皿・砥石類１点が出土し、カマド内からは坏１点・甕２点・鉢２点が出土した。しかし床面の遺物は全く出土しなかった。このことは、住居跡内を整理し、その後に意識的に住居を燃やした可能性が高いものと考えられる。（成田）



第38号竪穴住居跡

1層　黒褐色土 10YR2/2 黒色土15%、黄褐色砂質土(φ5～50mm)7%、炭化物粒(φ1～30mm)3%、赤褐色土(φ1～3mm)1%
2層　黒褐色土 10YR2/2 炭化物(φ2cm～5cm)(10YR1.7/1)30%、黄褐色土30%、赤褐色焼土粒(φ1～2mm以下)1%
3層　黒褐色土 10YR2/2 褐色土30%、黒色土10%、黄橙色土(φ10mm以下)3%
4層　黒褐色土 10YR2/3 褐色土30%、黄褐色土10%、黒色土7%
5層　黒褐色土 10YR2/2 黒色土10%、炭化物(φ2～5cm以上)10%、褐色土10%、明褐色土(φ2～3mm)7%、にぶい黄橙色砂質土3%、明赤褐色焼土2%
6層　黒褐色土 10YR3/1 同火山灰小ロームブロックを全面に含み黒褐色土混入
7層　暗褐色土 10YR3/3 ロームブロック(φ2～5cm)15%、焼土粒(φ2～5cm)5%
8層　黒褐色土 10YR2/3 掘り方全面にロームブロックを混入

Pit2
1層　暗褐色土 10YR1/4 黄褐色土15%、黒色土3%、褐色土1%



第38号竪穴住居跡カマド

1層	暗褐色土	10YR3/3 炭化物・パミス(φ2～3mm)5%
2層	にぶい黄橙色土	10YR6/3 全面に白色粘土を含み黒褐色土がブロック状に混入
3層	暗褐色土	10YR3/4 ロームブロック・パミスを混入
4層	にぶい赤褐色焼土	5YR5/4　粘性のある焼土が全面に含む
5層	暗褐色土	10YR3/3 焼土粒(φ2～3mm)5%
6層	暗褐色土	10YR3/3 粘土焼土粒(φ2～4cm)5%、炭化物5%
7層	褐色土	10YR4/4 ロームブロック(φ2～5cm)を全体に含む
8層	暗褐色土	10YR3/4 粘土粒・火山灰・パミス(φ2～4mm)5%
9層	黒褐色土	10YR2/2 パミス(φ2～3mm)2%
10層	黒褐色土	10YR3/2 ローム粘土(φ2～5cm)50%
11層	灰白色粘土	10YR8/1 (φ2～3mm)小礫2%

図14　第38号竪穴住居跡(1)

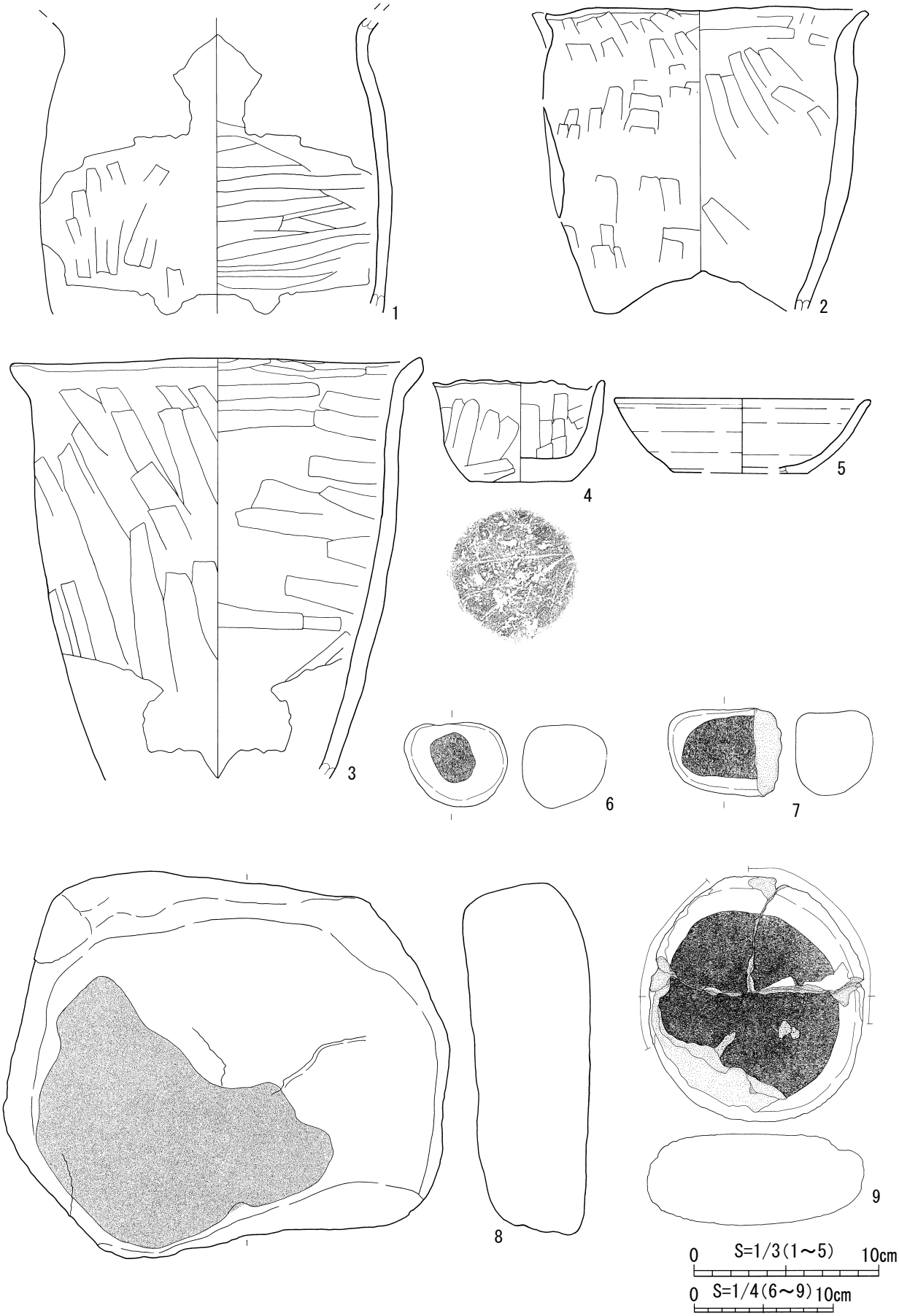


図15　第38号竪穴住居跡（２）

２　土坑

第60号土坑（ＳＫ－60）（図16）

［位置］ＶＣ・ＶＤ－168グリッドに位置し、基本土層のＶ層上面で黒褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。

［平面形・規模］平面形は、確認面で長径1.10ｍ、短径0.94ｍの楕円形、底面で直径0.70ｍほどの不整円形である。南西壁側の上部が部分的に張り出している。確認面からの深さは約30㎝である。

［壁・床面］基本土層のＶ層をかなり急角度で掘り込み、同層を底面としている。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土と黒色土を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］不明である。

第61号土坑（ＳＫ－61）（図16）

［位置］ＶＨ－167・168グリッドに位置し、基本土層のＶ層上面で黒色土の落ち込みとして平面形を確認した。

［平面形・規模］平面形は、確認面で長径1.29ｍ、短径1.03ｍ、底面で長径1.16ｍ、短径0.87ｍの楕円形である。確認面からの深さは10～15㎝である。

［壁・床面］基本土層のＶ層を掘り込み、同層を底面としている。底面にはかなり凹凸がある。

［堆積土］黒色土を主体とし、西壁寄りに地山（基本土層のＶ層）の土を多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］不明である。

第62号土坑（ＳＫ－62）（図16・18）

［位置］ＶＥ・ＶＦ－168グリッドに位置し、基本土層のＶ層上面で黒色土の落ち込みとして平面形を確認した。

［平面形・規模］平面形は、確認面で長径1.23ｍ、短径1.00ｍ、底面で長径0.95ｍ、短径0.74ｍのかなり不整な楕円形である。確認面からの深さは30㎝ほどである。

［壁・床面］基本土層のＶ層を緩い角度で掘り込み、同層を底面としている。底面は中央部が大きく凹んでいる。

［堆積土］黒色土を主体とし、北壁寄りに地山（基本土層のＶ層）の土を多く含む。自然堆積した状態を示すとみられるが、堆積土中に灰白色の火山灰と焼土を微量含んでいる。

［出土遺物］堆積土から、縄文時代中期末～後期初頭頃の土器片（図18－１・２）が少量出土した。

［時期］堆積土中の火山灰が十和田ａ火山灰であれば10世紀前半以前の遺構と考えられ、出土した縄文土器は混入とみなされる。

第63号土坑（ＳＫ－63）（図16）

［位置］ＶＤ－167・168グリッドに位置し、基本土層のＶ層上面で褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。
［重複］本土坑の西側で第34号竪穴住居跡と重複する。本土坑が第34号竪穴住居跡の東壁上部を切っている。
［平面形・規模］西壁側の形態を良く把握できなかったが、平面形は確認面で長径1.00ｍ、底面で長径0.90ｍほどの不整楕円形とみられる。確認面からの深さは約20㎝である。
［壁・床面］基本土層のＶ層を緩い角度で掘り込み、同層を底面としている。底面は中央部がやや凹んで、丸底気味になっている。
［堆積土］地山（基本土層のＶ層）の土が主体の堆積土で、焼土粒を多少含む。人為的に埋められた状態を示すとみられる。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。
［時期］第34号竪穴住居跡より新しいので、10世紀前半以降の遺構と考えられる。

第64号土坑（ＳＫ－64）（図16・18）

［位置］ＶＥ－165・166グリッドに位置し、基本土層のＶ層上面で黒色土の落ち込みとして平面形を確認した。
［重複］本土坑の南西側で、第65号土坑と重複する。本土坑が第65号土坑の北東側を切っている。
［平面形・規模］平面形は、確認面で直径0.85ｍ、底面で直径0.70ｍほどの不整円形である。確認面からの深さは22～32㎝である。
［壁・床面］基本土層のＶ層を急角度で掘り込み、同層を底面としている。底面には緩い凹凸があり、全体として大きく南西へ傾斜している。第65号土坑と重複する南西側では、壁面上部の崩落が顕著である。
［堆積土］黒色土を主体とし、底面の近くに地山（基本土層のＶ層）の土を多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。
［出土遺物］本土坑の確認面（１層）から、台石の類の破片らしいものが１点出土した。
［時期］不明である。

第65号土坑（ＳＫ－65）（図16）

［位置］ＶＥ－165・166グリッドに位置し、基本土層のＶ層上面で黒褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。
［重複］本土坑の北東側で、第64号土坑と重複する。第64号土坑が本土坑の北東側を切っている。
［平面形・規模］平面形は、確認面で直径0.60ｍほどの円形又は楕円形になるものとみられる。確認面からの深さは、遺存している範囲で約10㎝である。
［壁・床面］基本土層のＶ層を掘り込み、同層を底面としている。遺存する底面はほぼ平坦であるが、南西壁際に小さな浅い凹みがある。
［堆積土］黒褐色土を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］不明である。

第66号土坑（ＳＫ－66）（図16）

［位置］ＶＦ－163グリッドに位置し、基本土層のＶ層上面で黒色土と黒褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。

［重複］本土坑の北西側で、第35号竪穴住居跡と重複する。第35号竪穴住居跡が本土坑の北西側を切っている。

［平面形・規模］平面形は、確認面で直径1.20ｍほどの不整円形又は不整楕円形になるものとみられる。確認面からの深さは、遺存している範囲で約15㎝である。

［壁・床面］基本土層のＶ層を掘り込み、同層を底面としている。遺存する底面には凹凸があり、掘り込みも浅いので、壁が不明瞭になっている。

［堆積土］南東壁寄りの底面直上に、径40㎝ほどの範囲で焼土（４層）が堆積している。堆積土は黒色土と黒褐色土を主体としているが、南東壁側では下部（３層）に十和田ａ火山灰の小ブロックと焼土粒を含む。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］第35号竪穴住居跡より古く、堆積土に十和田ａ火山灰を含むので、10世紀前半以前に構築された平安時代の土坑と考えられる。検出状況も含めて、第67号土坑と良く類似した遺構である。

第67号土坑（ＳＫ－67）（図16）

［位置］ＶＦ－163・164グリッドに位置し、基本土層のＶ層上面で黒褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。

［重複］本土坑の北西側で、第35号竪穴住居跡と重複する。第35号竪穴住居跡が本土坑の北西側を切っている。

［平面形・規模］平面形は、確認面で直径1.20ｍほどの円形又は楕円形になるものとみられる。確認面からの深さは、遺存している範囲で約18㎝である。

［壁・床面］基本土層のＶ層を掘り込み、同層を底面としている。遺存する底面には凹凸があり、掘り込みも浅いので、壁が不明瞭になっている。

［堆積土］南東壁寄りの底面直上に、径40～50㎝ほどの範囲で焼土（３層）が堆積している。堆積土は黒褐色土を主体としているが、下部（２層）に十和田ａ火山灰の小ブロックを少量含む。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］第35号竪穴住居跡より古く、堆積土に十和田ａ火山灰を含むので、10世紀前半以前に構築された平安時代の土坑と考えられる。検出状況も含めて、第66号土坑と良く類似した遺構である。

（工藤）

第68号土坑（ＳＫ－68）（図17・18）

［位置］ＶＣ－159グリッドに位置し、第Ⅵ層で確認した。

［平面形・規模］平面形はほぼ円形で、径1.39ｍである。深さは25㎝である。

［壁・底面］底面はやや起伏があり、壁は底面から緩やかに立ち上がる。
［堆積土］黒褐色土主体で、３層に分層した。第１・２層にはローム・炭化物を含む。
［出土遺物］１層から土師器片が２点、土器片が１点出土した。４は土師器の坏で、内面・外面共にロクロ調整である。土器片は表面が剥落しており、時期等の詳細は不明である。
［時期］出土遺物や堆積土の状況から平安時代と推定される。

第69号土坑（ＳＫ－69）（図17）

［位置］ＶＣ－162グリッドに位置し、第Ⅵ層で確認した。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、1.4×0.8ｍの大きさである。深さは10㎝である。
［壁・底面］壁は底面から開くように立ち上がり、北東側は緩やかである。Ⅶ層を底面とし、ほぼ水平である。
［堆積土］２層に分けられる。ロームを含んでおり、しまりは小さい。
［出土遺物］なし。
［時期］堆積土の状況から平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

第70号土坑（ＳＫ－70）（図17）

［位置］ＶＡ－162グリッドに位置し、第Ⅵ層で確認した。
［平面形・規模］遺構の南側部分は調査区外へ延びているが、平面形はほぼ円形と推定される。検出した遺構の大きさは径1.6ｍの大きさで、深さは92㎝である。
［壁・底面］壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。第Ⅶ層を底面とし、断面形状は弧状を呈する。
［堆積土］黒褐色土主体で、３層に分けられる。１層には十和田ａ火山灰とみられる火山灰ブロックが混入する。
［出土遺物］なし。
［時期］堆積土の状況から平安時代の土坑と推定される。

第71号土坑（ＳＫ－71）（図17）

［位置］ＶＢ－164グリッドに位置し、第Ⅳ層で確認した。
［平面形・規模］平面形はほぼ円形で、径0.82ｍである。深さは58㎝である。
［壁・底面］第Ⅶ層を底面とし、断面形状は弧状を呈する。
［堆積土］黒褐色土主体で、３層に分けられる。ロームや浮石の混合土層であり、人為堆積の可能性が高い。
［出土遺物］なし。
［時期］堆積土の状況から平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

第72号土坑（ＳＫ－72）（図17・18）

［位置］ＶＥ－163グリッドに位置し、第Ⅵ層で確認した。
［平面形・規模］平面形はほぼ円形で、径0.89ｍである。深さは50㎝である。

［壁・底面］第Ⅵ層を底面とし、壁はほぼ垂直に立ち上がる。
［堆積土］２層に分けられる。黒色土主体で、２層にはローム粒を含む。
［出土遺物］遺構上面から土器片１点が出土した。５は粗製深鉢の胴部である。
［時期］検出状況から、縄文時代の土器片は後世に混入した可能性がある。遺構の構築時期は平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

第73号土坑（ＳＫ－73）（図17）
［位置］ＶＢ－159グリッドに位置し、第Ⅵ層で確認した。
［平面形・規模］平面形はほぼ円形で、径0.71ｍである。深さは30㎝である。
［壁・底面］壁はほぼ垂直に立ち上がる。第Ⅶ層を底面とし、ほぼ水平である。
［堆積土］３層に分けられ、第Ⅶ層を底面とする。ロームがブロック状に混入していることから、人為堆積と思われる。
［出土遺物］１層から土師器片が１点出土したが、小片のため図示していない。
［時期］出土遺物や堆積土の状況から平安時代以降と推定される。

第74号土坑（ＳＫ－74）（図17）
［位置］ＶＢ－162グリッドに位置し、第Ⅵ層で確認した。
［平面形・規模］平面形は円形で径0.32ｍである。深さは13㎝である。
［壁・底面］壁は垂直に立ち上がる。第Ⅵ層を底面とし、ほぼ水平である。
［堆積土］２層に分けられる。堆積土の状況から自然堆積である。
［出土遺物］なし。
［時期］堆積土の状況から平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

第75号土坑（ＳＫ－75）（図17）
［位置］ＶＡ－158グリッドに位置し、第Ⅵ層で確認した。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、2.2×0.9ｍの大きさである。深さは35㎝である。
［壁・底面］壁は垂直に立ち上がる。第Ⅶ層を底面とし、ほぼ水平である。
［堆積土］２層に分けられ、堆積土の状況から人為堆積である。
［出土遺物］炭化材が数多く検出された。調査当初は製炭遺構の可能性を考えたが、遺構内に焼土がみられなかったので、炭化材を遺棄した土坑であると考えた。この炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、掘り込まれた地層中の木炭であった可能性を検討する必要があるとの結果を得ていることから、土坑に遺棄された木炭である可能性が高い。
［時期］堆積土の状況から平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

第76号土坑（ＳＫ－76）　欠番

第77号土坑（ＳＫ－77）（図17・18）

［位置］ＶＡ－161グリッドに位置し、第Ⅵ層で確認した。

［重複］第36号竪穴住居跡と重複しており、本遺構のほうが新しい。

［平面形・規模］当初、本遺構は第36号竪穴住居跡に付随するカマドと考え調査をした。よって東側半分の形状は不明であるが残存部から楕円形であると思われる。大きさは残存部で（0.76）×（0.37）m、深さは（５）㎝である。

［壁・底面］底面から緩やかに立ち上がる。底面形状は弧状を呈するものと思われる。

［堆積土］１層のみの単層で、黒色土を主体としている。

［出土遺物］土師器３点を図化した。ただし、出土した土器片の一部は第36号竪穴住居跡のものである可能性がある。８は高台坏で底部のみの出土である。

第78号土坑（ＳＫ－78）　欠番

第79号土坑（ＳＫ－79）　欠番

第80号土坑（ＳＫ－80）（図17）

［位置］ⅣＸ－153グリッドに位置し、第Ⅵ層で確認した。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、0.5×0.6ｍの大きさである。深さは28㎝である。

［壁・底面］壁面は緩やかに立ち上がる。第Ⅶ層を底面とし、やや起伏がある。

［堆積土］３層に分けられる。黒褐色土を主体とした人為堆積である。

［出土遺物］なし

［時期］堆積土の状況から平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

（大平）

第81号土坑（ＳＫ－81）（図17）

［位置］ＶＧ－165グリッドに位置し、基本土層のＶ層上面で黒褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。

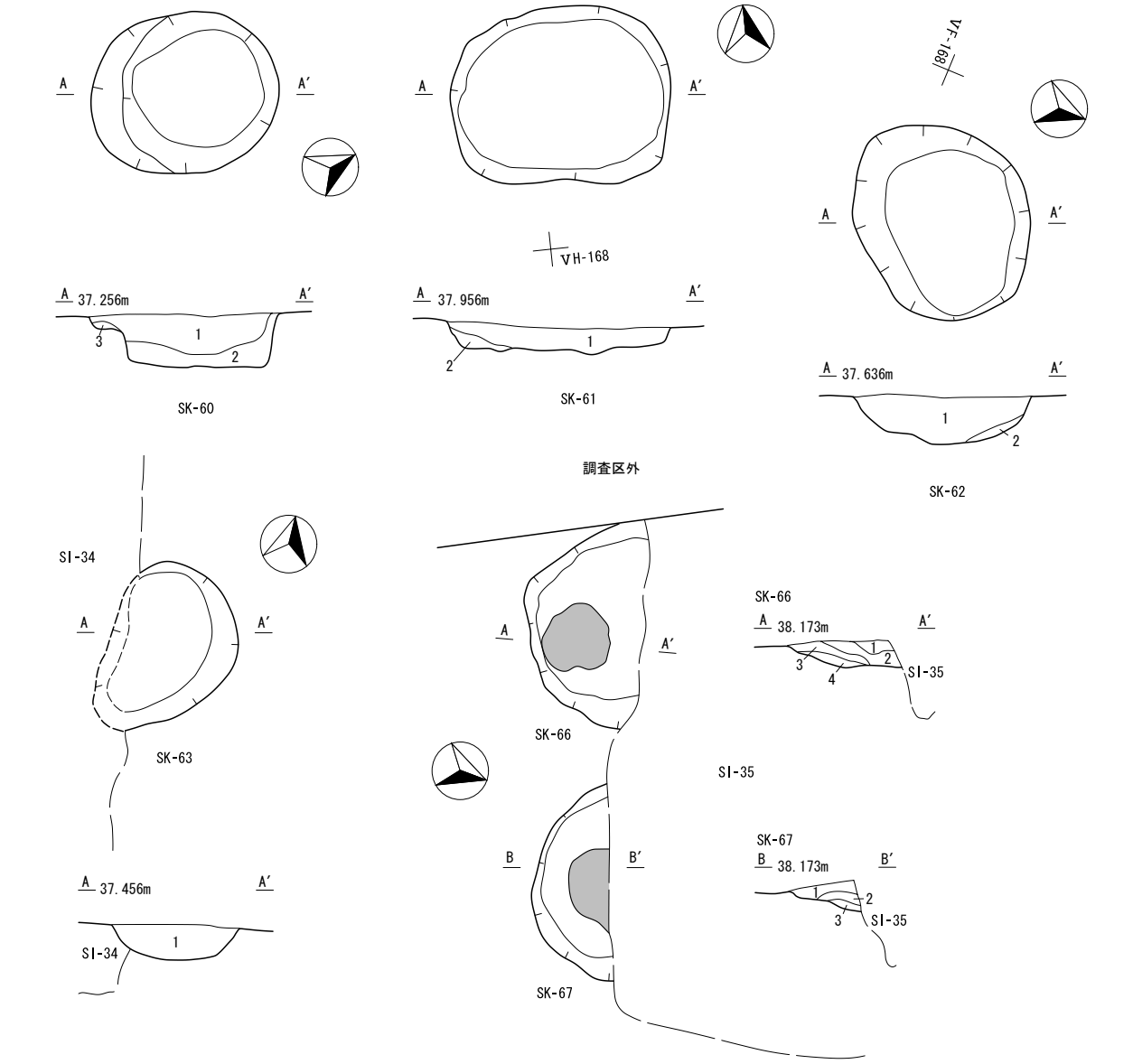
［平面形・規模］平面形は、確認面で直径約0.85ｍ、底面で直径約0.7ｍの不整円形である。確認面からの深さは22～26㎝である。

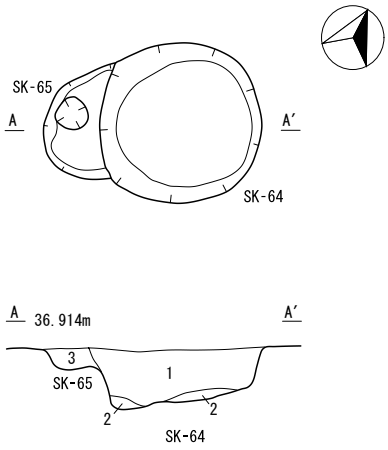
［壁・床面］基本土層のＶ層を掘り込み、同層を底面としている。底面には凹凸がある。壁面には崩落がみられ、壁の傾斜が緩くなっている。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、壁寄りに崩落した地山（基本土層のＶ層）の土を含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］堆積土から、土器の細片が出土した。縄文土器と思われるが、時期等は不明である。

［時期］不明である。　（工藤）





第60号土坑

1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質。黄褐色土のブロック(φ0.5mm～30mm)を10%、軽石を1%含む。
2層	黒色土	10YR2/1	シルト質。黄褐色土のブロック(φ0.5mm～20mm)を2%、軽石を1%含む。
3層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	粘土質。黄褐色土のブロック(φ10mm～20mm) を3%、軽石を1%、黒色土を含む。

第61号土坑

1層	黒色土	10YR2/1	シルト質。黄褐色土のブロック(φ0.5～40mm)を3%含む。
2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質。黄褐色土のブロック(φ0.5mm～20mm)を50%含む。

第62号土坑

1層	黒色土	10YR2/1	シルト質。黄褐色土のブロック(φ0.5mm～20mm)を3%、灰白色火山灰を1%、軽石を1%、焼土を1%含む。
2層	明黄褐色土	10YR6/6	やや粘土質。黄褐色土のブロック(φ30mm)を3%、黒色土を10%、にぶい黄褐色土を25%含む。

第63号土坑

1層	褐色土	10YR4/4	やや粘土質。黄褐色土のブロック(φ1.0mm～60mm)を50%、灰黄褐色土を1%、軽石を1%、焼土粒を1%含む。

第64号土坑

1層	黒色土	10YR2/1	シルト質。黄褐色土のブロック(φ1mm～70mm)を10%含む。
2層	黄褐色土	10YR5/8	やや粘土質。黄褐色土のブロック(φ40mm～80mm)を40%、黒色土を10%含む。

第65号土坑

3層	黒褐色土	10YR2/3	シルト質。黄褐色土のブロック(φ1mm～100mm)を30%含む。

第66号土坑

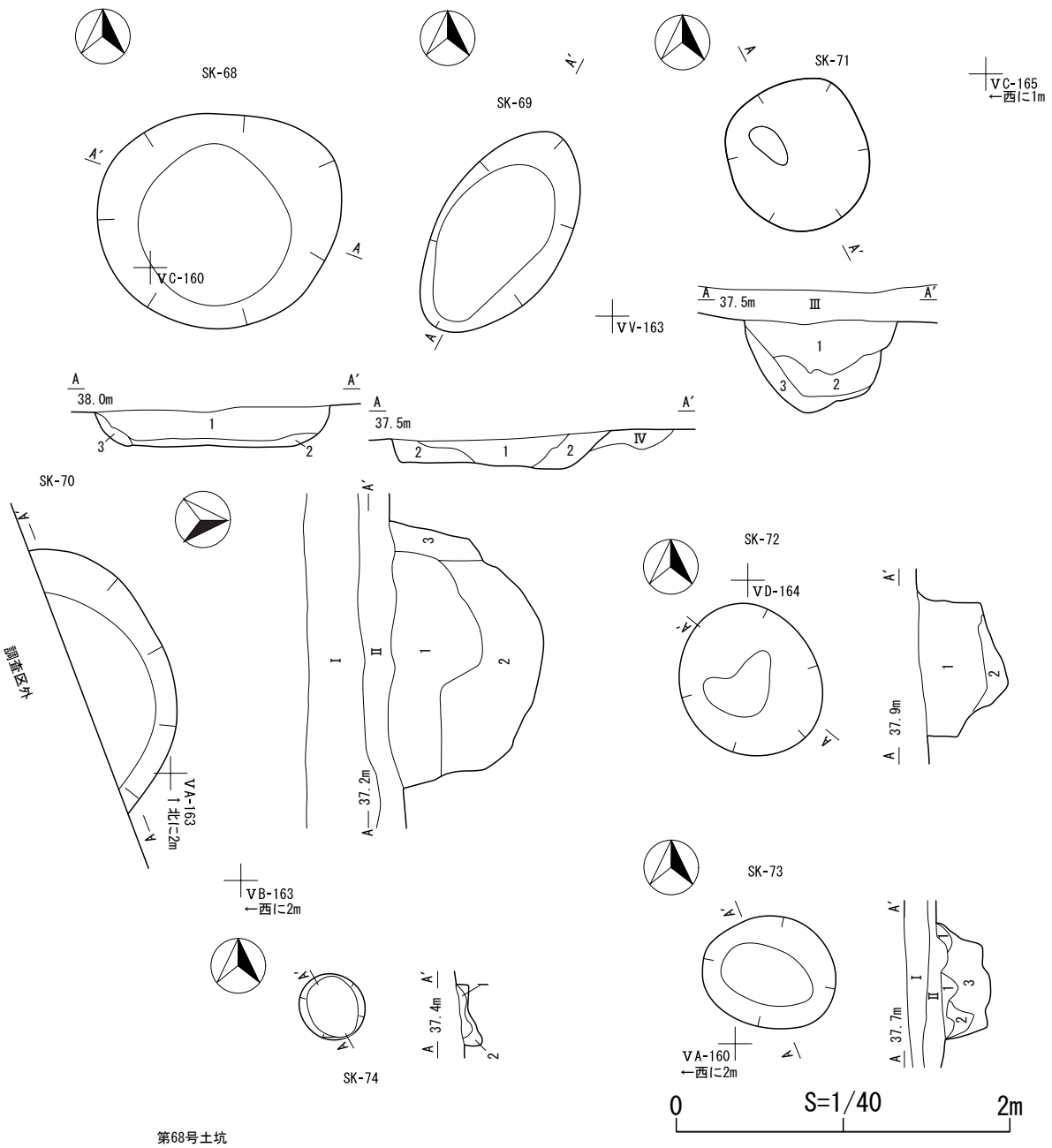
1層	黒色土	10YR2/1	シルト質。黄褐色土を3%、軽石を2%含む。
2層	黒褐色土	10YR2/3	シルト質。黄褐色土のブロック(φ0.5mm～20mm)を15%、軽石を2%、炭化物を1%、焼土を1%含む。
3層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質。十和田a火山灰の小ブロックを含む。灰黄褐色を10%、軽石を3%、黒色土を2%、焼土を30%含む。
4層	暗赤褐色土	5YR3/4	焼土層。やや粘土質。

第67号土坑

1層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質。
2層	暗褐色土	10YR3/3	十和田a火山灰の小ブロックを少量含む。
3層	暗赤褐色土	5YR3/4	焼土層。シルト質。

0　S=1/40　2m

図16　土坑(1)



第68号土坑
1層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒(φ1～10mm)10%、炭化物(φ1～5mm)5%、しまり小
2層　黒褐色土　10YR2/3　明黄褐色土(10YR6/6)20%、炭化物(φ1～5mm)3%、しまり小
3層　明黄褐色土 10YR6/6　粘土質、炭化物(φ1～5mm)3%、しまり小

第69号土坑
1層　黒褐色土　10YR2/2　明黄褐色土(10YR6/8)10%、パミス(φ1mm以下)5%、ローム粒(φ2mm以下)5%、しまり小
2層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒(φ1mm以下)2%、パミス(φ1mm以下)1%、しまり小

第70号土坑
1層　黒褐色土　10YR2/2　黄褐色土(2.5Y5/4)5%、炭化物(φ1～2mm)3%、しまり小
2層　黒褐色土　7.5YR2/2 褐色土(10YR4/6)10%、炭化物(φ1～2mm)3%、しまり小
3層　黒褐色土　7.5YR3/2 パミス(φ1mm以下)3%、しまり小

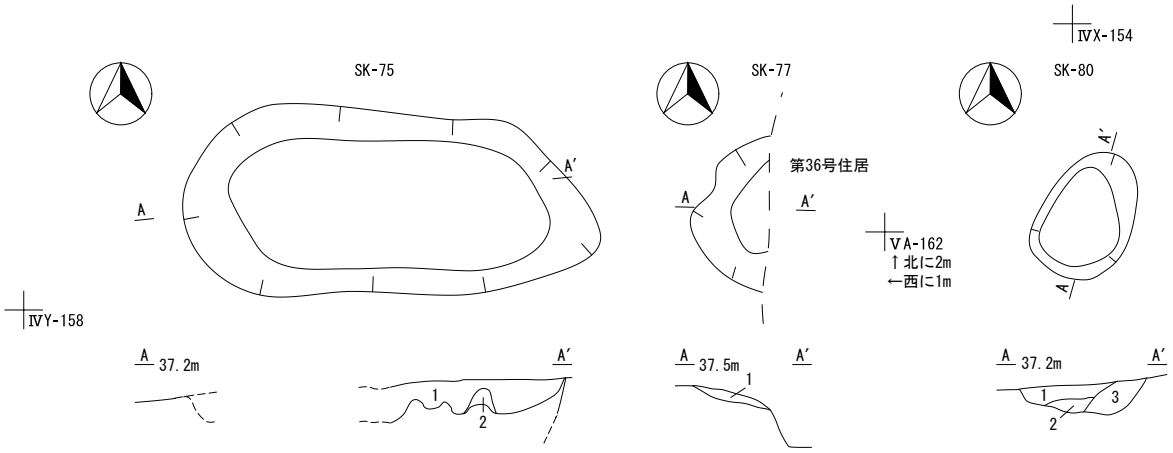
第71号土坑
1層　黒褐色土　10YR2/2　パミス(φ1mm以下)2%、ローム粒(φ1～5mm)10%、しまり小、炭化物(φ1～5mm)2%
2層　黒褐色土　10YR2/3　パミス(φ1mm以下)2%、ローム粒(φ1～5mm)3%、炭化物(φ1mm以下)1%、しまり小
3層　黄褐色土　10YR5/8　粘土質、しまり小

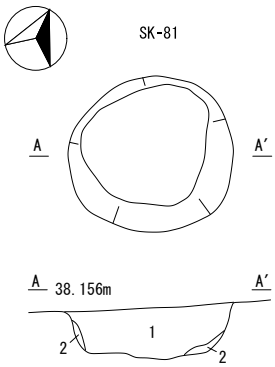
第72号土坑
1層　黒色土　10YR2/1　明黄褐色土(10YR6/8)7%、パミス(φ1mm以下)1%、しまり小
2層　明黄褐色土 10YR6/8　ローム粒(φ1～2mm)10%、炭化物(φ1mm以下)1%、しまりやや小

第73号土坑
1層　暗褐色土　10YR3/4　炭化物(φ1mm以下)2%、ローム粒(φ1mm以下)5%
2層　黄褐色土　10YR5/8　炭化物(φ1mm以下)1%、しまり小
3層　黄褐色土　10YR5/6　黒褐色土(10YR2/2)15%、炭化物(φ1mm以下)1%、しまり小

第74号土坑
1層　黒褐色土　10YR2/2　パミス(φ1mm以下)5%、しまり小
2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒(φ1～2mm)3%、しまり小

図17　土坑(２)





第75号土坑

1層	黒褐色土	10YR2/3 褐色土(10YR4/6)30%、明黄褐色土(10YR7/6)15%、炭化物(φ2～10mm)5%
2層	にぶい黄橙色粘土質土	10YR6/4 明黄褐色土(10YR6/8)30%、にぶい黄橙色粘土質土(10YR7/4)10%

第77号土坑

1層	黒色土(10YR1.7/1)と黄褐色土(10Y5/8)の混合土	

第80号土坑

1層	黒色土	10YR2/1 明黄褐色土(10YR6/8)5%
2層	黒褐色土	10YR3/1 明黄褐色土(10YR6/8)7%
3層	黒褐色土	10YR3/2 黒色土(10YR2/1)5%、明黄褐色土(10YR6/8)2%

第81号土坑

1層	黒褐色土	10YR2/2 シルト質。黄褐色土のブロック(φ0.5mm～30mm)を5%、軽石を1%含む。
2層	暗褐色土	10YR3/3 シルト質。黄褐色土のブロック(φ0.5mm～40mm)を20%、軽石を1%、黒色土を含む。

0 S=1/40 2m

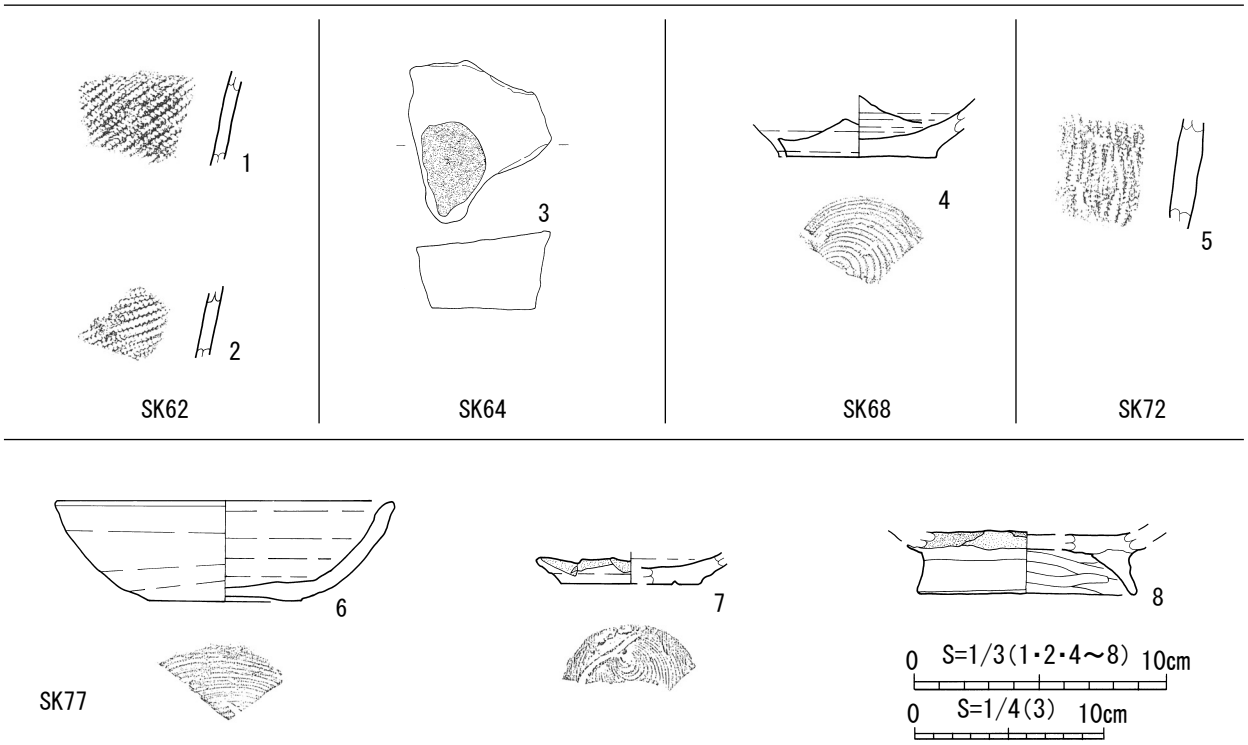


図18　土坑(3)

３　溝状土坑

第17号溝状土坑（ＳＶ－17）（図19）

［位置］ＶＣ・ＶＤ－165グリッドに位置し、調査区域南側の沢に面した急傾斜地に構築されている。基本土層のⅢ層相当層中で黒褐色土と黒色土の落ち込みとして平面形を確認した。

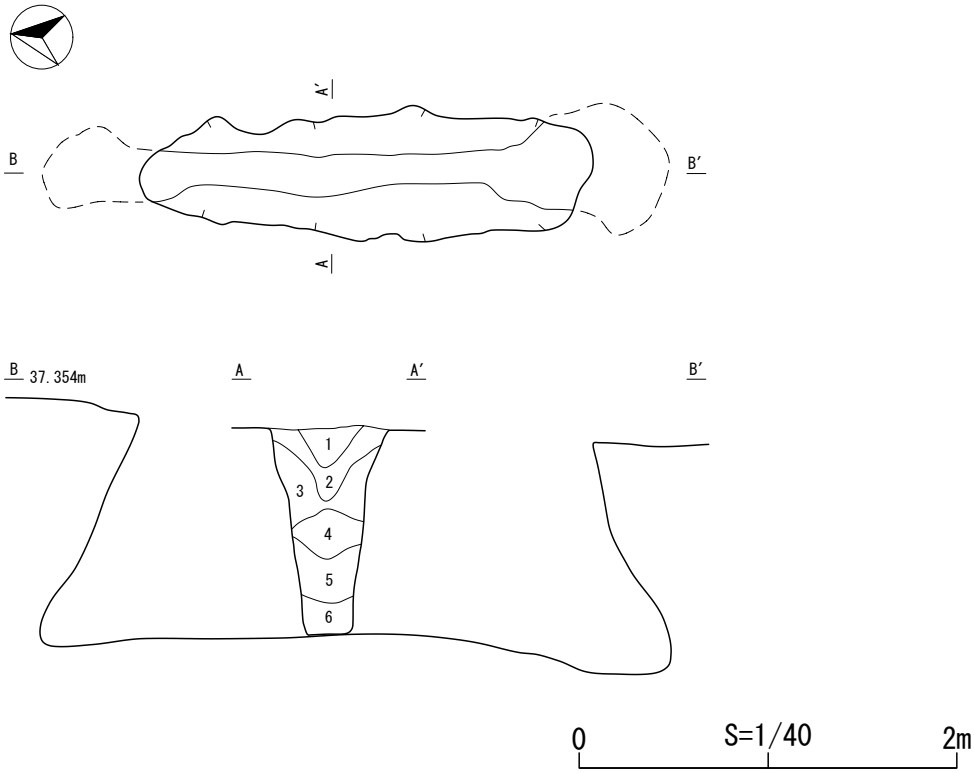
［平面形・規模］平面形は、直線的な短い溝状の形態になっている。大きさは、確認面で長さ2.40m、幅0.70m、底面で長さ3.32m、最大幅0.68mである。底面の両端部が開口部よりも外側に張り出して、大きく膨らんでいる。確認面からの深さは1.10～1.20mである。

［壁・床面］基本土層のⅦ層まで急角度で掘り込み、同層を底面としている。底面の中央部から北側はほぼ平坦であるが、南側はかなり南方へ傾斜している。壁面の上部は全体的に崩落しており、特に土坑の中央部では壁面の崩落のため開口部が拡がっている。

［堆積土］黒褐色と黒色土を主体とし、下部に崩落した地山（基本土層のⅣ・Ⅶ層）の土を多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］類例から縄文時代の土坑と考えられる。　（工藤）



第17号溝状土坑
1層　黒褐色土 10YR2/3　シルト質。褐色土のブロック（φ0.5㎜～40㎜）を40%、中撥軽石を30%含む。
2層　黒色土　10YR2/1　シルト質。黄褐色土を1%、中撥軽石を3%含む。
3層　黒褐色土 10YR2/2　シルト質。黄褐色土・灰黄褐色土(Ⅳ層相当層)を40%含む。
4層　黒色土　10YR1.7/1 シルト質。黄褐色土・灰黄褐色土(Ⅳ層相当層)を50%含む。
5層　黒褐色土 10YR2/2　シルト質。黄褐色土・灰黄褐色土(Ⅳ層相当層)・浅黄褐色粘土(Ⅶ層)を40%含む。
6層　黒褐色土 10YR3/2　シルト質。浅黄褐色粘土を40%含む。

図19　溝状土坑

４　溝跡

第11号溝跡（ＳＤ－11）（図20）

［位置］ＶＡ－163～ＶＤ－162グリッドに位置し、第Ⅵ層で確認した。南北両端とも調査区外に延びている。

［重複］なし。

［構造］北北西から南南東方向へ延びる溝跡で、確認部分の長さ13.7m、幅47～28.5cm、深さ40cmほどである。

［堆積土］南側、北側共に２層に分層した。北側は黒色土を主体としており、底部にローム粒がみられる。南側の底部は明黄褐色土で、ローム粒が多く堆積している。

［出土遺物］なし。

［小結］時期決定の根拠に乏しいが、位置や堆積土の状況から排水や区画等を主用途とした平安期以降の溝跡と推定される。

（大平）

５　ピット・ピット群

本調査区から14基のピットを検出した。そのうち13基は２つのピット群に分けられ、それぞれ第１ピット群、第２ピット群と命名した。

第１ピット群（図20）

［位置］ＶＡ・ＶＢ－157グリッドの範囲内に10基検出した。ピット２～４・12及びピット５～８・13は南北を軸として、それぞれほぼ列状に並ぶ。間隔についての規則性はない。

［出土遺物］ピット14の１層からは土器片が１点出土した。67は縄文時代中期後葉から後期前葉の土器で、口頸部から胴部下半のものと思われる。０段多条（ＲＬ）を施文しており、表面にはスス状の炭化物が付着している。

［小結］柱穴の掘り方は円形や楕円形など様々で、深さも揃ってはいない。ピット14から縄文土器（１）が出土しているが、堆積土は黒色土の単層で表土と区別がつきにくいため、後世に混入した可能性がある。よって中世または近世～現代までの耕作等に関わる杭跡とも考えられる。

第２ピット群（図20）

［位置］ⅣＸ・ⅣＹ－152・153グリッドの範囲内に３基検出した。ピット9～11は西南西―東北東を軸として、ほぼ列状に並ぶ。間隔についての規則性はない。

［出土遺物］なし。

［小結］北側が調査区外に延びるため、形は断定できないが堆積土には火山灰等が見られない。中世または近世～現代までの耕作等に関わる杭跡とも考えられる。

（大平）

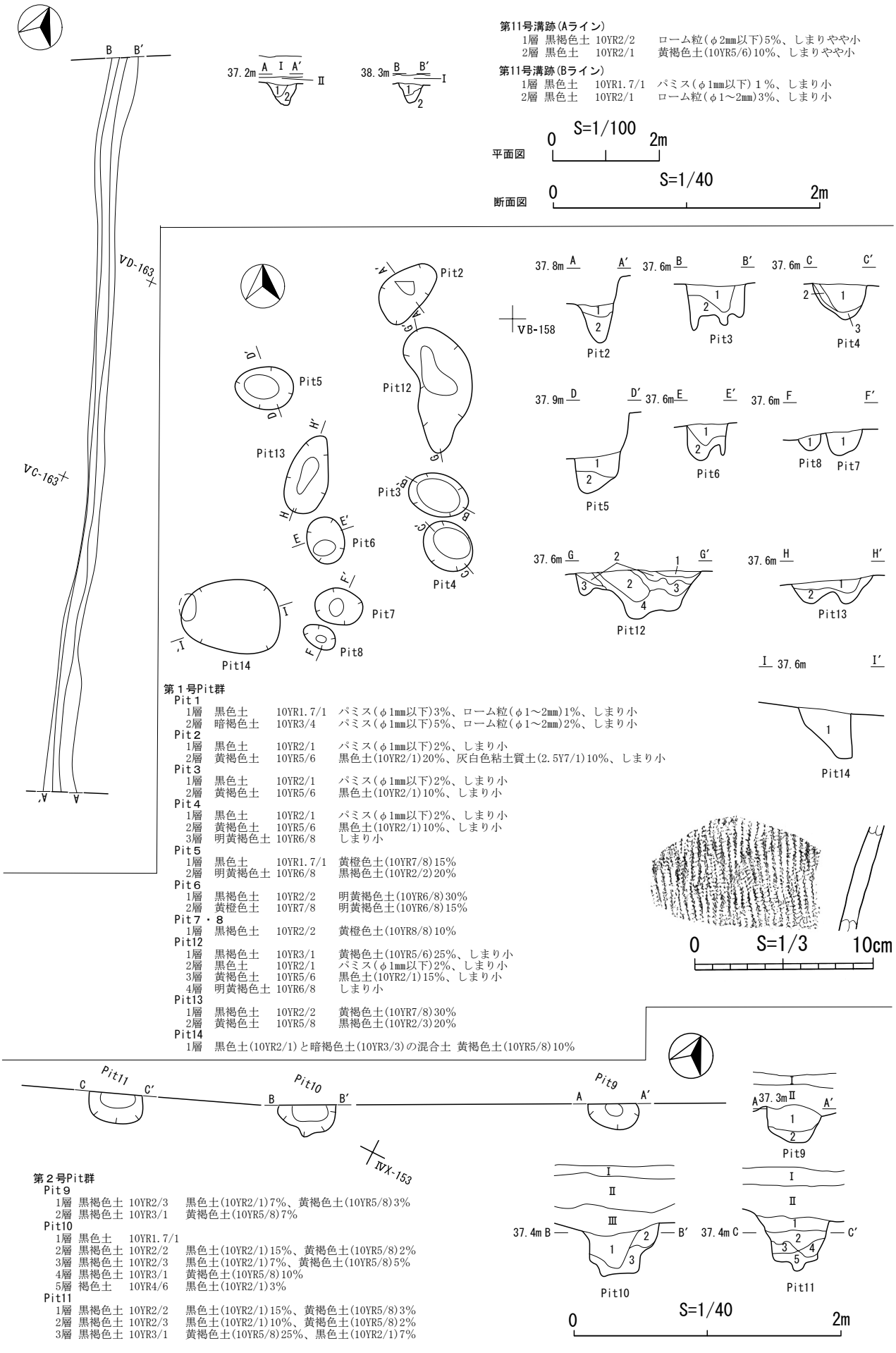

第11号溝跡(Aライン)
1層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒(φ2mm以下)5%、しまりやや小
2層 黒色土 10YR2/1 黄褐色土(10YR5/6)10%、しまりやや小
第11号溝跡(Bライン)
1層 黒色土 10YR1.7/1 パミス(φ1mm以下)1%、しまり小
2層 黒色土 10YR2/1 ローム粒(φ1～2mm)3%、しまり小
平面図 S=1/100
断面図 S=1/40
第1号Pit群
Pit1
1層 黒色土 10YR1.7/1 パミス(φ1mm以下)3%、ローム粒(φ1～2mm)1%、しまり小
2層 暗褐色土 10YR3/4 パミス(φ1mm以下)5%、ローム粒(φ1～2mm)2%、しまり小
Pit2
1層 黒色土 10YR2/1 パミス(φ1mm以下)2%、しまり小
2層 黄褐色土 10YR5/6 黒色土(10YR2/1)20%、灰白色粘土質土(2.5Y7/1)10%、しまり小
Pit3
1層 黒色土 10YR2/1 パミス(φ1mm以下)2%、しまり小
2層 黄褐色土 10YR5/6 黒色土(10YR2/1)10%、しまり小
Pit4
1層 黒色土 10YR2/1 パミス(φ1mm以下)2%、しまり小
2層 黄褐色土 10YR5/6 黒色土(10YR2/1)10%、しまり小
3層 明黄褐色土 10YR6/8 しまり小
Pit5
1層 黒色土 10YR1.7/1 黄橙色土(10YR7/8)15%
2層 明黄褐色土 10YR6/8 黒褐色土(10YR2/2)20%
Pit6
1層 黒褐色土 10YR2/2 明黄褐色土(10YR6/8)30%
2層 黄橙色土 10YR7/8 明黄褐色土(10YR6/8)15%
Pit7・8
1層 黒褐色土 10YR2/2 黄橙色土(10YR8/8)10%
Pit12
1層 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色土(10YR5/6)25%、しまり小
2層 黒色土 10YR2/1 パミス(φ1mm以下)2%、しまり小
3層 黄褐色土 10YR5/6 黒色土(10YR2/1)15%、しまり小
4層 明黄褐色土 10YR6/8 しまり小
Pit13
1層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色土(10YR7/8)30%
2層 黄褐色土 10YR5/8 黒褐色土(10YR2/3)20%
Pit14
1層 黒色土(10YR2/1)と暗褐色土(10YR3/3)の混合土 黄褐色土(10YR5/8)10%
S=1/3 10cm
第2号Pit群
Pit9
1層 黒褐色土 10YR2/3 黒色土(10YR2/1)7%、黄褐色土(10YR5/8)3%
2層 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色土(10YR5/8)7%
Pit10
1層 黒色土 10YR1.7/1
2層 黒褐色土 10YR2/2 黒色土(10YR2/1)15%、黄褐色土(10YR5/8)2%
3層 黒褐色土 10YR2/3 黒色土(10YR2/1)7%、黄褐色土(10YR5/8)5%
4層 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色土(10YR5/8)10%
5層 褐色土 10YR4/6 黒色土(10YR2/1)3%
Pit11
1層 黒褐色土 10YR2/2 黒色土(10YR2/1)15%、黄褐色土(10YR5/8)3%
2層 黒褐色土 10YR2/3 黒色土(10YR2/1)10%、黄褐色土(10YR5/8)2%
3層 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色土(10YR5/8)25%、黒色土(10YR2/1)7%
S=1/40

図20 溝跡・ピット群

第２節　遺構外出土遺物

１　縄文土器（図21）

18点出土し、そのうち13点を図化した。出土地点は調査区東側から比較的多く出土しているが出土地点は散在しており、出土層位はⅠ・Ⅱ層である。特徴として、平口縁で口頸部が内反する深鉢系の土器と思われ、粗製縄文である。また、器内外面にスス状炭化物の付着がみられるものが多く、煮沸に使用した可能性がある。器面の施文は口唇部よりから底辺部にかけて全面に縄文を施文している。時期は器厚の薄さ及び口唇部のつくり方から判断して、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけてのものと思われるが、形式名は判断できない。

図21－１～３は土器の底部で平底である。１は底面に網代痕がみられ、１・２は内面にスス状炭化物の付着が見られる。４・６・７は口縁部で平口縁である。７の外面にはイネ科植物の茎の混入しており、土器製作時の混入物を知る上で貴重な資料となり得るものである。８は外面に、11は内面にスス状炭化物の付着がみられる。文様は４が縄文ＲＬだが、他はすべて縄文ＬＲである。

２　石器（図21）

剥片石器

５点出土した。いずれもスクレイパーで、石質は珪質頁岩である。21の一部には押圧剥離痕が施され、使用痕と思われるものが見られる。

礫石器

２点出土した。いずれも敲磨器類である。15は安山岩で、上面及び左側面に擦り痕が見られる。16はデイサイトで、上面及び上端部に敲き痕がみられる。上面のくぼみ痕は敲打痕の集中によって生じたものである。

３　古代から近世の遺物（図21）

土師器

132点出土し、そのうち１点を図示した。22はロクロ成形による坏で、回転糸切り底である。

須恵器

６点出土し、そのうち３点を図示した。23は短頸壺の口縁部から頸部にかけてのもので、口縁部は外側に大きく外反する。23は短頸壺の口縁破片、24は甕の胴部で、器表面はヘラナデである。25は器表面にタタキがみられるものである。

石器

有孔石製品が１点（17）出土した。凝灰岩で両側から穿孔がなされている。右側を欠損しているが、残存部から円形を呈すると思われる。

土製品

近世の土人形の一部と思われるもの（14）が１点出土した。残存部が少ないので詳細は不明だが、形態から吸口とみられる。

（土師器・須恵器－成田・大平　その他－大平）

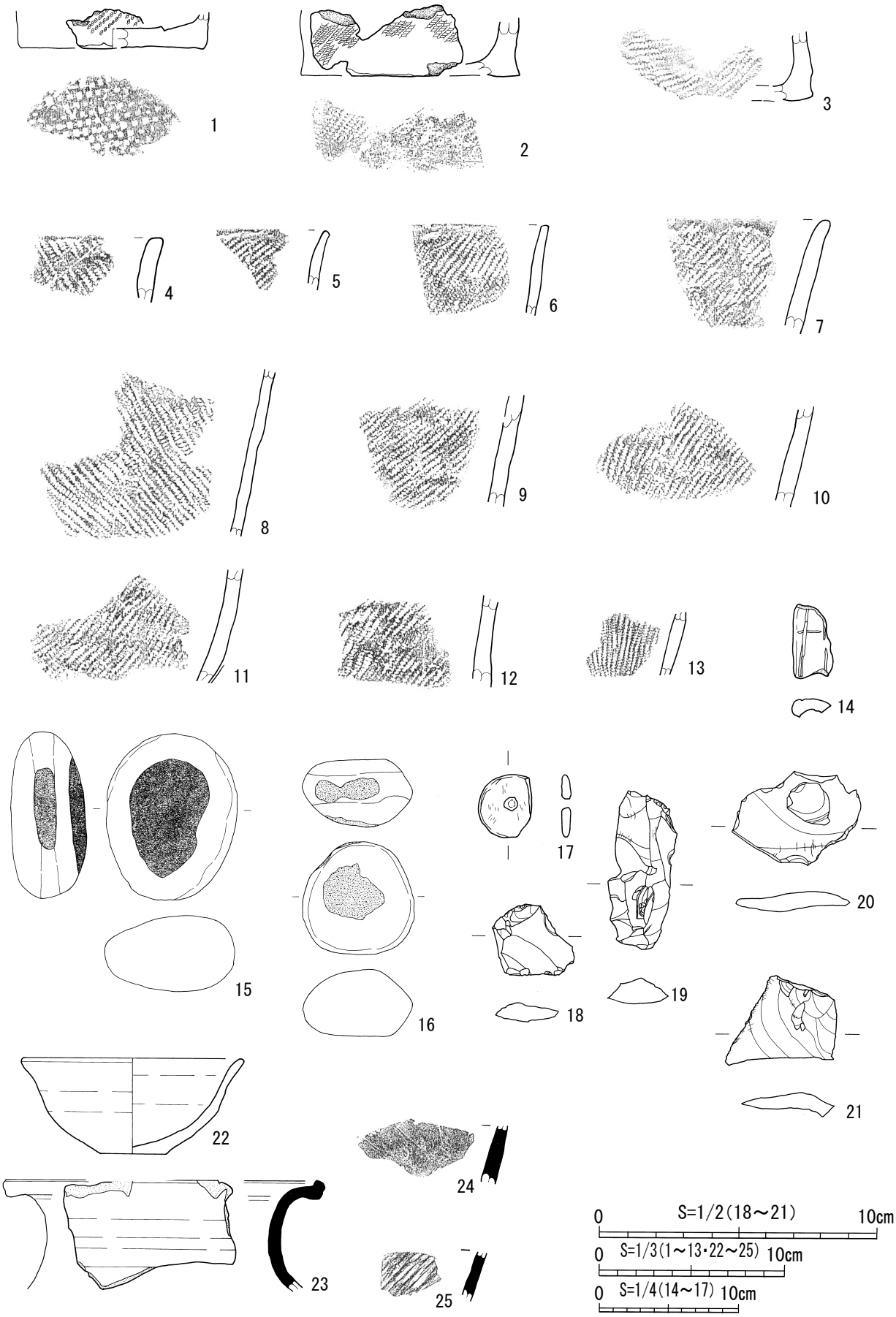

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
0 S=1/2(18～21) 10cm
0 S=1/3(1～13・22～25) 10cm
0 S=1/4(14～17) 10cm

図21　遺構外出土遺物

第３章　まとめ

倉越(２)遺跡は、平成15・16年度及び平成19・20年度に発掘調査を行った。今回の報告は平成19・20年度の発掘調査報告である。調査の結果、検出された遺構数は、竪穴住居跡７棟（内、２棟は平成16年度発掘調査で調査区外に伸びていた住居跡)、土坑19基、溝跡１条、溝状土坑１基、ピット群２基である。

今回の調査で検出した竪穴住居跡は４棟とも方形を呈し、いずれも他の住居との重複はみられなかった。第34号竪穴住居跡は全体の形態が分かるような状況で検出した。カマドは北壁に面した半地下式のもので、煙道部と燃焼部を確認している。天井部の崩落土部分から自然礫が2個出土していることから、部分的に礫を芯材とした可能性がある。また、この住居跡の焼土及び炭化材の検出状況から焼失住居であると考えられる。その他の３棟は一部が調査区外に延びているので、全体的な形状は断定できなかった。第35号住居跡からも半地下式のカマドを検出したが、調査区域との境目に位置しており、カマドの形状は把握できなかった。燃焼部からは羽口を転用した支脚が出土している。

溝跡は調査区を南北に横切るような形で、第11号溝跡が検出された。途中で調査区外に伸びるため断定はできないが、北側は平成16年度の調査で検出された第１号溝跡へ続く可能性がある。また南側は谷へと延びていると思われる。今回の調査では帰属時期の特定はできなかったが、平成16年度の調査でも平安時代の溝跡の可能性を示唆しただけで、火山灰降下との前後関係は不明との調査結果が出ている。いずれにせよ、形態や周辺の地形から主に集落周辺の排水のために構築された可能性が考えられる。

出土遺物については第35・36号竪穴住居跡からの出土が多い。第35号住居跡からは羽口が出土しているが、土師器の甕は緩やかに頸部が屈曲するものが多い。また、土師器の坏はロクロ調製のものが多い。土師器の出土状態は破片が散在して出土したものが多く、完形品は第35号住居跡から出土した土師器の甕１点のみである。第36号竪穴住居跡から木製の椀の一部と思われるものが出土している。炭化しており、完形ではないので全体の大きさ等は不明である。

縄文時代の遺物としては、土器片が若干出土した。すべてが破片資料であり、完形品はないので、全体の大きさや形態は判断できない。また、縄文時代と思われる遺構も検出されなかったことから、この時代の状況は不明である。

調査区内で検出した遺構や出土遺物、火山灰の堆積状況から、今回調査した倉越(２)遺跡は平安時代の集落跡であると考えられる。今回の調査範囲は広くはないが、平成15・16年度の発掘調査で検出された集落跡の一部を構成するものである。　（大平）

引用・参考文献

青森県教育委員会（2005)『倉越(２)遺跡・大池館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第389集
青森県教育委員会（2006)『大沢遺跡・寒水遺跡・倉越(２)遺跡Ⅱ・大池館遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第417集
青森県教育員会（2007)『太田野(２)遺跡・太田野(３)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第427集
青森県教育委員会（2008)『太田野(２)遺跡Ⅱ・太田(１)遺跡・北野(１)遺跡・北野(２)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第455集
宇部　則保（2002)「東北北部型土師器にみられる地域性」『海と考古学とロマンー市川金丸先生古稀記念献呈論文集』市川金丸先生古稀を祝う会

第３編　太田（２）遺跡

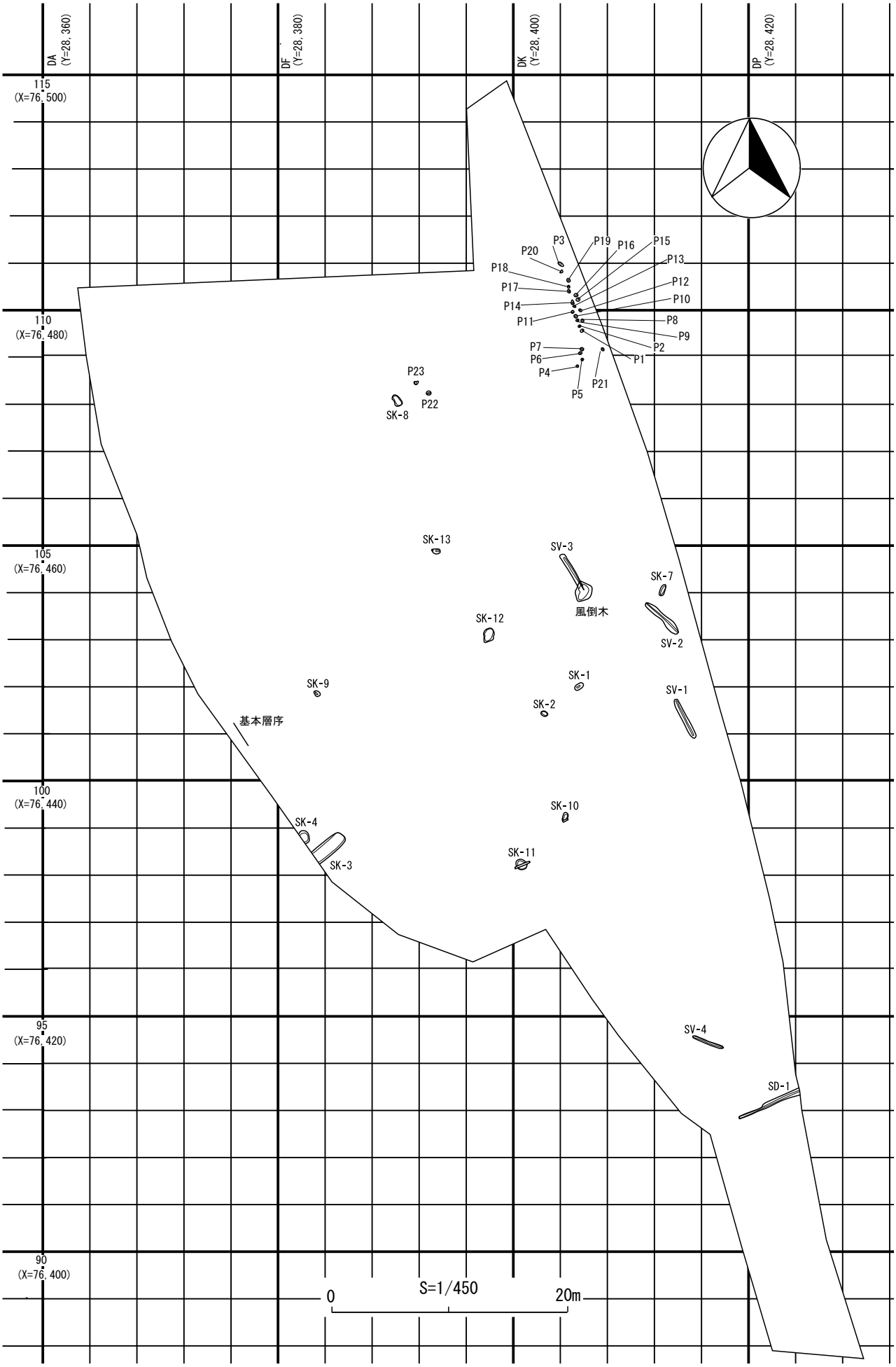

DA (Y=28,360)
DF (Y=28,380)
DK (Y=28,400)
DP (Y=28,420)
115 (X=76,500)
110 (X=76,480)
105 (X=76,460)
100 (X=76,440)
95 (X=76,420)
90 (X=76,400)
P3
P19
P16
P15
P20
P13
P18
P12
P17
P10
P14
P8
P11
P9
P7
P2
P6
P1
P4
P21
P5
P23
P22
SK-8
SK-13
SV-3
SK-7
風倒木
SK-12
SV-2
SK-1
SK-9
SV-1
SK-2
基本層序
SK-10
SK-4
SK-11
SK-3
SV-4
SD-1
0
S=1/450
20m

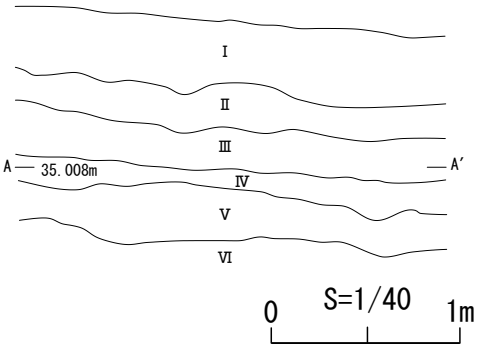
図22　遺構配置図

第１章　基本層序と地形

層位は第Ⅰ～Ⅵ層の６層区分をおこなった。第Ⅰ層は黒色土で草木痕の多い表土層、第Ⅱ層は黒色土で黒褐色土が混入している層であり、遺構外の遺物も第Ⅱ層中からの出土が多い。第Ⅲ層は黒褐色土で、アワ砂を含む層である。第Ⅳ層は褐色土で黒褐色土を含む。第Ⅴ層・第Ⅵ層は地山層である。遺構は、第Ⅳ・Ⅴ層で検出した。

地形は大林川右岸と川去川左岸に位置し、沢筋と台地が連なる台地に位置している。調査区は標高約35ｍで東側から西側に傾斜しており、現状は山林である。平成18年度に当センターが確認調査を実施している。本年度の調査範囲は2,800㎡である。

（成田）



基本層序

Ⅰ層	黒色土	10YR2/1	アワ砂2%
Ⅱ層	黒色土	10YR1.7/1	黒褐色土(10YR2/3)10%、アワ砂3%
Ⅲ層	黒褐色土	10YR2/2	黒色土(10YR1.7/1)40%、暗褐色土(10YR3/4)10%、アワ砂15%
Ⅳ層	褐色土	10YR4/1	黒褐色土(10YR2/2)40%
Ⅴ層	明黄褐色土	10YR6/8	暗褐色土(10YR3/4)10%
Ⅵ層	明黄褐色土	10YR7/6	褐色土(7.5YR4/6)20%

図23　基本層序

第２章　検出遺構と出土遺物

第１節　検出遺構と出土遺物

１　土坑

第１号土坑（ＳＫ－１）（図24）

［位置と確認］本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドＤＬ-102・103に位置している。第Ⅲ層面を精査中に確認した。

［平面形・規模］平面形は全体に丸みを有する楕円形である。規模は、長径0.82ｍ・短径0.46ｍを測る。

［壁・底面］壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁24㎝・西壁22㎝・南壁21㎝・北壁16㎝を測る。底面は東側から西側にかけて傾斜している。

［堆積土］褐色土が混入した黒色土で区分できなかった。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第２号土坑（ＳＫ－２）（図24）

［位置と確認］本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドＤＫ-101に位置している。第Ⅲ層面を精査中に確認した。

［平面形・規模］平面形は全体に丸みを有する楕円形である。規模は、長径0.62m・短径0.42mを測る。
［壁・底面］壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁20cm・西壁17cm・南壁17cm・北壁16cmを測る。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］アワズナがブロック状に混入した黒褐色土で区分できなかった。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第３号土坑（ＳＫ－３）（図24）

［位置と確認］本遺構は調査区西側で、グリッドＤＦ・ＤＧ-98に位置している。第Ⅰ層を精査中に確認した。西側は調査区域外のため遺構の全容は確認できなかった。
［平面形・規模］平面形は側縁部が直線的で、端部が丸みを有する楕円形である。規模は、長径（2.98）m・短径1.26mを測る。
［壁・底面］壁は上端から底面に傾斜している。壁高は、東壁60cm・西壁不明・南壁62cm・北壁68cmを測る。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］堆積土は４層に区分できた。第１・２層中には炭化物を含んでいる。断面観察等から自然堆積と考えられる。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第４号土坑（ＳＫ－４）（図24）

［位置と確認］本遺構は調査区西側で、グリッドＤＦ-98に位置している。第Ⅲ層を精査中に遺構を確認した。西側は調査区域外のため遺構の全容は確認できなかった。
［平面形・規模］平面形は全体に丸みを有する楕円形である。規模は、長径1.14m・短径（0.58）mを測る。
［壁・底面］壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁32cm・西壁不明・南壁46cm・北壁44cmを測る。底面は、やや起伏がみられる。
［堆積土］堆積土は４層に区分できた。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第５号土坑（ＳＫ－５）　欠番

第６号土坑（ＳＫ－６）　欠番

第７号土坑（ＳＫ－７）（図24）

［位置と確認］本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドＤＮ-103・104に位置している。第Ⅳ層面で遺構を確認した。
［平面形・規模］平面形は全体に丸みを有する楕円形である。規模は、長径1.02m・短径0.4mを測る。
［壁・底面］壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁28cm・西壁22cm・南壁24cm・北壁27cmを測る。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］堆積土は３層に区分できた。褐色土及びローム土を混入しており、断面観察等から人為堆積と考えられる。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第８号土坑（ＳＫ－８）（図25）

［位置と確認］本遺構は調査区北側の緩斜面で、グリッドＤＨ-108に位置している。第Ｖ層中で遺構を確認した。
［平面形・規模］平面形は側縁部が直線的で、端部が丸みを有する楕円形である。規模は、長径1.02m・短径0.54mを測る。
［壁・底面］壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁14cm・西壁16cm・南壁17cm・北壁17cmを測る。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］堆積土は３層に区分できた。全体にローム土を混入している。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第９号土坑（ＳＫ－９）（図25）

［位置と確認］本遺構は調査区西側の緩斜面で、グリッドＤＦ-101に位置している。
［平面形・規模］平面形は全体に丸みを有する楕円形である。規模は、長径0.57m・短径0.42mを測る。
［壁・底面］壁は北壁が底面から中端にかけて垂直に立ち上がり、上端にかけて広がる。他の壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁26cm・西壁22cm・南壁21cm・北壁27cmを測る。底面は断面が丸底を有する。
［堆積土］堆積土は２層に区分できた。１・２層中ともにローム土を含んでいる。断面観察等から人為堆積と思われる。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第10号土坑（ＳＫ－10）（図25）

［位置と確認］本遺構は調査区中央部の緩斜面で、グリッドＤＬ-99に位置している。第Ⅲ層を精査中に確認した。
［平面形・規模］平面形は側縁部が直線的で、端部が丸みを有する楕円形である。規模は、長径（0.6）m・短径0.42mを測る。
［壁・底面］壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁18cm・西壁６cm・南壁不明・北壁８cmを測る。底面は鍋底状を呈する。
［堆積土］堆積土は２層に区分できた。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第11号土坑（ＳＫ－11）（図25）

［位置と確認］本遺構は調査区中央部の緩斜面で、グリッドＤＫ-98に位置している。第Ｖ層を精査中に確認した。

［平面形・規模］平面形は全体に丸みを有する円形である。規模は、長径0.94m・短径0.85mを測る。
［壁・底面］壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁14cm・西壁12cm・南壁14cm・北壁14cmを測る。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］堆積土は２層に区分できた。断面観察等から自然堆積と考えられる。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

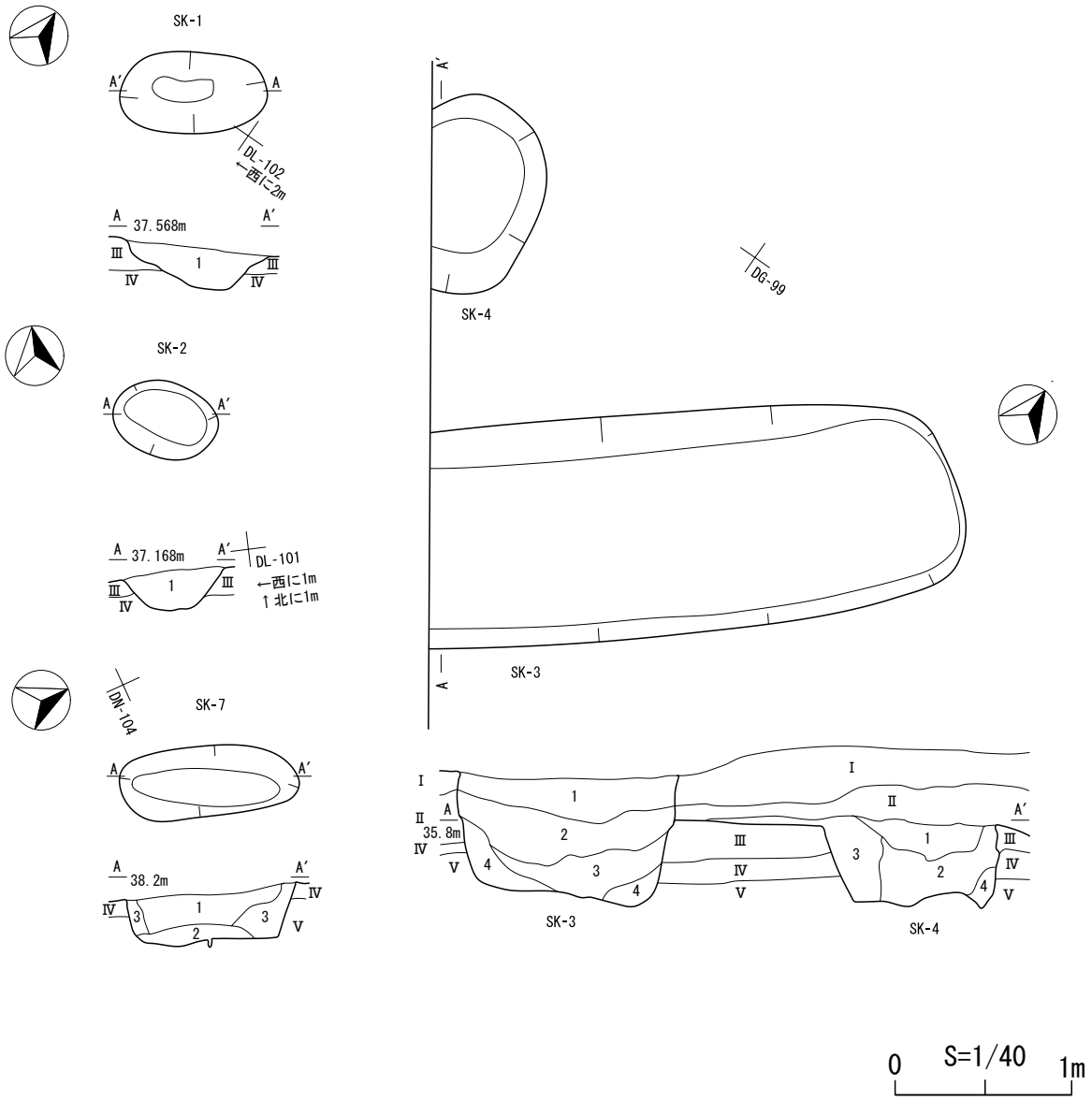
第12号土坑（ＳＫ－12）（図25）

［位置と確認］本調査は調査区中央部の緩斜面で、グリッドＤＪ-103・104に位置している。
［平面形・規模］平面形は側縁部が中にえぐれる不整形を呈する。規模は、長径1.32m・短径0.88mを測る。
［壁・底面］壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁27cm・西壁19cm・南壁24cm・北壁17cmを測る。底面は全体に起伏があり、軟弱な作りである。
［堆積土］堆積土は３層に区分できた。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第13号土坑（ＳＫ－13）（図25）

［位置と確認］本調査は調査区北側の緩斜面で、グリッドＤＩ-104に位置している。第Ⅳ層面を精査中に遺構を確認した。
［平面形・規模］平面形は全体に丸みを有する楕円形である。規模は、長径0.75m・短径0.44mを測る。
［壁・底面］壁は東壁が底面から上端にかけて垂直に立ち上がり、他の壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁15cm・西壁24cm・南壁16cm・北壁22cmを測る。底面は全体に起伏があり、軟弱な作りである。
［堆積土］堆積土は３層に区分できた。全体にローム土が混入している。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

（成田）



第１号土坑
1層　黒色土(10YR1.7/1)と黒褐色土(10YR2/2)の混合土　褐色土(10YR3/4)5%

第２号土坑
1層　黒褐色土(10YR2/2)と黒色土(10YR2/1)の混合土 アワズナブロック15%

第３号土坑
1層　黒色土　10YR1.7/1　炭化物(φ5mm以下)3%、パミス(φ1mm以下)2%
2層　暗褐色土 10YR3/4　褐色土(10YR4/6)15%、黒色土(10YR1.7/1)7%、炭化物中(φ1mm以下)1%
3層　褐色土　10YR4/6　暗褐色土(10YR3/4)5%
4層　黒色土　10YR2/1　黒褐色土(10YR2/2)25%、褐色土(10YR4/6)7%

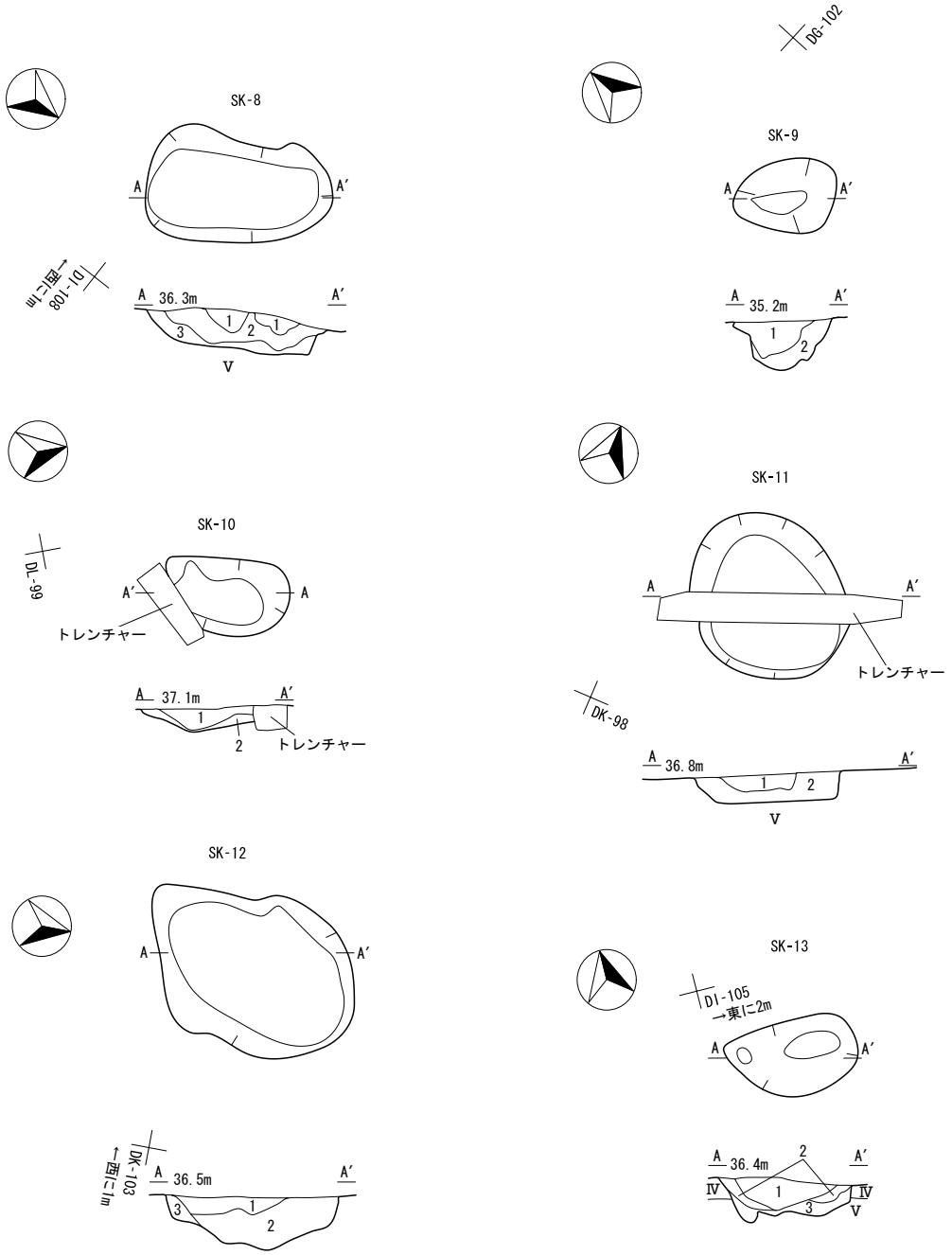
第４号土坑
1層　黒褐色土 7.5YR2/2　黒褐色土(10YR3/2)30%、炭化物(φ5mm以下)7%、かたい土がブロック状に混入
2層　暗褐色土 7.5YR3/4　黒褐色土(10YR3/2)と暗褐色土(7.5YR3/3)20%のかたい土
3層　暗褐色土 10YR3/3　黒褐色土(10YR2/2)15%、褐色土(10YR4/4)7%
4層　暗褐色土 10YR3/4　褐色土(10YR4/4)25%、炭化物(φ2mm以下)3%

第５号土坑
1層　黒褐色土(10YR2/3)と黒褐色土(10YR2/2)の混合土　暗褐色土(10YR3/4)10%、アワズナ5%
2層　暗褐色土 10YR3/4　黄褐色土(10YR5/8)30%、黒褐色土(10YR2/2)10%
3層　暗褐色土(10YR3/4)と黄褐色土(10YR5/8)の混合土　黒褐色土(10YR2/2)5%

第６号土坑
1層　黒色土(10YR1.7/1)と暗褐色土(10YR3/3)の混合土　明黄褐色土(10YR6/6)3%、アワズナ1%
2層　黒褐色土 10YR2/3　明黄褐色土(10YR6/8)30%、黒色土(10YR1.7/1)10%

第７号土坑
1層　黒褐色土 10YR2/2　暗褐色土(10YR3/4)10%、褐色土(10YR4/4)8%
2層　暗褐色土 10YR3/3　明黄褐色土(10YR6/6)20%、黄橙色土(10YR7/8)5%、黒褐色土(10YR2/2)3%
3層　黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/8)の混合土

図24　土坑（１）



0 S=1/40 1m

第８号土坑
1層　黒色土　10YR1.7/1　パミス極小(φ1mm以下)1%
2層　黒褐色土(10YR2/3)と暗褐色土(10YR3/4)の混合土　黄褐色土(10YR5/8)15%
3層　黄褐色土 10YR5/8　　暗褐色土(10YR3/4)3%

第９号土坑
1層　黒褐色土 10YR2/2　明黄褐色土(10YR6/8)30%
2層　黒色土　10YR2/1　黒褐色土(10YR2/3)15%、明黄褐色土(10YR6/8)15%

第10号土坑
1層　黒色土　10YR2/2　黄褐色土(10YR5/8)10%
2層　褐色土(10YR4/4)と黄褐色土(10YR5/8)の混合土　暗褐色土(10YR3/3)3%

第11号土坑
1層　黒褐色土(10YR2/3)と褐色土(10YR4/6)の混合土　黒色土(10YR2/1)5%、浮石(φ1～2mm)1%
2層　黄褐色土(10YR5/6)と暗褐色土(10YR3/4)の混合土　黒色土(10YR2/1)15%、浮石(φ1～2mm)1%

第12号土坑
1層　黒色土(10YR2/1)と黒褐色土(10YR2/2)の混合土　黄褐色土(10YR5/8)10%
2層　黒褐色土 10YR2/3　浮石(φ1～10mm)15%、黒色土がブロック状に混入
3層　暗褐色土(10YR3/4)と黄褐色土(10YR5/8)の混合土　黒褐色土(10YR2/3)3%

第13号土坑
1層　黒褐色土 10YR2/2　黒褐色土(10YR2/3)20%、黄褐色土(10YR5/8)10%
2層　暗褐色土 10YR3/3　浮石20%、黒褐色土混入
3層　褐色土　10YR4/4　全面にロームを含みブロック状に黒褐色土混入

図25　土坑(２)

２　溝状土坑

溝状土抗は４基検出した。

第１号溝状土坑（ＳＶ－１）（図26）

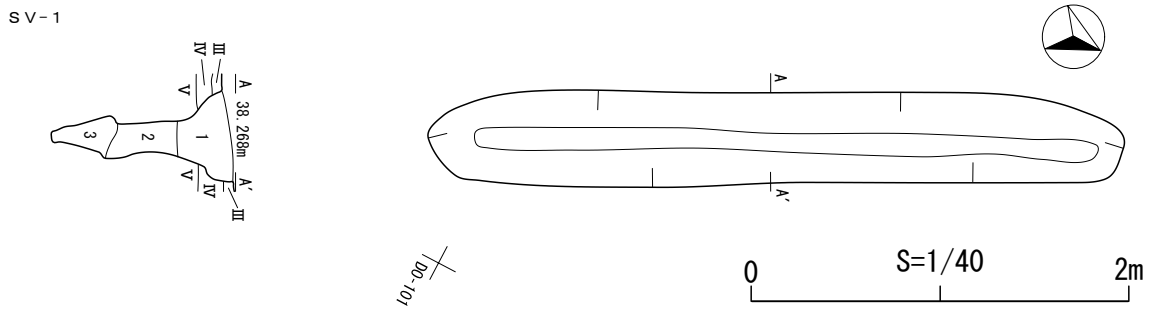
［位置と確認］本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドＤＮ-100・101に位置している。第Ⅲ層を精査中に楕円形の落ち込みを確認した。北側約５ｍに第２号溝状土坑を検出している。

［平面形・規模］平面形は側縁部が直線的で、両端部が丸みを有する楕円形の形態を呈する。規模は、開口部が長径3.64ｍ・短径0.51ｍ、坑底面が長径3.26ｍ・短径0.12ｍを測る。

［壁・底面］壁は坑底面から上端にかけて立ち上がり、開口部に向かって広がる。壁高は、東壁96㎝・西壁92㎝・南壁97㎝・北壁91㎝を測る。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］堆積土は３層に区分できた。第３層中にローム土が混入している。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。



第１号溝状土坑
1層　黒色土　10YR2/1　黒褐色土(10YR2/2)20%、黒褐色土(10YR2/3)10%
2層　黒色土　10YR1.7/1　褐色土(10YR4/6)30%、明黄褐色土(10YR6/6)10%、パミス(φ1～5mm以下)10%
3層　黒褐色土　10YR2/2　浅黄橙色土5%、黄褐色土(10YR5/6)5%

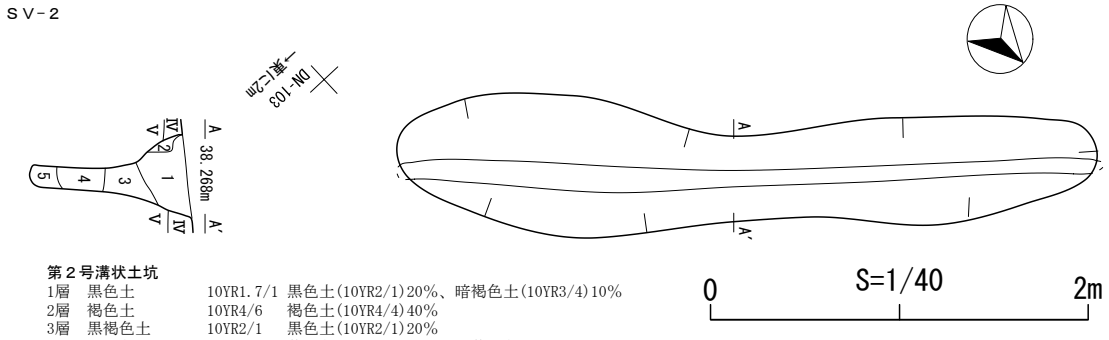
図26　第１号溝状土坑

第２号溝状土坑（ＳＶ－２）（図27）

［位置と確認］本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドＤＮ-103・104に位置している。第Ⅳ層を精査中に楕円形の落ち込みを確認した。北側に第３号溝状土抗、南側に第１号溝状土抗を検出した。

［平面形・規模］平面形は側縁部から孤状を呈し端部に丸みを呈する形態である。規模は、開口部が長径3.65ｍ・短径0.47ｍ、坑底面が長径3.76ｍ・短径0.09ｍを測る。

［壁・底面］壁は東・西壁が坑底面から上端にかけて垂直に立ち上がり、上端から開口部にかけて広



第２号溝状土坑
1層　黒色土　10YR1.7/1　黒色土(10YR2/1)20%、暗褐色土(10YR3/4)10%
2層　褐色土　10YR4/6　褐色土(10YR4/4)40%
3層　黒褐色土　10YR2/1　黒色土(10YR2/1)20%
4層　黒褐色土　10YR2/1　黄褐色土(10YR5/6)10%、黄褐色土(10YR5/8)5%
5層　にぶい黄橙色土　10YR7/4

図27　第２号溝状土坑

がる。南・北壁は開口部から抗底面にかけて内部に傾斜している。壁高は、東壁80㎝・西壁76㎝・南壁84㎝・北壁77㎝を測る。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］堆積土は５層に区分できた。第４・５層の覆土下位の堆積土はローム土を主体とした堆積土である。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第３号溝状土坑（ＳＶ－３）（図28）

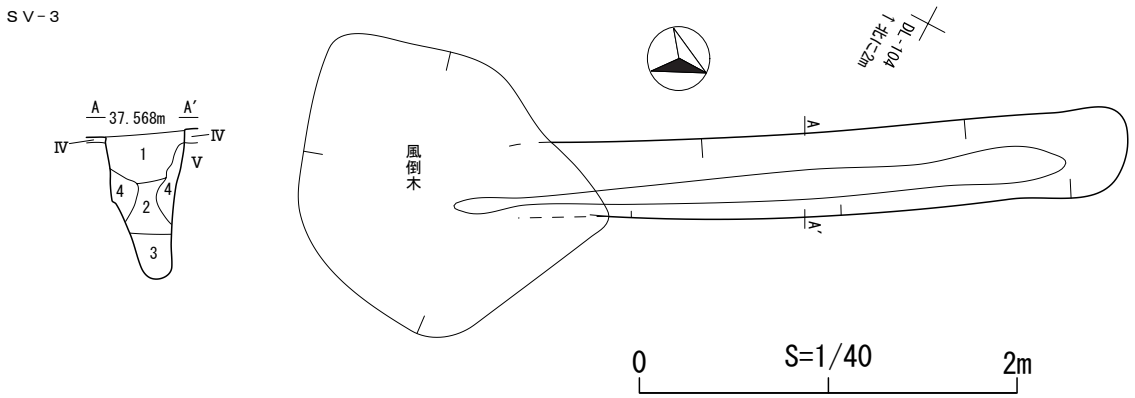
［位置と確認］本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドＤＬ-104・105に位置している。第Ⅳ層を精査中に楕円形の落ち込みと南側に風倒木を確認した。風倒木との新旧関係は本遺構が古い。

［平面形・規模］平面形は側縁部が直線的で、端部が丸みを有する楕円形で、形態は第１号溝状土坑と類似している。規模は、開口部が長径（3.04）ｍ・短径0.44ｍ、坑底面が長径3.22ｍ・短径0.15ｍを測る。

［壁・底面］壁は開口部が坑底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁75㎝・西壁72㎝・南壁99㎝・北壁60㎝を測る。底面は、ほぼ平坦である。

［堆積土］堆積土は４層に区分できた。第４層は壁面の崩落土と考えられる。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。



第３号溝状土坑
1層　黒色土　　10YR1.7/1　黄褐色土(10YR5/8)20%、アワズナ15%
2層　黒色土(10YR1.7/1)と黒褐色土(10YR2/2)の混合土　黄褐色土(10YR5/8)15%
3層　明黄褐色土 10YR6/8　　褐色土(10YR5/8)10%、黒色土(10YR1.7/1)10%、黄橙色土(10YR7/6)10%
4層　明黄褐色土 10YR6/8　　暗褐色土(10YR3/4)30%

図28　第３号溝状土坑

第４号溝状土坑（ＳＶ－４）（図29）

［位置と確認］本遺構は調査区の南側で、グリッドＤＮ・ＤＯ-94に位置している。第Ｖ層を精査中に楕円形の落ち込みを確認した。

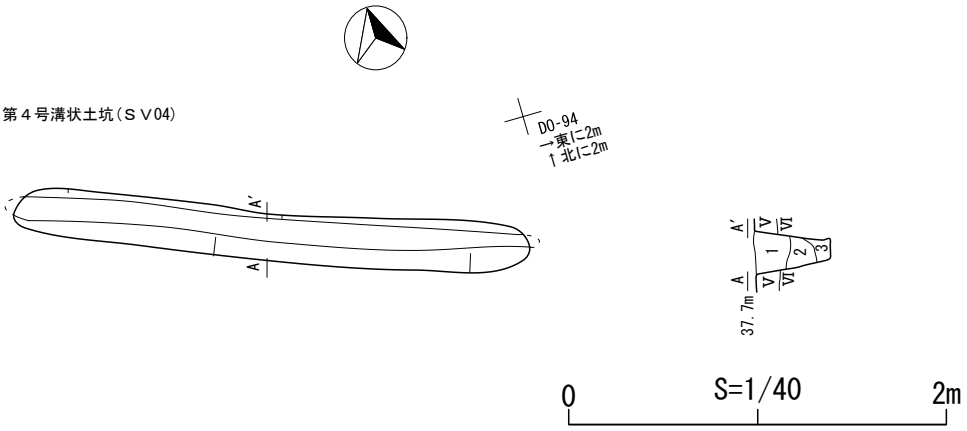
［平面形・規模］平面形は西側縁が直線的で、端部が丸みを有する楕円形である。規模は、開口部が長径2.72ｍ・短径0.26ｍ、坑底面が長径2.8ｍ・短径0.1ｍを測る。

［壁・底面］壁は開口部から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁35㎝・西壁30㎝・南壁40㎝・北壁42㎝を測る。

［堆積土］堆積土は３層に区分できた。第１・２層はローム土を全面に含んでいる。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

（成田）



第４号溝状土坑
1層　にぶい黄橙色土　10YR7/3　浮石を多量に含み、黒褐色土がブロック状に混入
2層　黄橙色土　10YR5/6　全面にローム土と粘土を含む
3層　暗褐色土　10YR3/3　浮石5%

図29　第４号溝状土坑

３　溝跡

本遺構から溝は１基検出した。

第１号溝跡（ＳＤ－１）（図30）

［位置と確認］本遺構は調査区の南側の緩斜面で、グリッドＤＯ-92、ＤＰ・ＤＱ-93に位置している。第Ｉ層を除去後に溝を確認した。

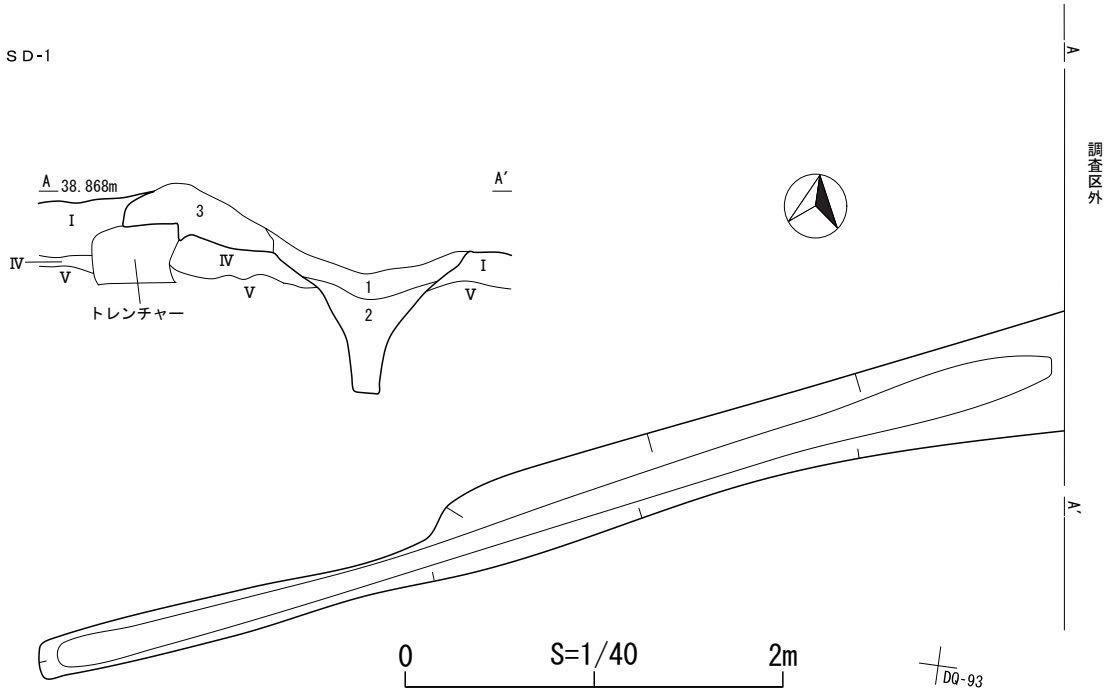
［平面形・規模］東側から西側にかけて幅が狭くなる形態である。規模は、開口部が長径（5.6）ｍ・短径0.4ｍ、坑底面が長径（5.34）ｍ・短径0.15ｍを測る。

［壁・底面］壁は底面から垂直に立ち上がり、開口部にかけて広がる。壁高は、東壁62㎝・西壁89㎝・南壁62㎝・北壁68㎝を測る。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］堆積土は溝の内部が２層に区分できた。第３層は溝の北側にあり、溝を掘削した際に盛土したものと考えられる。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

（成田）



第1号溝跡
1層　黒褐色土 7.5YR2/2 黒褐色土(10YR2/3)20%、暗褐色土(10YR3/3)20%、黄褐色土(10YR5/8)10%
2層　暗褐色土 10YR3/4　黒褐色土(10YR2/3)30%、明黄褐色土(10YR6/6)10%、黄褐色土(10YR5/8)10%
3層　黄褐色土 10YR5/8　明黄褐色土(10YR6/6)20%、黒褐色土(10YR2/2)10%

図30　第１号溝跡

４　ピット群（図31）

本遺跡からは23個のピットを検出したが、ピット群として報告する。

［位置と確認］本調査区の北側緩斜面で、グリッドＤＬ-109～111、ＤＨ・ＤＩ-109に位置している。第Ⅳ層を精査中に確認した。

［分布］Ｐ１～Ｐ21は、斜面に長さ７ｍで検出しており、グリッドＤＬ-111を中心に２列に配置している。Ｐ22・23は、Ｐ１～Ｐ21の西側８ｍで対で検出した。

［形態・規模］形態は、円形・楕円形・不整形であり、円形が主体をしめる。規模は30㎝内外の大きさが多い。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］本遺構の性格及び用途であるが、遺物が出土せず時期が明確ではないが、ピット内の堆積土が第Ⅰ層の黒色土と類似しており、時期的には近世及び近代の時期の可能性が高い遺構である。直列状に位置していることから、放牧の柵の可能性も考えられるが、断定はできない。

（成田）

第２節　遺構外出土遺物

１　土器（図32－１～16）

土器はＤＨ-100・101を中心として約10ｍ以内の範囲に散在して出土し、総剥片数65点が出土した。１・２は、口縁部破片であり、同一個体と思われる深鉢形である横位沈線を巡して区画帯を構成し、４条を一単位とした稚拙な山形状文様を施文している。３～９は、胴部破片であり節の細かい単節を用いている。10～14は、胴部破片で撚糸文を施文し、15は深縁形胴部の無文土器である、16は、平底で底部寄りに縄文を施文している深鉢形土器である。

２　石器（図32－17～21）

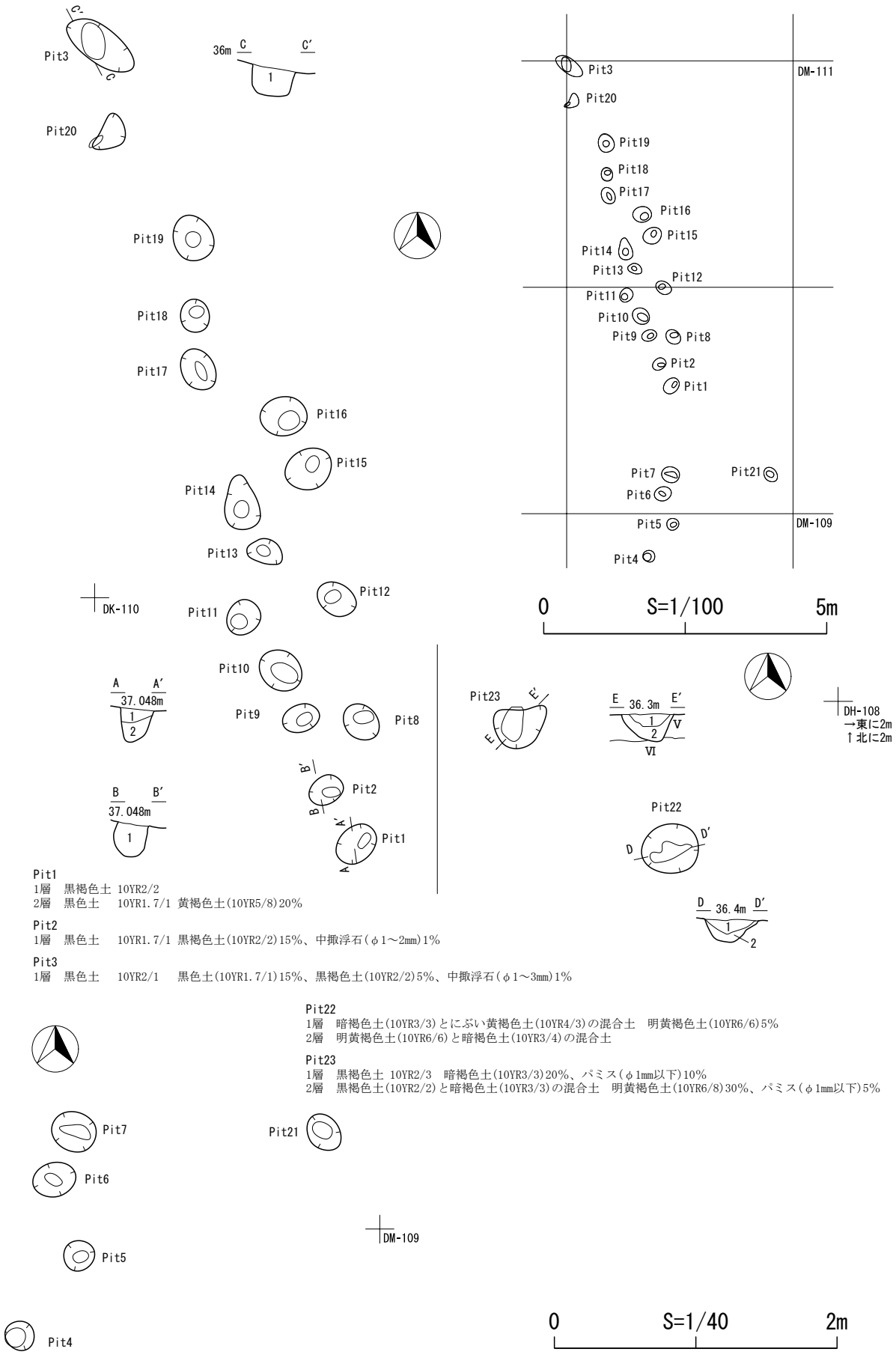
石器は剥片石器が３点、礫石器が２点出土した。

剥片石器（17～19）は、一部に調整剥離がみられる不定形石器である、石質は頁岩である。

礫石器（20・21）は、片面に一部スリがみられるものであり、安山岩を使用している、21は一部欠損している。

（成田）

ピット群



Pit1
1層　黒褐色土 10YR2/2
2層　黒色土　10YR1.7/1 黄褐色土(10YR5/8)20%

Pit2
1層　黒色土　10YR1.7/1 黒褐色土(10YR2/2)15%、中撥浮石(φ1～2mm)1%

Pit3
1層　黒色土　10YR2/1　黒色土(10YR1.7/1)15%、黒褐色土(10YR2/2)5%、中撥浮石(φ1～3mm)1%

Pit22
1層　暗褐色土(10YR3/3)とにぶい黄褐色土(10YR4/3)の混合土　明黄褐色土(10YR6/6)5%
2層　明黄褐色土(10YR6/6)と暗褐色土(10YR3/4)の混合土

Pit23
1層　黒褐色土 10YR2/3　暗褐色土(10YR3/3)20%、パミス(φ1mm以下)10%
2層　黒褐色土(10YR2/2)と暗褐色土(10YR3/3)の混合土　明黄褐色土(10YR6/8)30%、パミス(φ1mm以下)5%

図31　ピット群

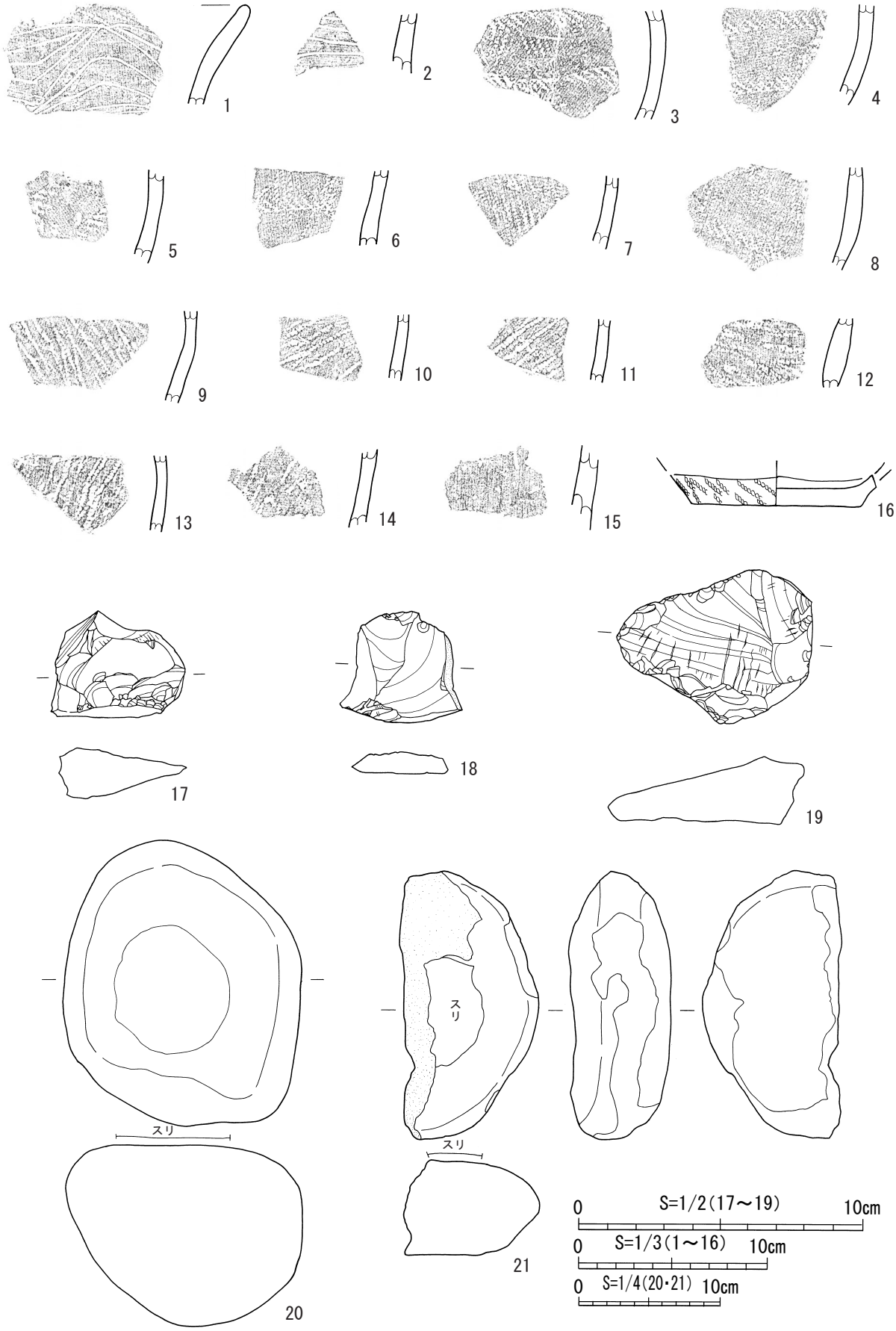

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
スリ
スリ
スリ
20
21
0 S=1/2(17～19) 10cm
0 S=1/3(1～16) 10cm
0 S=1/4(20・21) 10cm

図32　遺構外出土遺物

第３章　まとめ

調査は、平成18年度の確認調査の結果を受けて、2,800㎡の本調査を実施した。調査の結果、土坑23基・溝状土抗４基・溝１基・ピット群１基の計29基を検出した。土坑は、形態が円形・不整形を呈しており、遺構内からの遺物は出土しなかったために、明確な時期を決定することができなかった。堆積土は自然堆積によるものが多く占める。

溝状土抗は、調査区東側の標高約37ｍの近辺から多く検出し、その長軸方向は南北を示す。西側に向かった小谷が存在するため、小谷に向かう獲物を捕獲するために本遺構を設置した可能性が高い。溝は第Ⅰ層中を掘り込んで構築しており、近代の排水溝と考えられる。ピット群は、堆積土中に第Ⅰ層土を混入している。時代及び時期を明確にすることはできなかったが、近世・近代の時期の柵列とも考えられる。

出土遺物は、すべて遺構外からの出土であり、グリッドＤＨ-100・101の調査区西側の第Ⅱ層中からの出土が多い、図32－15の無文土器を除き、土器の製作・文様の施文等から弥生時代の土器と考えられるものである。石器は、剥片石器及び礫石器が出土し、土器の時期に製作され使用したものと考えられる。

今回の報告は、限られた道路幅という制約された地区であり、遺跡の全体像を把握することは難しいが、当地区の南及び北側丘陵地区からは何ら遺物が出土しておらず、また、東側の丘陵区も集落の存在があるかどうか難しい状況である。このことから判断すると、小谷に向かう獲物を捕獲する狩猟場的な性格を有する遺跡と考えられる。

（成田）

倉越（２）遺跡

第24号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図5－1	覆土	土師器	甕	口縁部	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	

第33号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図6－1	覆土	土師器	坏	口縁～底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	内面黒色処理
図6－2	覆土	土師器	小型甕	口縁～底部	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	

第35号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図9－1	床面	土師器	坏	底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図9－4	3層	土師器	甕	完形	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
図9－5	2、3層	土師器	甕	口縁～胴部	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
図9－6	2、3層	土師器	甕	口縁～胴部	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
図10－7	S区1層、SE 2層、3層	土師器	甕	胴～底部	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
図10－8	1層、2層	土師器	甕	胴～底部	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
図10－9	2層	須恵器	甕	胴部	平行ﾀﾀｷ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
図10－10	2層	須恵器	甕	胴部	格子ﾀﾀｷ	ﾅﾃﾞ	

図番号	層位	種別	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
図9－2	床面	鉄製品	刀子	長さ17.5　幅2.2　厚さ0.5	77.8	
図9－3	ｶﾏﾄﾞ支脚	土製品	羽口	長さ24.8　幅11.7　孔径3.4	1,840.0	欠損品

図番号	層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
図10－11	3層	石器	敲磨器類	閃緑岩	長さ8.8　幅7.9　厚さ4.6	513.5	ｽﾘ
図10－12	3層	石器	敲磨器類	凝灰岩	長さ10.5　幅9.4　厚さ3.8	431.8	一部欠損、ﾀﾀｷ
図10－13	2層	石器	敲磨器類	流紋岩	長さ6.1　幅4.0　厚さ3.4	90.3	一部欠損、ｽﾘ
図10－14	2層	石器	敲磨器類	安山岩	長さ16.4　幅11.4　厚さ7.0	1,345.6	ｽﾘ

第36号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図11－1	2層	土師器	坏	口縁～底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図11－2	1層	土師器	坏	口縁～底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図11－3	1層	土師器	坏	口縁～底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ｽｽ付着跡？
図12－4	10層	土師器	坏	口縁～底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図12－5	1層	土師器	坏	口縁～底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図12－6	1層、2層、3層	土師器	甕	胴～底部	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	砂底
図12－7	1層、2層	土師器	甕	口縁部	ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	
図12－8	1層	土師器	坏	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図12－9	1層、3層	土師器	甕	口縁部	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 胴部ｹｽﾞﾘ	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 胴部ﾅﾃﾞ	
図12－10	ｶﾏﾄﾞ1層、3層	土師器	坏	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図12－11	10層	土師器	坏	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図12－12	1層、2層	土師器	坏	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図12－14	3層	土師器	甕	口唇部	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 胴部ﾍﾗﾅﾃﾞ	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 胴部ﾍﾗﾅﾃﾞ	
図12－17	1層、2層、3層	須恵器	甕	胴部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	

図番号	層位	種別	器種	法量(cm)	備考
図12－13	6層	木製品	椀？	長さ13.2　幅7.3　厚2.1	

図番号	層位	種別	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
図12－18	1層上面	銭貨	寛永通宝	長さ2.5　幅2.5　厚0.1	3.6	

図番号	層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
図12－15	6層	石器	不定形石器	軽石	長さ6.5　幅4.8　厚さ2.2	28.7	
図12－16	10層	石器	不定形石器	珪質頁岩	長さ4.1　幅4.4　厚さ1.0	12.9	

第37号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図13－1	1層	土師器	坏	口縁～底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ ﾍﾗﾅﾃﾞ	

第38号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図15－1	ｶﾏﾄﾞｿﾃﾞ部、2層、覆土	土師器	甕	口頸～胴部	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ｽｽ状炭化物
図15－2	ｶﾏﾄﾞ2層	土師器	甕	口頸～胴部	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
図15－3	床面、2層、Ⅱ層	土師器	甕	口頸～胴部	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	
図15－4	ｶﾏﾄﾞ2層	土師器	小型甕	口縁～底部	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	底面に木葉痕
図15－5	ｶﾏﾄﾞ2層	土師器	坏	口縁～底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	

図番号	層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
図15－6	床面	石器	敲磨器類	ﾃﾞｲｻｲﾄ	長さ7.7　幅6.2　厚さ6.2	360.0	ｽﾘ
図15－7	覆土	石器	敲磨器類	ﾃﾞｲｻｲﾄ	長さ(8.4)　幅6.5　厚さ5.4	440.0	一部欠損ｽﾘ
図15－8	床面	石器	石皿	流紋岩	長さ32.0　幅28.0　厚さ9.0	14,600.0	ｽﾘ
図15－9	覆土	石器	石皿	ﾃﾞｲｻｲﾄ	長さ17.8　幅15.7　厚さ6.5	2,180.0	一部欠損、ｽﾘとﾀﾀｷ

第62号土坑

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図18－1	1層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文ＬＲ		
図18－2	1層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文ＬＲ		

第64号土坑

図番号	層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
図18－3	1層確認面	石器	砥石	凝灰岩	長さ8.6　幅7.6　厚さ4.6	328.7	一部欠損、ｽﾘ

第68号土坑

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図18－4	1層	土師器	坏	底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	

第72号土坑

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図18－5	1層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文RL		

第77号土坑

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図18－6	1層	土師器	坏	口縁～底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図18－7	1層	土師器	坏	底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図18－8	1層	土師器	高台坏	底部	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	接合痕あり

第14号柱穴

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図20－1	1層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文RL		外面にｽｽ状炭化物付着

遺構外

図番号	グリッド・層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図21－1	VG-165･166･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	底部(平底)	縄文LR		底部に網代痕
図21－2	VC-158･Ⅰ層	縄文土器	深鉢	底部(平底)	縄文LR		内面にｽｽ状炭化物付着
図21－3	VC-166･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	底部(平底)	縄文LR		
図21－4	VC-163･Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部(平口縁)	縄文RL		
図21－5	VF-168･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	口縁部	縄文LR		
図21－6	VG-168･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	口縁部(平口縁)	縄文LR		
図21－7	表採	縄文土器	深鉢	口縁部(平口縁)	縄文LR		ｲﾈ科の茎(？)が混入
図21－8	VG-165･166･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文LR		外面にｽｽ状炭化物付着
図21－9	VG-168･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文LR		
図21－10	VD-168･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文LR		
図21－11	VG-168･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文LR		内面にｽｽ状炭化物付着
図21－12	VD-168･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文LR		
図21－13	VG-168･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文LR		
図21－22	VS-169･Ⅱ層	土師器	ﾛｸﾛ	口縁～底部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図21－23	VS-169･Ⅰ層	須恵器	甕	口縁部	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図21－24	VS-169･Ⅱ層	須恵器	甕	胴部	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
図21－25	VS-169･Ⅰ層	須恵器	甕	胴部	格子ﾀﾀｷ	ﾅﾃﾞ	

図番号	層位	種別	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
図21－14	表採	土製品	近世土人形	長さ4.1　幅2.2　厚さ1.0	7.0	

図番号	グリッド・層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
図21－15	VG-165･166･Ⅱ層	石器	敲磨器類	安山岩	長さ12.0　幅9.5　厚さ5.5	943.7	ｽﾘ
図21－16	VC-168･Ⅰ層	石器	敲磨器類	ﾃﾞｲｻｲﾄ	長さ8.2　幅8.1　厚さ4.9	45.7	ﾀﾀｷ
図21－17	VF-168･Ⅳ層	石器	石製品	凝灰岩	長さ2.3　幅1.9　厚さ0.4	1.8	一部欠損、中央部に穿孔
図21－18	VF-164･Ⅰ層	石器	不定形石器	珪質頁岩	長さ2.6　幅3.0　厚さ0.7	4.9	
図21－19	VF-164･Ⅰ層	石器	不定形石器	珪質頁岩	長さ5.8　幅2.5　厚さ0.9	12.4	
図21－20	VF-168･Ⅱ層	石器	不定形石器	珪質頁岩	長さ3.4　幅4.6　厚さ0.8	10.9	
図21－21	VE-169･Ⅱ層	石器	不定形石器	珪質頁岩	長さ3.3　幅4.0　厚さ1.0	8.7	

太田(2)遺跡

遺構外

図番号	グリッド・層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図32－1	DJ-103･Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	横位沈線の区画に山形状文様(沈線)		
図32－2	DH-101･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	口頸部	横位・斜位文様(沈線)		
図32－3	DI-100･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	二段の縄文(RL)		
図32－4	DI-100･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	二段の縄文(RL)		
図32－5	DH-100･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文(RL)		
図32－6	DI-100･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	回転方向を変えた縄文(RL)		
図32－7	DI-100･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文(RL)		
図32－8	DI-100･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	回転方向を変えた縄文(RL)		
図32－9	DH-101･Ⅰ層	縄文土器	深鉢	胴部	縄文(LR)		
図32－10	DI-100･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	撚糸文(R)		
図32－11	DH-100･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	撚糸文(R)		
図32－12	DH-101･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	口頸部	撚糸文(L)		
図32－13	DH-100･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	撚糸文(L)		
図32－14	DG-101･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	撚糸文(L)		
図32－15	DO- 95･Ⅰ層	縄文土器	深鉢	胴部	無文		
図32－16	DH-101･Ⅱ層	縄文土器	深鉢	底部	縄文(RL)		

図番号	グリッド・層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
図32－17	DG-100･Ⅱ層	石器	不定形石器	頁岩	長さ4.6　幅3.8　厚さ1.8	26.3	
図32－18	DH-101･Ⅱ層	石器	不定形石器	頁岩	長さ3.9　幅3.3　厚さ0.7	15.7	
図32－19	DJ-103･Ⅱ層	石器	不定形石器	頁岩	長さ6.9　幅5.2　厚さ2.3	97.0	
図32－20	DI-100･Ⅱ層	石器	敲磨器類	安山岩	長さ16.7　幅14.2　厚さ10.5	2,602.0	
図32－21	DG-100･Ⅱ層	石器	敲磨器類	安山岩	長さ(15.7)幅(8.0)　厚さ(5.5)	(550.0)	

第４編　自然科学分析

第１章　放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）

（株）加速器分析研究所

（１）遺跡の位置

倉越(２)遺跡は、青森県上北郡七戸町字倉越（北緯40°42′11″、東経141°09′46″）に所在する。

（２）測定の意義

竪穴住居の年代および集落の継続期間を明らかにしたい。

（３）測定対象試料

測定対象試料は、34号住居跡（SI-34）の４層から出土した木炭（07KURAKOSHI-SI34-38：IAAA-71789)、75号土坑（SK-75）の１層から出土した木炭（07KURAKOSHI-SK75-18：IAAA-71790)、合計２点である。

（４）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（５）測定方法

測定機器は、３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

（６）算出方法

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

２）BP年代値は、過去において大気中の^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る^{14}C年代である。

３）付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

４）δ^{13}Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。
δ^{13}補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで、　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し、標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、Δ^{14}Cは、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（１）式の^{14}C濃度を、δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2$$ （$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$$ （$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000 \quad (‰)$$

$$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、このΔ^{14}CあるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(pMC / 100)$$

５）^{14}C年代値と誤差は、１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

６）較正暦年代の計算では、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey 1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

（７）測定結果

SI-34から出土した木炭（07KURAKOSHI-SI34-38：IAAA-71789）の^{14}C年代が1420±40yrBP、SK-75から出土した木炭（07KURAKOSHI-SK75-18：IAAA-71790）の^{14}C年代が31770±190yrBPである。

暦年較正年代（1σ＝68.2％）は、SI-34出土の木炭が605～655AD、SK-75出土の木炭が30020～29620BCである。SK-75出土の木炭の年代は、土坑から出土した遺物との年代観とは対応しない。土坑底面出土試料であることから、掘り込まれた地層中の木炭であった可能性を検討する必要がある。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試　　料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-71789	試料採取場所 ： 青森県上北郡七戸町字倉越 倉越(2)遺跡 試料形態　：　木炭 試料名(番号) ： 07KURAKOSHI-SI34-38	Libby Age (yrBP)　：　1,420 ± 40 δ ^{13}C (‰)、(加速器)　＝　−23.44 ± 0.58 Δ ^{14}C (‰)　＝　−161.8 ± 3.6 pMC (%)　＝　83.82 ± 0.36
#2002-1	(参考)　δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C (‰)　＝　−159.2 ± 3.5 pMC (%)　＝　84.08 ± 0.35 Age (yrBP)　：　1,390 ± 30
IAAA-71790	試料採取場所 ： 青森県上北郡七戸町字倉越 倉越(2)遺跡 試料形態　：　木炭 試料名(番号) ： 07KURAKOSHI-SK75-18	Libby Age (yrBP)　：　31,770 ± 190 δ ^{13}C (‰)、(加速器)　＝　−24.22 ± 0.86 Δ ^{14}C (‰)　＝　−980.8 ± 0.4 pMC (%)　＝　1.92 ± 0.04
#2002-2	(参考)　δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C (‰)　＝　−980.8 ± 0.4 pMC (%)　＝　1.92 ± 0.04 Age (yrBP)　：　31,760 ± 190

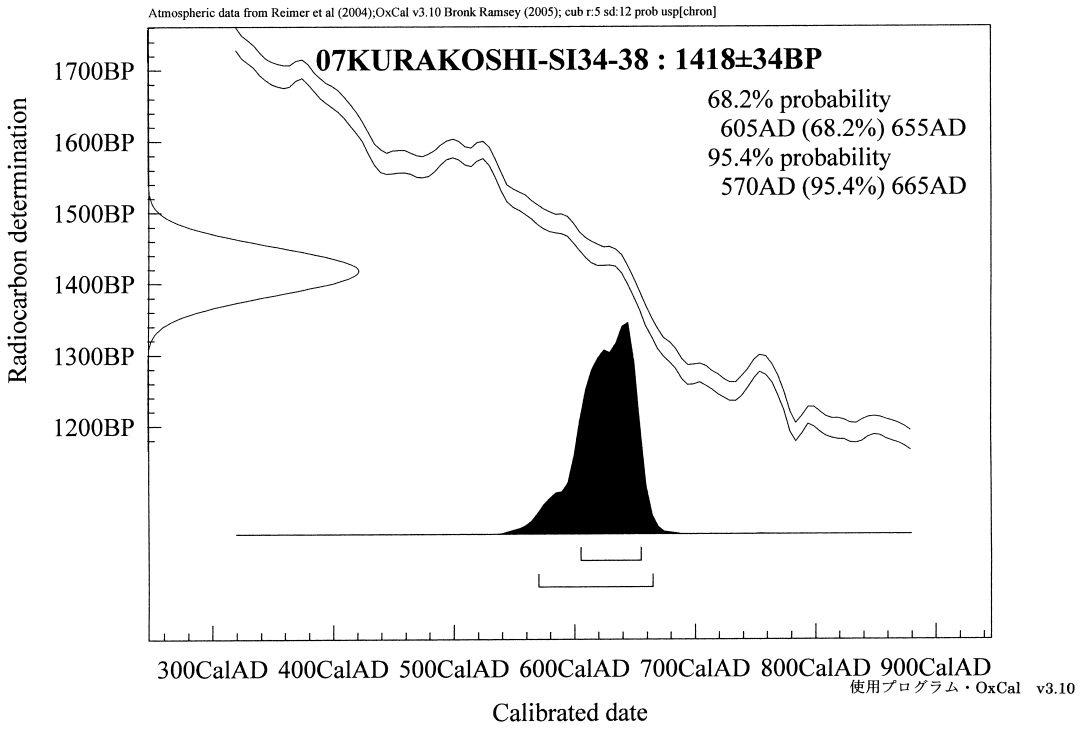
参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-71789	07KURAKOSHI-SI34-38	1418　± 34
IAAA-71790	07KURAKOSHI-SK75-18	31767　± 190

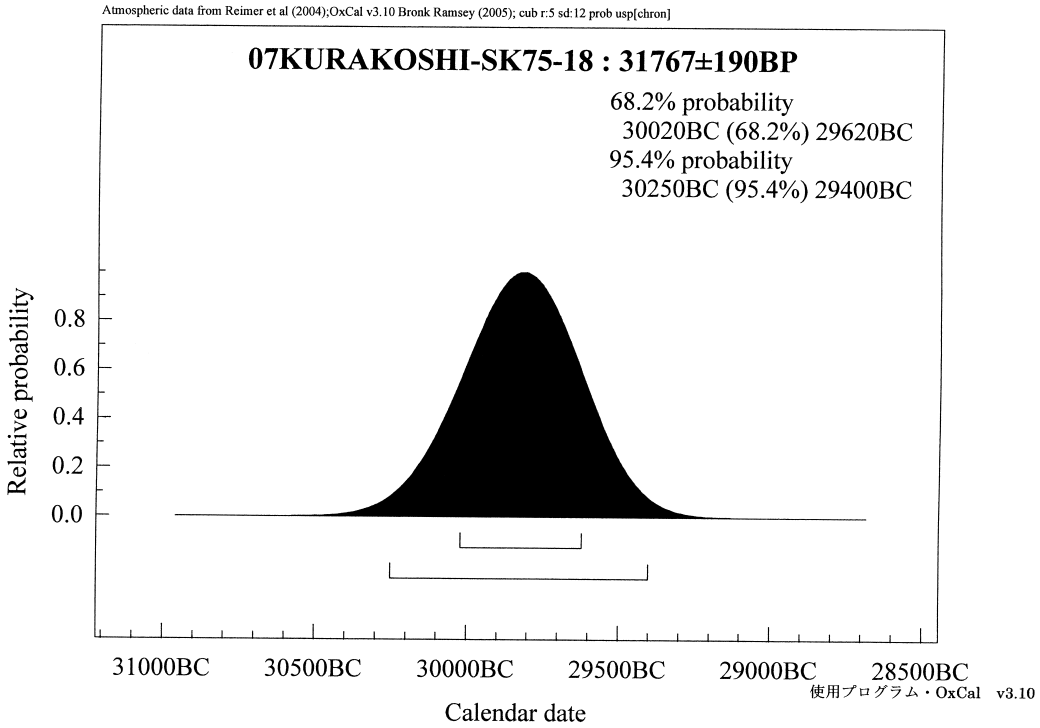
ここに記載する Libby　Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

試料番号	IAA Code No.	前処理方法	試料状態	処理前試料量	回収炭素量	燃焼量	精製炭素量	δ 13C (‰)〔加速器〕	Libby Age (yrBP)	(yrBP・丸め込みなし)	暦年較正1σ (yrcalBP)	暦年較正2σ (yrcalBP)
07KURAKOSHI-SI34-38	IAAA-71789	AAA処理	やや湿	95.66mg	8.08mg	4.60mg	3.12mg	−23.44±0.58	1420±40	1418±34	605-655AD (68.2%)	570-665 (95.4%)
07KURAKOSHI-SK75-18	IAAA-71790	AAA処理	やや湿	94.56mg	20.69mg	3.05mg	1.98mg	−24.22±0.86	31770±190	31767±190	30020-29620BC (68.2%)	30250-29400BC (95.4%)

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



写　真　図　版

2007年調査区全景　N→

2007年調査風景

2007年調査風景

2007年調査風景

2008年調査区全景　W→

2007年調査区全景　E→

写真１　倉越（２）遺跡調査全景・調査風景

2007年調査区沢　W→

2007年調査区沢セクション　N→

2007年調査区沢　W→

2007年調査区遠景　S→

2008年調査風景　W→

2008年調査区全景　W→

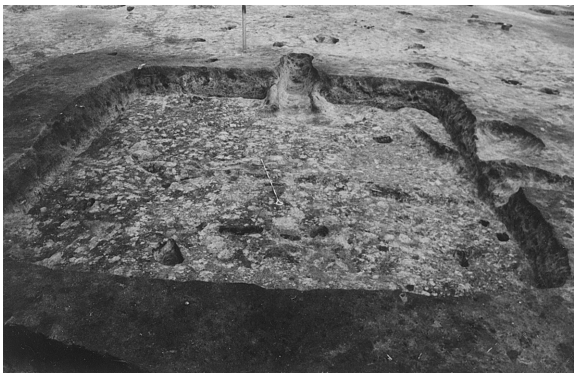
写真２　倉越（２）遺跡遠景・調査風景

第24号竪穴住居跡　完掘　S→

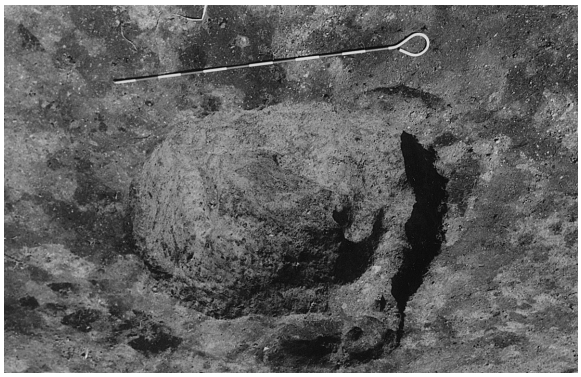
第33号竪穴住居跡　完掘　W→

第34号竪穴住居跡　確認面　S→

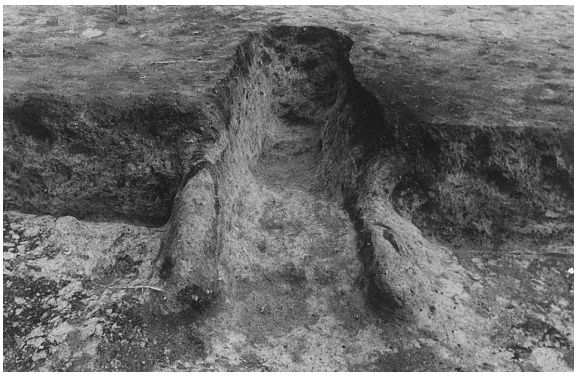
第34号竪穴住居跡　炭化材検出状況　S→



第34号竪穴住居跡　完掘　S→



第34号竪穴住居跡　北側ピット確認　E→



第34号竪穴住居跡　カマド完掘　S→

第34号竪穴住居跡　カマドＡＢセクション　W→

写真３　倉越（２）遺跡竪穴住居跡（１）

第35号竪穴住居跡　道物出土状況　S→

第35号竪穴住居跡　完掘　E→

第36号竪穴住居跡　遺物出土状況　E→

第36号竪穴住居跡　完掘　W→

第37号竪穴住居跡　木製品出土状況　E→

第37号竪穴住居跡　完掘　S→

第37号竪穴住居跡　東西セクション　S→

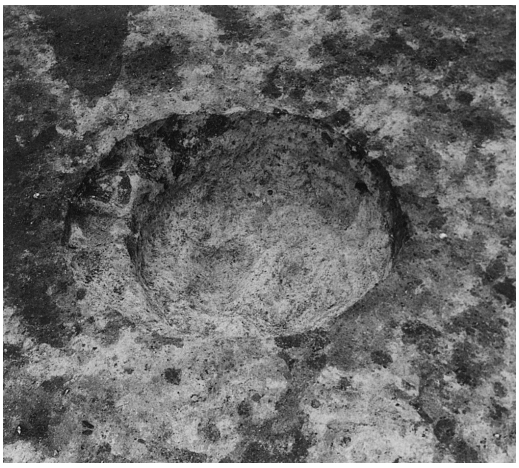
写真４　倉越（２）遺跡竪穴住居跡（２）

第38号竪穴住居跡　完掘　N→

第38号竪穴住居跡　カマド完掘　N→

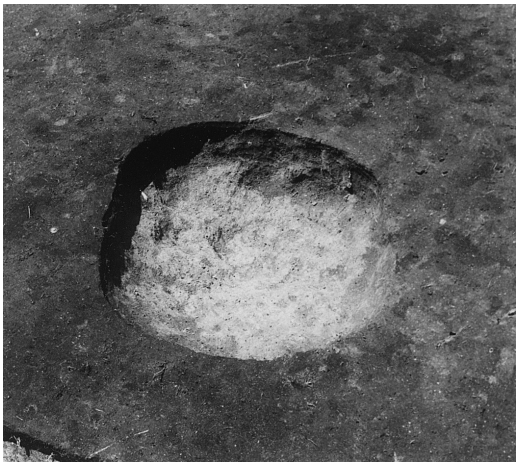
第38号竪穴住居跡　E→

写真５　倉越（２）遺跡竪穴住居跡（３）



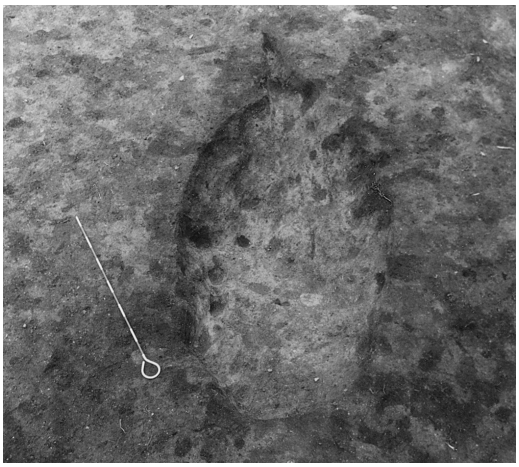
第60号土坑　完掘　E→

第61号土坑　完掘　S→



第62号土坑　完掘　E→

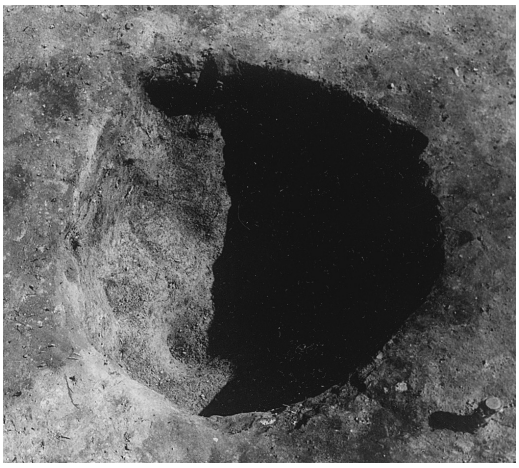
第66号土坑　完掘　N→



第69号土坑　完掘　S→

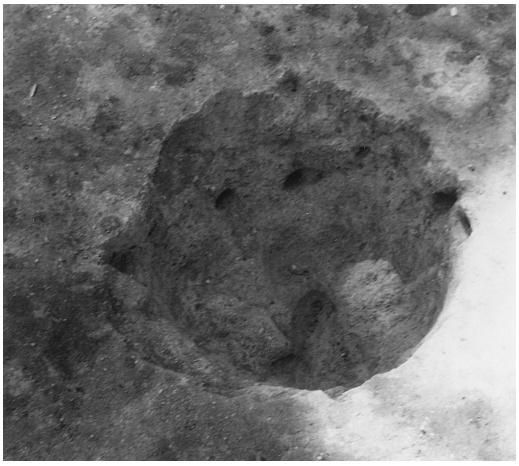
第67号土坑　完掘　N→

写真６　倉越（２）遺跡土坑（１）



第72号土坑　完掘　N→

第68号土坑　完掘　S→



第71号土坑　完掘　N→

第71号土坑　セクション　W→

第73号土坑　完掘　S→

第73号土坑　セクション　E→

写真７　倉越（２）遺跡土坑（２）

第74号土坑　完掘　N→

第80号土坑　完掘　N→

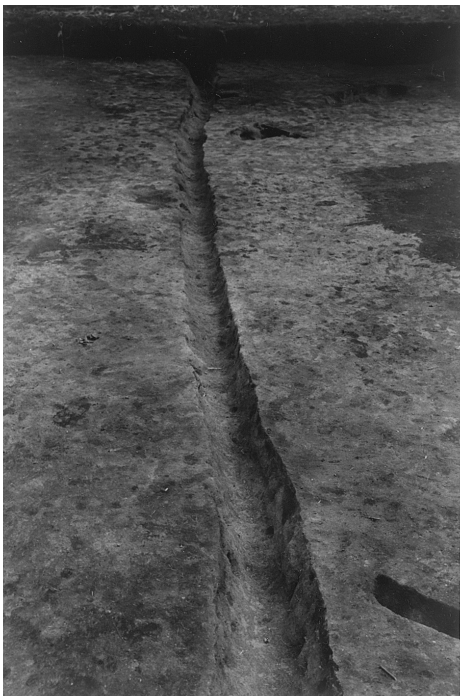
第75号土坑　炭化材出土状況　E→

第75号土坑　完掘　E→

第17号溝状土坑　完掘　S→

第17号溝状土坑　セクション　S→

写真８　倉越（２）遺跡土坑（３）・溝状土坑



第１号溝跡　完掘　N→

調査区南東ピット群確認　ＳＮ→

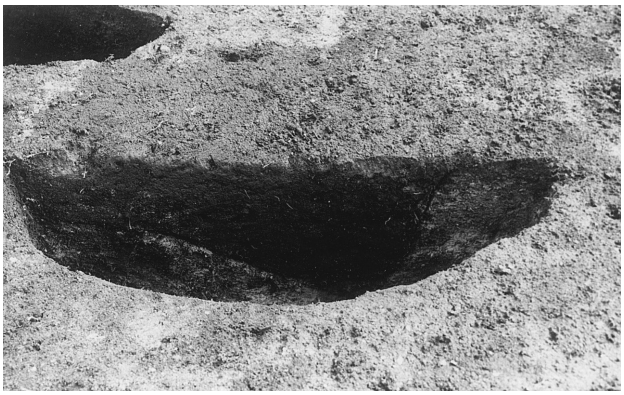
ピット群ピット２　セクション　E→

ピット群ピット２　完掘　S→

ピット群ピット５　セクション　E→

ピット群ピット６　完掘　S→

写真９　倉越（２）遺跡溝跡・ピット群（１）



ピット群ピット３　セクション　E→

ピット群ピット３　完掘　E→

ピット群ピット４　S→

ピット群ピット13　S→

ピット群ピット14　E→

ピット群ピット７・８　E→

写真10　倉越（２）遺跡ピット群（２）

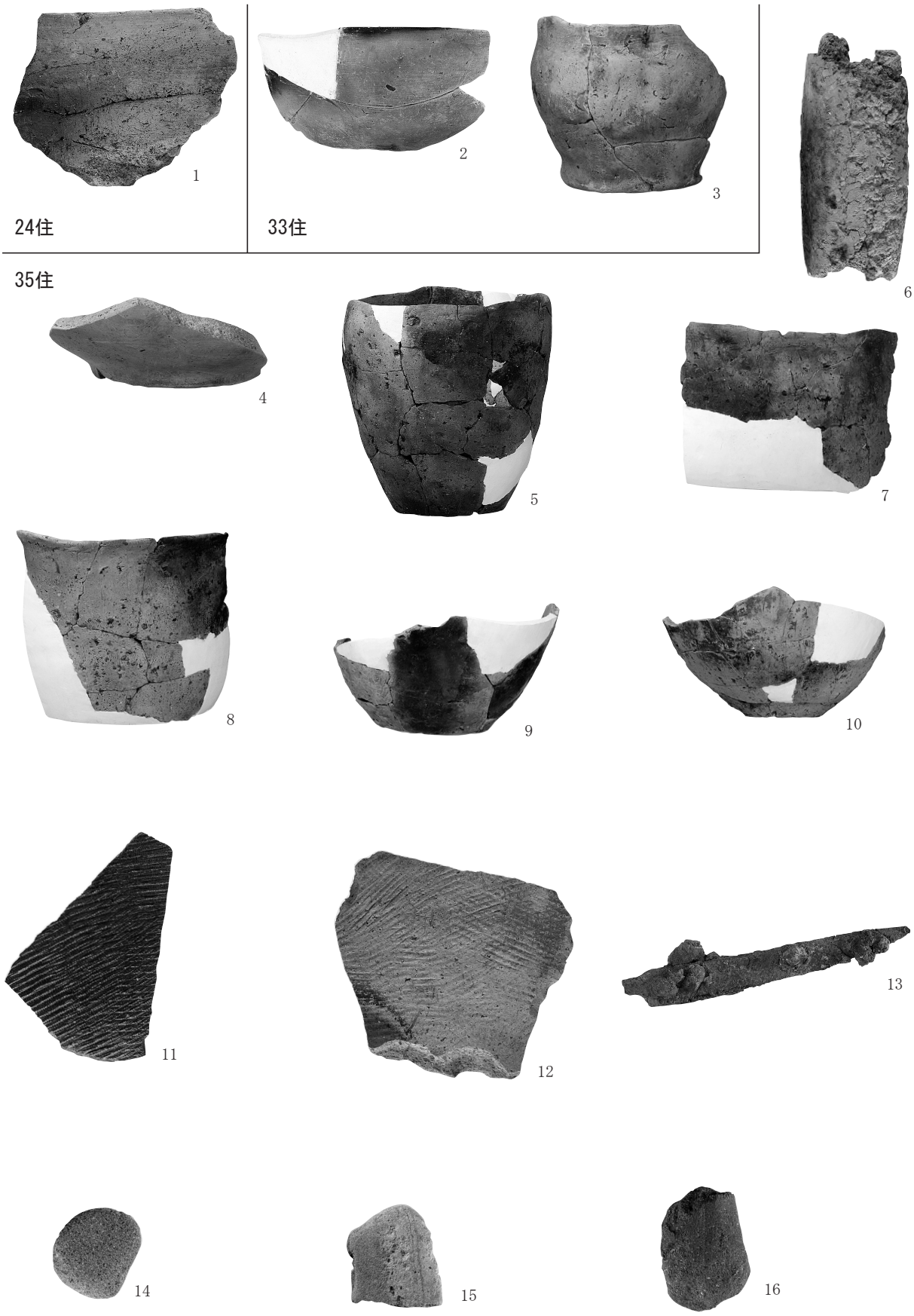


写真11　倉越（２）遺跡竪穴住居跡出土遺物（１）

36住

1

2

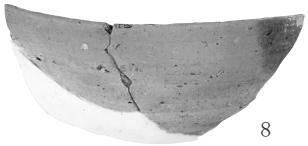
3

4

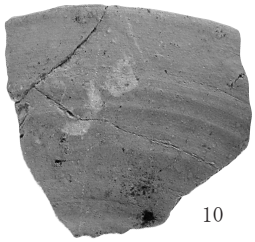
5

6

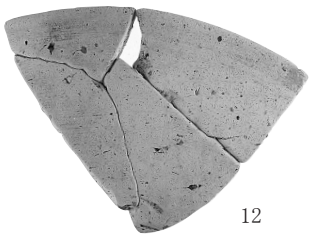
7


8

9


10

11


12

13

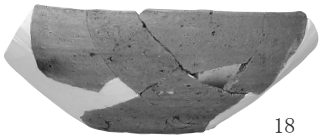
14

15

16

17

37住


18

38住

19

写真12　倉越（２）遺跡竪穴住居跡出土遺物（２）

38住

1

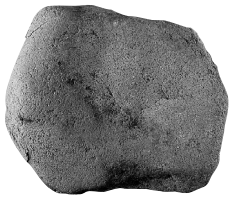
2

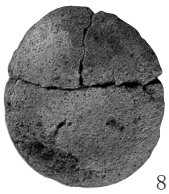
3

4

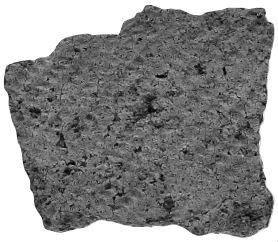
5

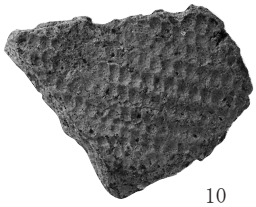
6


7


8

62土


9


10

64土

11

68土

12

72土

13

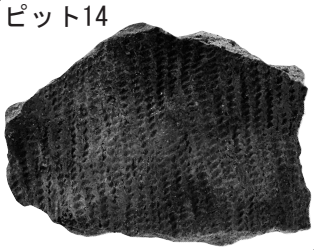
14

77土

15

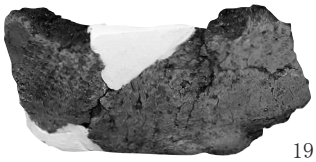
16

ピット14


17

遺構外

18


19

20

写真13　倉越（２）遺跡竪穴住居跡（３）・土坑・ピット群・遺構外出土遺物（１）

遺構外

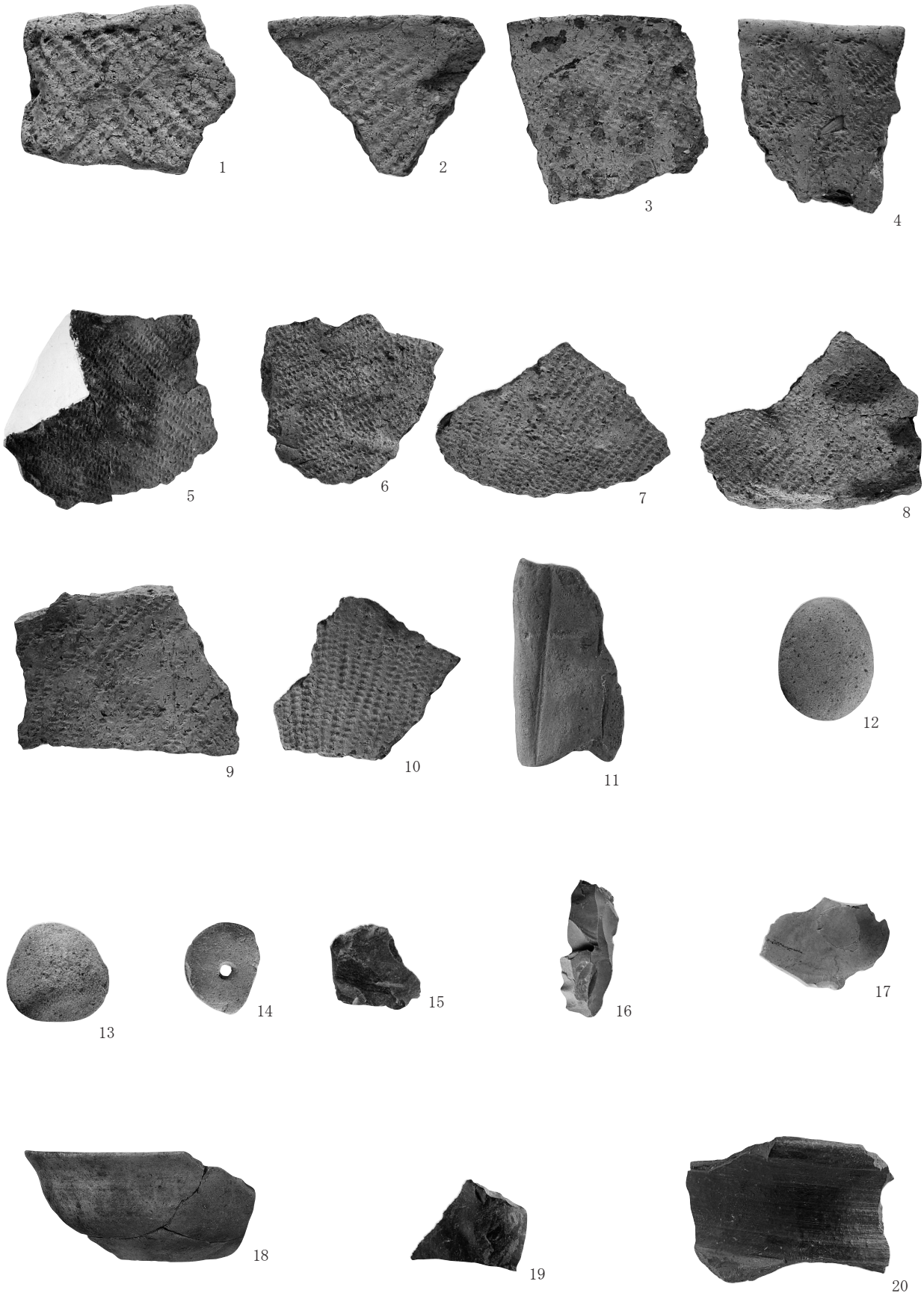


写真14　倉越（２）遺跡遺構外出土遺物（２）

遺跡遠景　S→

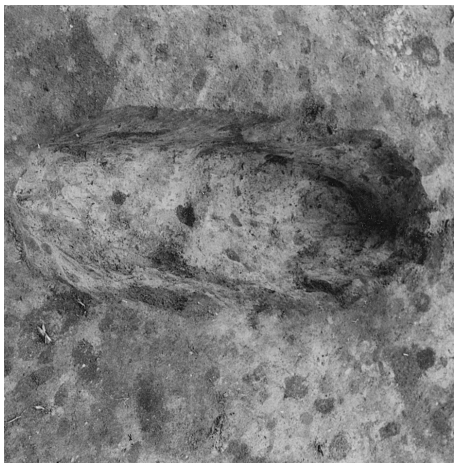
DH・DI－100グリッドⅡ層　S→

第１号土坑　完掘　E→

第４号土坑　完掘　E→

第２号土坑　完掘　W→

第３号土坑　完掘　E→



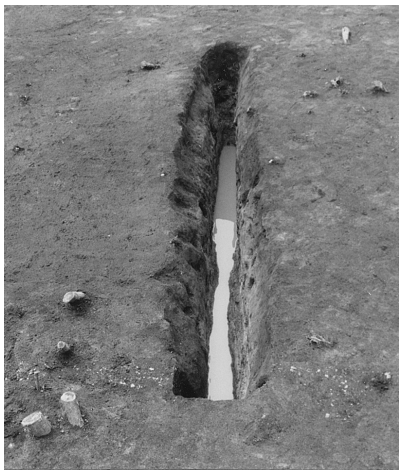
第７号土坑　完掘　N→

第13号土坑　完掘　E→

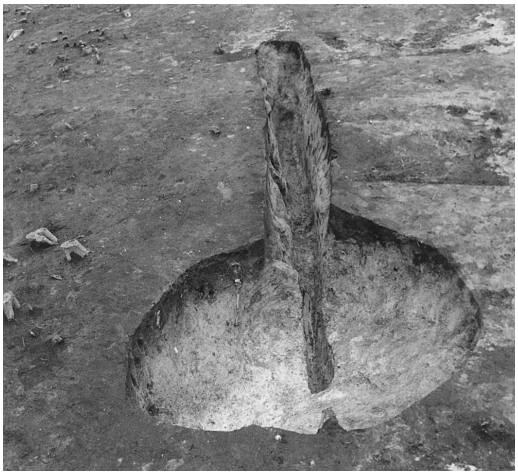
写真15　太田（２）遺跡遠景・土坑（１）

第11号土坑　N→

第12号土坑　N→



第１号溝状土坑　S→



第３号溝状土坑　S→

第２号溝状土坑　S→

第４号溝状土坑　S→

第１号溝跡　W→

第１号ピット群　S→

写真16　太田（２）遺跡土坑（２）・溝状土坑・溝跡・ピット群

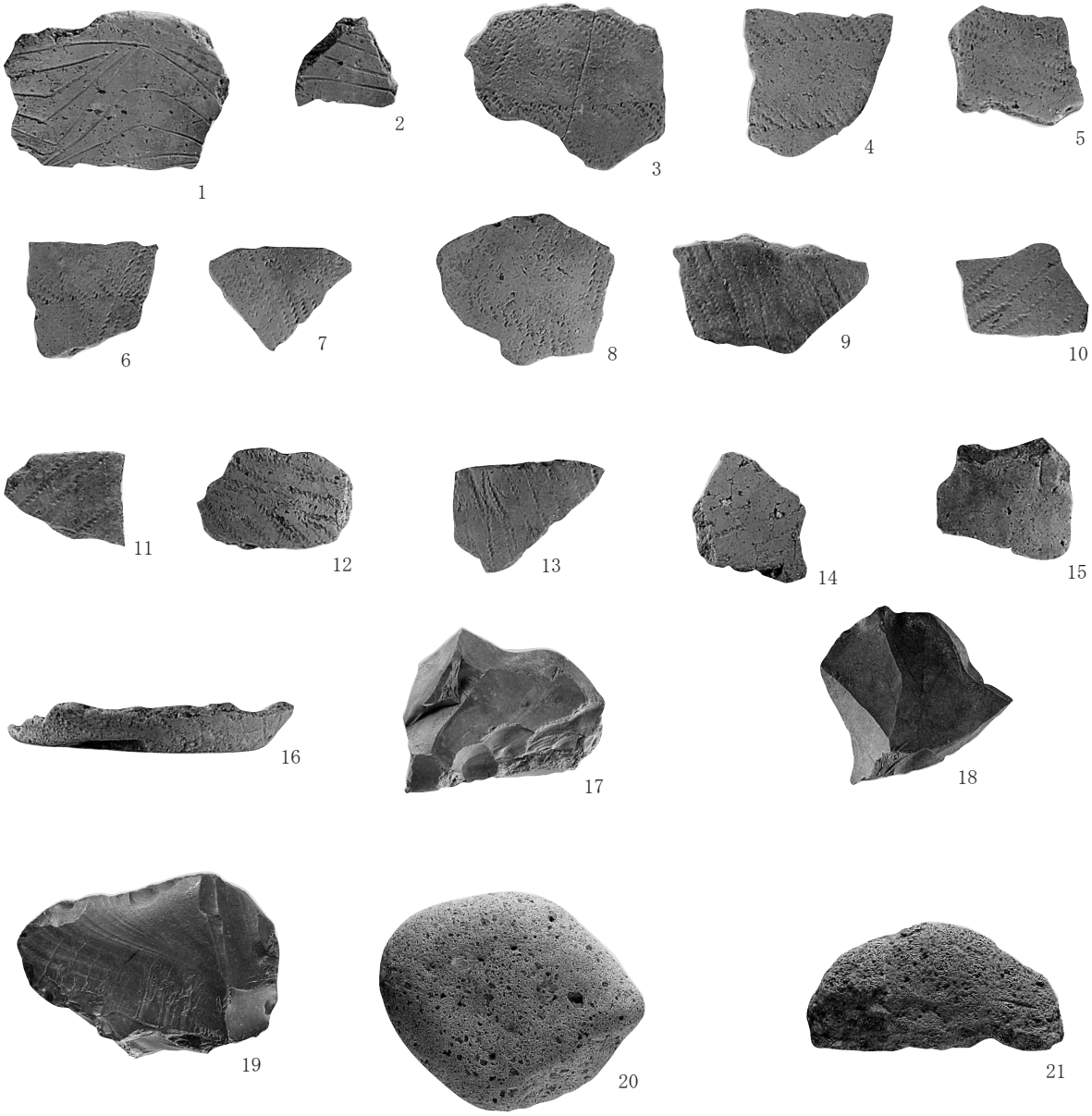


写真17　太田（２）遺跡出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	くらこしかっこにいせきさん　おおたかっこにいせき
書名	倉越（２）遺跡Ⅲ・太田（２）遺跡
副書名	国道４号七戸パイバス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第464集
編著者名	成田滋彦・大平哲世・工藤大
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042　青森県青森市大字新城字天田内152-15　TEL 017-788-5701
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	西暦2009年３月６日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本側地系 (Tokyo Datum) 世界測地系 (JGD 2000)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
倉越（２）遺跡（くらこしかっこにいせき）	青森県上北郡七戸町字倉越外（あおもりけん かみきたぐん しちのへまち あざくらこし）	02402	41064	40°42′11″	141°09′46″	20070717～20070928	1,300㎡	国道４号七戸パイバス建設事業に伴う事前調査
				40°42′01″	141°09′59″			
太田（２）遺跡（おおたかっこにいせき）	青森県上北郡七戸町字太田外（あおもりけん かみきたぐん しちのへまち あざおおた）		41089	40°41′12″	141°10′11″	20070829～20071012	2,800㎡	
				40°41′02″	141°10′24″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
倉越（２）遺跡	散布地	奈良時代		土師器	
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡４軒、溝跡１条、土坑19基	土師器・須恵器	
	狩猟場	時期不明	溝状土坑１基		
太田（２）遺跡	狩猟場	時期不明	溝状土坑４基、溝跡１条土坑10基、ピット群１	弥生時代土器・石器	

倉越（２）遺跡は、七戸市街より北東方向の約１㎞で、七戸川左岸の標高約40mの丘陵上に位置している。平成15・16年度に調査を実施し、奈良・平安時代の集落跡であることが確認されていた。今回が最終調査の第３次調査にあたる。今回の調査では奈良・平安時代の土器を検出している。また、竪穴住居跡及び土抗の構築年代は平安時代と考えられるので、奈良・平安時代の集落跡である。

太田（２）遺跡は、大林川右岸と川去川左岸に位置し、沢筋と台地が連なる台地の上にある。今回の調査では、弥生時代の土器と溝状土坑などを検出しており、狩猟場的な性格を持つ遺跡と考えられる。

青森県埋蔵文化財調査報告書　第464集

倉越（２）遺跡Ⅲ・太田（２）遺跡

－国道４号七戸バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日　2009年３月６日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042　青森市大字新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701　FAX 017-788-5702
印　　刷　高金印刷株式会社
〒038-0015　青森市千刈二丁目１-30
TEL 017-781-2244　FAX 017-781-2509